

令和6年度

第56回 全国小中学校環境教育研究大会(東京大会)

第60回 東京都小中学校環境教育研究発表会

## 21世紀「環境の世紀」への提言

# 持続可能な社会づくりのための環境教育の推進

— 環境教育によって育む学力と環境保全意識 —



日時 令和6年12月26日(木) 13時00分 ~ 16時45分  
会場 エコギャラリー新宿 東京都新宿区西新宿2-11-4 (新宿中央公園内)  
(新宿区立環境学習情報センター 新宿区立区民ギャラリー)  
対面開催 (後日期間限定録画配信)  
主催 全国小中学校環境教育研究会 東京都小中学校環境教育研究会  
後援 文部科学省 環境省 東京都教育委員会 新宿区教育委員会  
全国連合小学校長会 全日本中学校長会 東京都公立小学校長会  
東京都中学校長会 日本教育公務員弘済会東京支部 日本ESD学会  
日本環境教育学会 ESD活動支援センター 関東地方ESD活動支援センター

表紙・裏表紙の絵画ポスター

令和6年度 第27回全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール受賞作品

### 表表紙の絵画

#### ◆会長賞

小学校の部

大阪府 八尾市立曙川小学校 3年 久佛 叶芽 (くぶつ かなめ)

### 裏表紙の絵画

#### ■会長賞

中学校の部

静岡県 島田市立六合中学校 3年 奥村 天花 (おくむら あまは)

主 催：全国小中学校環境教育研究会

後 援：文部科学省 / 環境省 / 公益財団法人日本環境協会

協 賛：株式会社みずほフィナンシャルグループ

明治安田生命保険相互会社

丸紅株式会社

積水化学工業株式会社

# 目 次

目次	.....	1
大会次第	.....	2
挨拶 全国小中学校環境教育研究会 会長	關口 寿也	..... 4
挨拶 文部科学省 初等中等教育局教育課程課 専門官	高市 和則 様	..... 5
挨拶 環境省大臣官房総合政策課 環境教育推進室長	黒部 一隆 様	..... 6

## 口頭発表の部

- 1 ふるさと学習を核とした環境教育の推進  
～小学校で育てるSDGsへの問題意識と地域、関係機関と協力した取組～  
福井県大野市阪谷小学校 校長 芦原 邦弘..... 8
- 2 キャリア教育を要とした小中9年間を見通した  
環境教育を実践するためのカリキュラム・マネジメント  
～生きる力を育み、ふるさとに誇りをもつ生徒の育成～  
広島県広島市立湯来中学校 校長 大塚 由美  
教務主任 藤本 祐二.....20
- 3 持続可能な社会づくりのための環境教育の推進  
～環境教育によって育む学力と環境保全意識～  
東京都小中学校環境教育研究会 会長 箱崎 高之  
研究部長 鈴木 元.....30

## 誌上発表の部

- 1 地域と協働で取り組む環境教育の推進  
～4年生「カーミージー探検隊」海の観察等を通して～  
沖縄県浦添市立港川小学校 校長 金城 勝己  
学年主任 喜屋武 仁.....46
  - 2 日本らしい自然の再生  
～子供たちと自然をつなぐ体験活動プロジェクト～  
東京都江戸川区立小松川小学校 校長 坂野真太郎  
教諭 泉田 陽菜.....54
  - 3 持続可能な社会を実現するための行動を考え、進んで社会に参画しようとする児童の育成  
～高見の山・川・海を題材とした「総合的な学習の時間」の探究学習をとおして～  
広島県尾道市立高見小学校 校長 金子 恵子.....63
  - 4 地域の宝を誇りとし 大切にする児童生徒の育成を目指して  
～ユネスコスクールとして小中一貫で取り組む自然体験活動～  
山梨県南アルプス市立芦安小中学校 校長 根津 盛吾.....75
  - 5 持続可能な社会の担い手を育むための教育の推進  
～ふるさとの海に親しみ、ふるさと愛を高める活動を通して～  
福井県小浜市立内外海小学校 校長 一瀬 泰史.....83
- 全国小中学校環境教育研究会 沿革史 .....93  
大会宣言 .....108

# 大会次第

日 時 令和6年12月26日(木) 13時30分～16時45分  
会 場 エコギャラリー新宿 東京都新宿区西新宿2-11-4(新宿中央公園内)  
(新宿区立環境学習情報センター 新宿区立区民ギャラリー)  
対面開催(後日期間限定録画配信)

司会・進行事務局 坂野真貴子

- 1 開会挨拶 全国小中学校環境教育研究会 会長 関口 寿也
- 2 来賓祝辞 環境省 大臣官房総合政策課環境教育推進室長 黒部 一隆 様
- 3 研究発表 口頭発表
- 4 誌上発表校紹介
- 5 講 評 東京都教職員研修センター授業力向上課 指導主事 古賀 愛 様
- 6 講 演 「EVシフトはCO<sub>2</sub>削減の救世主になれるのか？」  
Touson 自動車戦略研究所 代表 自動車・環境技術戦略アナリスト  
愛知工業大学工学部客員教授 博士(工学) 藤村 俊夫 様
- 7 大会宣言 都事務局長 伊藤 修久
- 8 閉会の辞 副会長・都会長 箱崎 高之

## ■ 口頭発表の部 ■

- 1 ふるさと学習を核とした環境教育の推進  
～小学校で育てるSDGsへの問題意識と地域、関係機関と協力した取組～  
福井県大野市阪谷小学校 校長 芦原 邦弘
- 2 キャリア教育を要とした小中9年間を見通した  
環境教育を実践するためのカリキュラム・マネジメント  
～生きる力を育み、ふるさとに誇りをもつ生徒の育成～  
広島県広島市立湯来中学校 校長 大塚 由美
- 3 持続可能な社会づくりのための環境教育の推進  
～環境教育によって育む学力と環境保全意識～  
東京都小中学校環境教育研究会 会長 箱崎 高之  
研究部長 鈴木 元

## □ 誌上発表の部 □

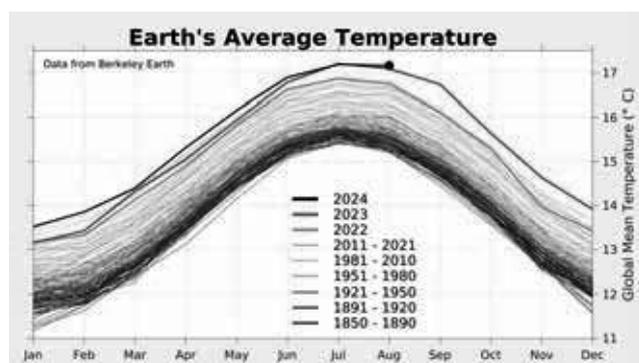
- 1 地域と協働で取り組む環境教育の推進  
～4年生「カーミーグー探検隊」海の観察等を通して～  
沖縄県浦添市立港川小学校 校長 金城 勝己  
学年主任 喜屋武 仁
- 2 日本らしい自然の再生  
～子供たちと自然をつなぐ体験活動プロジェクト～  
東京都江戸川区立小松川小学校 校長 坂野眞太郎  
教諭 泉田 陽菜
- 3 持続可能な社会を実現するための行動を考え、進んで社会に参画しようとする児童の育成  
～高見の山・川・海を題材とした「総合的な学習の時間」の探究学習をとおして～  
広島県尾道市立高見小学校 校長 金子 恵子
- 4 地域の宝を誇りとし 大切にする児童生徒の育成を目指して  
～ユネスコスクールとして小中一貫で取り組む自然体験活動～  
山梨県南アルプス市立芦安小中学校 校長 根津 盛吾
- 5 持続可能な社会の担い手を育むための教育の推進  
～ふるさとの海に親しみ、ふるさと愛を高める活動を通して～  
福井県小浜市立内外海小学校 校長 一瀬 泰史

## E V シフトから教育を見通す

全国小中学校環境教育研究会  
会長 関口 寿也

第56回全国小中学校環境教育研究大会を、第60回東京都小中学校環境教育研究発表会と共催で今年度も開催できることを大変喜ばしく思います。しかし、裏を返せば60年前に公害対策研究会として発足した本研究会の目的が十分に達せられていないということも意味します。この相反する事実をはじめに肝に銘じつつの令和6年度の全国大会となります。

さて、昨年、2023年が観測史上最高の地球平均気温を記録したことは記憶に新しいところです。しかし、アメリカの気象観測機関 Berkeley Earth によると、2024年は年明けから昨年を上回り、年平均気温も再更新するのではないかと予測されています。温暖化は、待ったなしの状態からどうやら完全に走り始めてしまったようです。



その温暖化対策の緩和策として、数年前から自動車産業分野ではE Vシフトが声高に叫ばれ、E V(電気自動車)の発売が相次ぎました。ことEUではその傾向が顕著で、E Vシフトを牽引していたと言えます。自動車単体で見れば、CO<sub>2</sub>を排出しないE Vは間違いなく温暖化緩和策の筆頭株です。しかし、仮に国内全ての自動車がE Vになると、電力ピーク時の発電能力は10～15%増強する必要があり、原子力発電10基分(1000万kw)に相当するとのこと(2020 日本自動車工業会 豊田章男)。かつ、現在の日本の発電の主力は、CO<sub>2</sub>を排出する化石燃料による火力発電が72.7%を占めます(2022 経済産業省)。また、バッテリーの原材料採掘や製造には、これまでの算出値の最大10倍の環境負荷が生じているとの指摘もあります(Minviro CEO ロバート・ペル)。そのあたりのより詳細な知見は、本大会でのTouson自動車戦略研究所 代表 藤村俊夫氏のご講演によってさらに明らかになることでしょう。E Vに代表されるがごとく、温暖化緩和策は裾野を含めた云わばサプライチェーンで考えることが不可欠です。

このことが学校の学びに置き換えたときに意味するのは、範囲が広すぎる、手に負えない、変えられないから手を付けないといった安易な結末に教師がしてしまうことではないはずです。調べるだけではなく、さまざまな関連事項をつながりあって皆で探究していくことこそが、持続可能な社会構造を構築していく活動になりうるということです。いや、そのような学びを教師も子供たちと一緒に行っていかなくてはなりません。その中で、次の社会を創造する政治家や官僚、企業人、市民、つまるところ大人を育成していくのが我々学校の、教師の使命ではないでしょうか。その学びは、私たちがこれまで取り組んできたE S Dに他なりません。自信を確信に変えて、今後もこの学びを皆さんと共に進めていきたいと強く思います。

結びとなりますが、本大会を開催するにあたり、文部科学省、環境省、東京都教育委員会、新宿区教育委員会、全国連合小学校長会、全日本中学校長会、東京都公立小学校長会、東京都中学校長会、日本教育公務員弘済会東京支部、日本E S D学会、日本環境教育学会、E S D活動支援センター、関東地方E S D活動支援センターの皆様をはじめ関係各位の皆様にご指導、ご助言、ご後援を賜り、心より感謝申し上げます。

本大会が、皆様にとって一縷の望みを生み出すものになることを願ってやみません。

## 全国小中学校環境教育研究会

文 部 科 学 省  
初 等 中 等 教 育 局  
教 育 課 程 課  
専 門 官 高 市 和 則

貴研究会の皆様方には、日頃から児童生徒の学びの保障のためにご尽力いただいておりますこと、また、学校における環境教育の充実と発展にご尽力いただいておりますことに心から感謝申し上げます。

地球温暖化や自然環境の破壊、資源エネルギー問題など、地球規模の様々な課題が増大し複雑化する中、エネルギーの効率的な利用など環境に対する負荷を軽減し持続可能な社会を構築するため、国民一人一人が様々な機会を通じて環境問題について学習し、自主的・積極的に環境保全活動に取り組んでいくことが求められています。

文部科学省では、国民がその発達段階に応じて、あらゆる機会に環境の保全についての理解と関心を深めることができるよう、学校教育や社会教育における環境教育の推進のために必要な施策に取り組んでいるところです。

学校における環境教育については、学習指導要領においても、総則をはじめ、社会科や理科、技術・家庭科など関連の深い教科を中心に環境教育に関する内容の充実が図られているところであり、引き続き、地域や学校等の特質を生かしつつ、カリキュラム・マネジメントの視点も踏まえながら各教科等の学びを関連付けて、環境教育をどのように位置付け、展開していくかを考えながら指導していただきたいと思っております。

また、令和6年に新たな「環境保全活動、環境保全の意欲の増進及び環境教育並びに協働取組の推進に関する基本的な方針」が閣議決定されました。

今回の主な変更点として「環境教育において特に重視すべき方法として、これまで重視してきた体験活動に加えて、多様な主体同士の対話と協働を通じた学びや ICT を活用した学びの実践を、学校、地域、企業等の様々な場で推進すること。」や「学校内外での対話と協働による学びの推進に向けた、学校と地域・団体・企業等をつなぐ中間支援機能の充実による、学校の教職員の負担軽減と教育の質向上の両立を図ること。」などが盛り込まれており、政府としても引き続き環境教育等を推進することとしています。

結びになりますが、本大会に参加される先生方にとって、多大な成果が得られることをご期待申し上げるとともに、本大会を主催されます全国小中学校環境教育研究会の更なるご発展と、関係の皆様方の益々のご活躍とご健勝を心より祈念申し上げます。

## 環境教育及び持続可能な開発のための教育(ESD)を取り巻く現状について

環境省 大臣官房総合政策課  
環境教育推進室長 黒部 一隆

第56回全国小中学校環境教育研究大会及び第60回東京都小中学校環境教育研究発表会の開催に当たり、一言御挨拶を申し上げます。

貴研究会におかれては、「持続可能な社会づくりのための環境教育の推進」を研究主題として精力的に活動を展開されており、また、学校教育における環境教育・ESDの推進に貢献されておりますことに、改めて厚く御礼申し上げます。

さて、昨年は観測史上催行の世界年平均気温を記録したことが記憶に新しいところですが、現在、世界は、気候変動、生物多様性の損失、汚染という3つの危機に直面し、環境危機とも言える状況に直面しています。こうした問題を克服し、ネイチャーポジティブ（自然再興）、カーボンニュートラル（炭素中立）、サーキュラーエコノミー（循環経済）が達成される持続可能な社会に変革するためには、一人ひとりの意識や行動の変容、さらに組織や社会経済システムの変革につなげていくことが不可欠であり、環境教育・持続可能な開発のための教育(ESD)がその礎となります。学校を始めとした、様々な機会や場において、ESDの考え方を踏まえた環境教育が実践されることが重要です。

本年5月に閣議決定された第六次環境基本計画では、「新たな成長」を実現するためには、基盤となる自然資本と自然資本を維持・回復・充実させるシステム及び資本の拡充・整備に資する人的資本を含む無形資産への投資が必要不可欠であることから、環境教育・ESDの推進を重点戦略の1つ、『新たな成長』を導く持続可能な生産と消費を実現するグリーンな経済システムの構築」に位置付けています。

また、環境教育等促進法に基づく環境教育等の推進に関する基本方針の見直しについて、昨年6月から貴研究会の会長を始めとする有識者による環境教育等推進専門家会議での検討を経て、関係府省による環境教育等推進専門家会議に進言され、本年5月に新たな基本方針が閣議決定されました。

新たな基本方針においては、持続可能な社会の実現に向けて、学校を始めとした様々な機会において質の高い環境教育等を実践するため、例えば、環境教育において特に重視すべき方法として、体験活動を通じた学び、立場や価値観の異なる多様な主体・世代の間の対話と協働を通じた学び合い、情報通信技術(ICT)の活用による国内外の空間的制約を超える学び合いを通じて、環境教育等に一層取り組むこととしています。

とりわけ、対話と協働を通じた学びを実践するに当たっては、人的・物的資源や情報などを各主体に的確に提供し、対話の場を創造するなどの中間支援機能を担う組織等の存在が必要ですが、その調整に時間や労力がかかることなどを理由に連携が十分に進んでいない状況も見受けられます。そこで、教職員の負担を軽減しながら教育の質や効果を高めていく具体的方策として、文部科学省と環境省の共同事業として設置したESD活動支援センターにおける相談窓口の周知を図り、認知度を向上させ、学校と地域等をつなぐ中間支援機能をより一層充実させることとしています。

ESD活動支援センターは、全国センター及び地方8センターとして設置されており、全国約190の地域ESD活動推進拠点と連携してESD推進ネットワークを構築する、環境教育・ESDの推進拠点であり、学校と地域、企業等をつなげる中間支援組織として、環境教育等に関する相談対応や、各主体同士の学び合いを促す取組や場作りを実施しておりますので、関係各位におかれましては、学校における企業連携・地域連携において、ESD活動支援センターの積極的な活用を御検討いただけましたら幸いです。

環境教育等の更なる推進と持続可能な社会の構築に向けて、引き続き、皆様と連携・協力を行ってまいりたいと考えています。

最後になりますが、本会の御盛会と関係各位の御健勝を祈念し、私の御挨拶といたします。

# ■ 口頭発表 ■ P 8 ~ 4 3



- 1 ふるさと学習を核とした環境教育の推進  
～小学校で育てるSDGsへの問題意識と地域、関係機関と協力した取組～  
福井県大野市阪谷小学校 校長 芦原 邦弘…… 8
  
- 2 キャリア教育を要とした小中9年間を見通した  
環境教育を実践するためのカリキュラム・マネジメント  
～生きる力を育み、ふるさとに誇りをもつ生徒の育成～  
広島県広島市立湯来中学校 校長 大塚 由美  
教務主任 藤本 祐二……20
  
- 3 持続可能な社会づくりのための環境教育の推進  
～環境教育によって育む学力と環境保全意識～  
東京都小中学校環境教育研究会 会長 箱崎 高之  
研究部長 鈴木 元……30

## □頭発表 1

# ふるさと学習を核とした環境教育の推進

～小学校で育てるSDGsへの問題意識と地域、関係機関と協力した取組～

福井県大野市阪谷小学校  
校長 芦原 邦弘

## I 取組の概要について

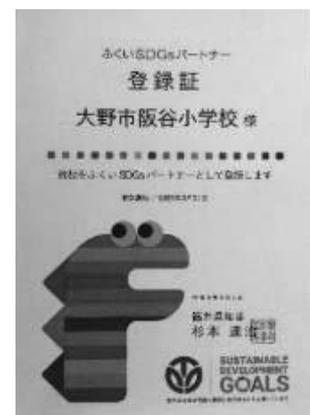
### 1 研究について

本校では、令和3年度から2年間、「主体的に課題解決に向かう子の育成」の研究主題のもと、「社会とつながる見方・考え方ができる子を育てる授業づくり」を重点目標に掲げ、教育活動を推進した。その成果として、ICTの効果的な活用、生活科や総合的な学習の時間で「横断的なふるさと学習」が実践でき、多くの場面で主体的に課題解決に向かおうとする子供たちの姿が見られた。授業で培った基礎基本の知識、ICTや話し合いの技能が、総合的な学習の時間や特別活動に効果的に生かされ、成果物を地域へ積極的に発信するなど活動内容も充実、進化してきた。また、環境問題をはじめとする社会や地域の課題を自分事として捉え、「自分に何ができるか」を意識しながら学び、学んだことを周囲へ発信していく好サイクルが生まれ、「学びと児童を取り巻く社会がつながること」が、主体性を育む上で重要であることが実感できた。

令和5年度からは、子供たちのこれまでの主体的な学びを、より対話的な深い学びにしたいと考え、研究主題を「対話的な深い学びに向かう子の育成」とし、「本質的な問いを軸に子供とともにつくる授業」を重点目標に掲げ、研究を進めている。教材や他者との対話は、深い思考、いわゆる自分自身との対話（自己内対話）を促すためには必要不可欠なものであり、この深い思考（自己内対話）が起こることにより、一人一人が豊かな自己実現に向かって成長し、集団もよりよく成長していくものと考えている。深い思考を促す「対話的な学び」は、教師の「本質的な問い」が軸になると考え、教師は、「本質的な問い」を子供たちに投げ掛けながら、子供の思考を深掘りし、子供とともに授業を作ってきた。どのような問いをしていくことが「本質的な問い」になり、どのように子供とともに思考を深掘りしていくのかを議論しながら研究を進めることは、教員の教材に対する理解を深め、学習のゴールをより明確にし、「問い」を吟味することにつながっている。

本校は令和3年度に「ふくいSDGsパートナー」に登録した。これは、子供たちがふるさとについて学んだり、地域交流や体験活動をしたりするだけでなく、SDGsを自分事として捉え、より探究的な学びにつなげたいとのねらいがあった。ふるさと学習の中で、さまざまな体験活動を通して、子供たち一人一人がさらに持続可能な社会や環境に関する課題を深く掘り下げるとともに、将来にわたって自身が生きていく立ち位置を見付ける力を付けたいとの願いをもとに全校体制で取り組みを始め、現在に至っている。

校区には豊かな自然があり、学びの場としても恵まれた環境にある。地域で子供たちを育てる意識をもった方が多く、自然を題材にした環境教育を進める上でも、地域の十分な理解や協力を得ることができる。環境教育の推進のためには、地域や関係機関との連携が不可欠であり、特に、令和5年8月に認定された「星空保護区®」への取組は、環境問題について学ぶ貴重な題材となった。



## 2 「星空保護区®」について

### (1) 「星空保護区®」とは

国際ダークスカイ協会（IDA）が2001年に始めた「ダークスカイプレイス・プログラム」（和名：「星空保護区®」認定制度）は、光害<sup>※1</sup>の影響のない、暗い自然の夜空を保護・保存するための優れた取り組みを称える制度です。認定には、屋外照明に関する厳格な基準や、地域における光害に関する教育啓発活動などが求められます。そしてそれらは、自治体・観光業界・産業界・地域住民など多くの人々の理解と努力によって支えられます。また、認定の公表により、夜空保護の重要性、光害問題の現状と対策について、広く啓蒙することを目的としています。

【一般社団法人 星空保護推進機構HPより】

※1 光害（ひかりがい）とは、過剰または不適切な人工の光による公害。夜空が明るくなることにより、天体観測に障害を及ぼすほか、生態系への悪影響やエネルギー浪費など、様々な影響が指摘されており、光害は地球上で急速に広がっている新たな環境問題のこと。特に、夜間も経済活動が活発で人口が密集したアメリカ、ヨーロッパ、日本などの都市部で深刻な問題となっている。

【一般社団法人 星空保護推進機構HPより】

### (2) 「星空保護区®」認定について

令和5年8月21日、本校の校区である福井県大野市南六呂師エリアが、ダークスカイ・インターナショナルより、日本で4例目となる「星空保護区®」に認定された。都市に近いながらも優れた夜空環境の保護が行われている地域を対象にした「アーバン・ナイトスカイプレイス<sup>※2</sup>」の 카테고리ではアジア初の認定となった。

※2 アーバン・ナイトスカイプレイスとは、暗い夜間環境を保護・推進するための優れた取り組みをしているが、近隣の明るい都市の影響により他のカテゴリーでは認定が受けられない場所（都市公園、広場、展望台など）を示す。光害に配慮した質の良い屋外照明利用の模範となり、その普及を促すとともに、都市の人々が星空を楽しめる場所を提供することを目的とする。

【一般社団法人 星空保護推進機構HPより】

### (3) 「星空保護区®」認定に向けた本校の主な取組

- ①サポートレター（支援書）<sup>※3</sup>をダークスカイ・インターナショナルに送付
- ②大野市主催の「ライトダウンキャンペーン」への参加
- ③「阪谷スターポイントプロジェクト（SSPP：Sakadani Star Point Project）」活動
- ④認定記念式典参加、星空の街・あおぞらの街全国大会でのプレゼンテーション発表など

※3 サポートレターとは児童が星空を保護する取組に賛同し、保護区認定を希望していることを記した文書



サポートレター  
（支援書）



大野市広報  
「おおの」

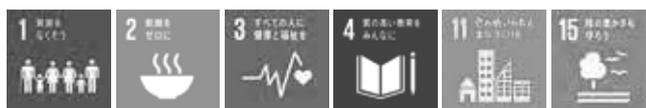


「星空保護区®」  
ロゴ



「星空保護区®」  
認定記念式典

## II 環境教育の概要



### 1 本校の環境教育の目標と努力事項

#### (1) 目標

- ・環境や環境問題に関心・興味をもたせ、自分たちの活動と環境の関わりについて理解する。
- ・環境の保全に配慮した望ましい行動ができる知識・技能や思考力・判断力・表現力を身に付ける。
- ・持続可能な社会の構築について考え、環境を守るために主体的に活動する態度を育てる。

#### (2) 努力事項

- ・全教職員が環境教育の取り組み方について共通理解し、学年間・教科間での連携を積極的に図る。
- ・地域の豊かな自然や身近な地域社会の中での様々な栽培活動・体験活動を通して、自然に対する豊かな感受性や環境に対する興味・関心をもたせる。
- ・環境や自然に関心のある身近な人々との関わりを通して、環境問題と自分たちの生活様式との関わりについて理解を深める。
- ・家庭や地域社会と積極的に連携し、学校で学んだことを家庭や地域社会での生活に生かすことができるようにする。

### 2 ふるさと学習について

#### (1) 活動の源泉

子供たちに「大学を卒業したら大野市（阪谷地区）に戻ってきますか？」と問い掛けたところ、全員が「戻ってきたい！」と勢いよく手を挙げた。また、その理由として、「大野市（阪谷地区）は自然がいっぱいで、美しい風景があって、野菜がいっぱいだから」と真剣な眼差しで答えていた。私たち教職員は、子供たちがふるさとの良さをしっかりと見付け、深い愛着をもって発言している姿に改めて衝撃を受け、学校としてふるさと学習をさらに充実・発展させ、子供たちにより良い学びの場を効果的に提供し続けようとの考えに至った。

#### (2) ふるさと学習の主な概要

1・2年生は「阪谷探検」として、ふるさと阪谷を知るマップ作りの活動、3・4年生は「阪谷の宝」として、ふるさと阪谷のよさを発見し・育て・発信していく活動、5・6年生は「星の故郷阪谷」として、大野市が進めていた六呂師の「星空保護区®」認定に向けての取組について学び、自分たちができることについて探究していく活動を中心にふるさと学習を行った。また、「住み続けたい阪谷・大野・福井・日本・地球環境」についても、身近なことから考え行動する学びを展開した。

### 3 各年度の実践内容 ※<>内は連携した地域、関係機関

#### (1) 令和3年度

**【概要】**学校全体が「星」をコンセプトに、市や地域の関係機関とつながる活動や発信を始めた。

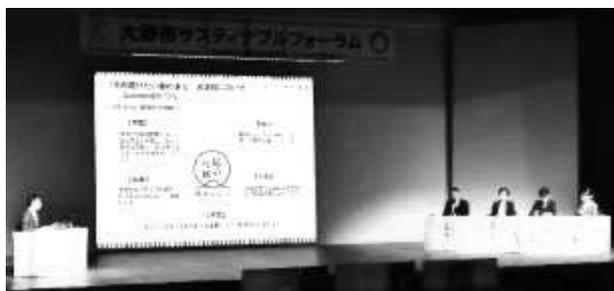
#### **【実践記録】**

- ・「ふくいSDGsパートナー」に学校登録（5月）
- ・光害に関する出前授業（6月5・6年）<保護者・地域、市観光交流課、市地域おこし協力隊>
- ・空き缶回収Box設置（7月）<地域、ふくいSDGsパートナーの資源回収業者>
- ・児童玄関前で市場を開催し、学校で育てた野菜を配布（7月3・4年）<保護者・地域>

- ・「大野市サステイナブルフォーラム」にパネリストで参加（11月校長）＜大野市政策推進課＞
- ・ねんりん秋市での野菜販売体験（11月3・4年）＜大野市シルバー人材センター＞
- ・「阪谷大雪対策マニュアル」作成（12月3・4年）
- ・令和3年度ふるさと福井CMコンテスト優秀賞受賞（1月5・6年）、応募参加（1月3・4年）
- ・令和3年度市善行児童団体表彰（3月3・4年、5・6年）



光害に関する出前授業



「大野市サステイナブルフォーラム」

## （2）令和4年度

【概要】学校ブログ（ミテログ）や学校公式Instagramを開設し、地域や学校の魅力をさらに充実させて発信した。

### 【実践記録】

- ・学校畑で栽培した野菜提供（6月、12月全校）＜市内子ども食堂、福祉施設＞
- ・光害対策の呼び掛けとチラシ配布（7月5・6年）＜家庭・地域＞
- ・七夕集会でのプラネタリウム開催（7月全校）
- ・「阪谷の宝の地図」作り（9月2年）＜大野市・阪谷地区社会福祉協議会＞
- ・白山ワイナリーでのブドウ収穫の手伝い（9月全校）＜白山ワイナリー＞
- ・星空保護区®出前授業（10月全校）＜大野市地域おこし協力隊＞
- ・星空出前授業（10月全校）＜福井県自然保護センター＞
- ・「阪谷の宝の地図」紹介（10月2年）＜阪谷地区社会福祉協議会＞
- ・星空や光害の学び出前講座（10月全校）＜福井県自然保護センタープラネタリウム、阪谷公民館＞
- ・ねんりん秋市での野菜販売体験と星空の魅力PRや「阪谷の宝の地図」の配布（11月全校）  
＜大野市シルバー人材センター＞
- ・プラネタリウム観望と上映「星空の魅力発信」（11月全校）  
＜福井県自然保護センター、阪谷公民館、大野市観光交流課、大野市地域おこし協力隊＞
- ・「阪谷の宝」動画web公開（11月～3月3・4年）
- ・地元高等学校の探究学習発表会に参加（1月5・6年）＜福井県立大野高等学校＞
- ・「福井ふるさと教育フェスタ」パネル参加と「ふるさと学習特別賞」表彰（2月全校）
- ・「信州ESD/SDGsコンソーシアム」オンライン発表会参加（2月5・6年）  
＜信州大学＞
- ・「大野市星空シンポジウム」（2月校長）＜大野市観光交流課＞
- ・卒業式での星空パネル展示（3月）
- ・初の「親子星空観賞会」を校庭で開催（3月全校）＜星のまち鑑賞会＞
- ・令和4年度市善行児童団体表彰（3月2年、3・4年、5・6年、個人2名）
- ・大型天体望遠鏡購入（3月）＜阪谷有志の会＞



七夕集会でのプラネタリウム



「阪谷の宝の地図」作り



ねんりん秋市での販売活動

### (3) 令和5年度

【概要】「笑顔かがやく学校<超楽校>」(=学校の枠を超えて学びを楽しむ学校)として、全校体制で「星空・あおぞらの学び」の取組を進めた。星空の活動と自然や野菜作りの活動を通して教師や児童が社会へ関わり、次々と求め仕掛けて、大人と対等に接していく姿を見るようになった。地域と連携・協働して、探究学習(SDGs・ふるさと学習)に果敢に取り組み、「豊かな自己実現に向かう個別最適で協働的な子供主体の学び」を一層進めた。

#### 【実践記録】

- ・リンゴの苗木植え(5月全校)<白山ワイナリー・阪谷をよくする会>
- ・親子で簡易天体望遠鏡(コルキットスピカ)作りとピント合わせ練習会(6月全校)  
<環境アドバイザー>
- ・ライトダウンイベントへの呼び掛けと参加(7月5・6年)<大野市環境・水循環課>
- ・「星空キッズソムリエ認定講習会」(7月希望児童)<福井県自然保護センター>
- ・「阪谷スターポイントプロジェクト(SSPP)」第1・2弾(7月5・6年)  
<大野市環境・水循環課、大野市地域おこし協力隊>
- ・「PTA親子星空観賞会」夏の星座(8月全校)<PTA、星のまち鑑賞会>
- ・大野市星空保護区®認定を祝うセレモニーに参加(8月全校・職員)<大野市役所>
- ・「阪谷のおすすめ星空スポット」動画配信(9月3・4年)
- ・「阪谷の宝の地図」第2版(10月1・2年)
- ・「星空の街・あおぞらの街」全国大会の星空報告会でプレゼンテーション発表  
(10月全校)
- ・「阪谷星空バスツアー」企画参加(10月1・2年)<大野観光自動車(株)、阪谷地区社協>
- ・「阪谷スターポイントプロジェクト(SSPP)」第3弾(10月5・6年)  
<大野市環境・水循環課、大野市地域おこし協力隊>
- ・ねんりん秋市での野菜販売体験と「阪谷の宝の地図」の配布(11月全校)  
<大野市シルバー人材センター>
- ・「PTA親子星空観賞会」冬の星座(11月全校)<本校PTA>
- ・「ふるさと福井CMコンテスト」奨励賞受賞(12月3・4年)<福井県教育委員会>
- ・「プレゼンテーション大会」最優秀賞受賞(1月5・6年)<福井県教育委員会>
- ・「福井ふるさと教育フェスタ」プレゼンテーション発表(2月5・6年)<福井県教育委員会>
- ・「信州ESD/SDGsコンソーシアム」オンライン発表会参加(2月3・4年、5・6年)  
<信州大学>
- ・「大野市スターポイントプロジェクト(OSPP)」第4弾(2月5・6年)  
<大野市環境・水循環課、大野市地域おこし協力隊>



P T A親子星空観賞会



阪谷あおぞらバスツアーのHP



道の駅でS S P Pカード配布



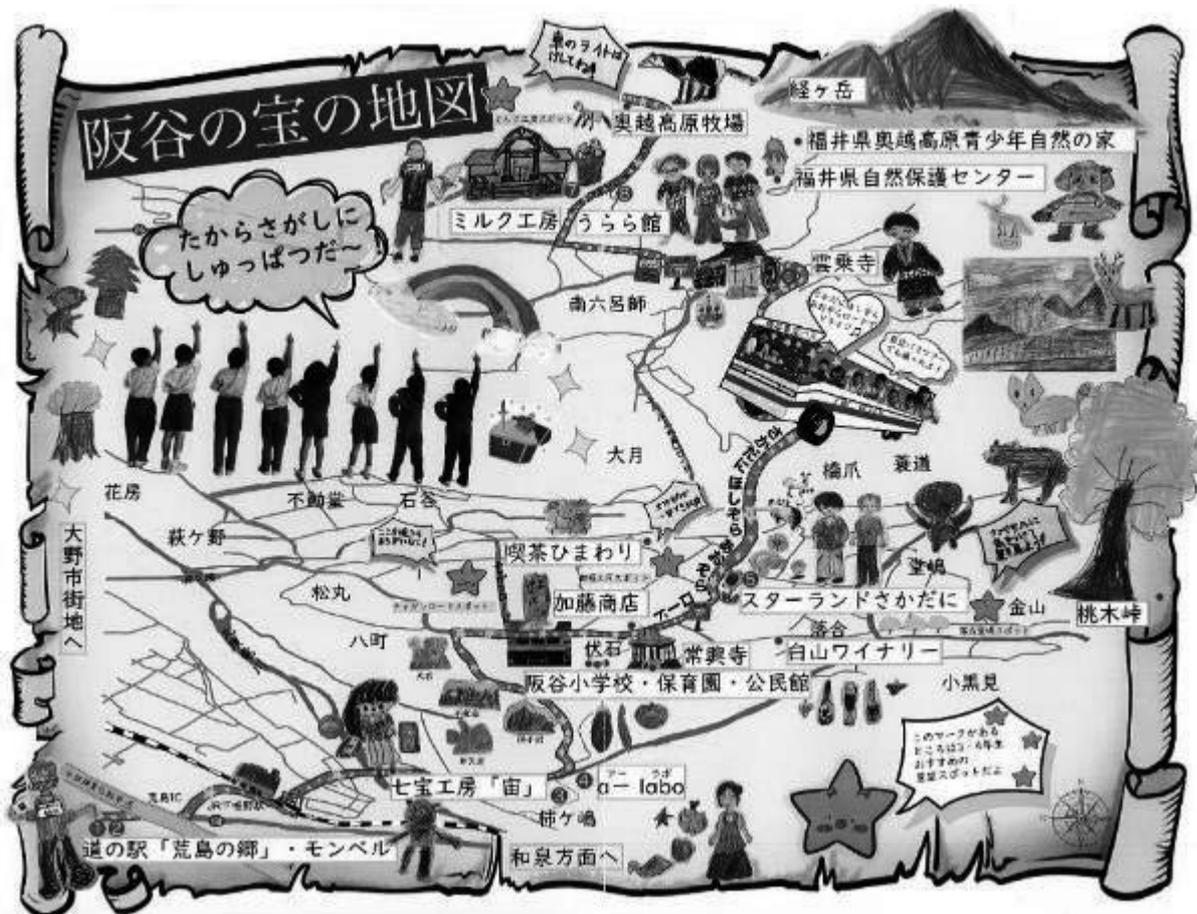
「星空の街・あおぞらの街」  
全国大会



「ふるさと福井CMコンテスト」



「福井県プレゼンテーション大会」



「阪谷の宝の地図」

### Ⅲ SSPP (Sakadani Star Point Project) からOSSP (Ono-city Star Point Project) へ (5・6年)

#### 1 プロジェクトを始めたきっかけ

##### (1) ライトダウンキャンペーンへの参加

福井県大野市では、美しい星空を通じ、環境問題について一緒に学ぶ機会を創出することを目的に、クールアース・デー（7月7日・環境省）に合わせて、市民及び市内事業者の協力の下、一斉ライトダウンキャンペーンを毎年実施している。このキャンペーンに学校として協力する中で、「市民にもっと周知され広がっていくにはどうしたらいいのか」という課題がもち上がり、学校として何ができるのかを模索することとなった。

##### (2) 「星空保護区®」認定への取組を受けて

大野市が「星空保護区®」に認定されるための取組が始まったことを受け、「校区に住む小学生としてできることは何か」を考えるようになった。

##### (3) 社会情勢を受けて

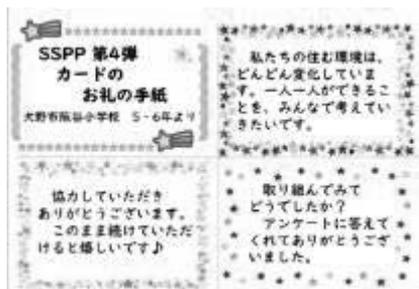
地球温暖化による気候変動が大きな問題となっており、子供たちが生きていく未来に対する危機感がこれまで以上に高まる中、その対策について自分たちに何ができるかを考えた。

#### 2 プロジェクト「SSPP (OSSP)」を企画、実施

子供たちは、総合的な学習の時間や講師を招いての講習会を通して、環境に関する知識を深めていった。そして、何度も話し合い、アイデアを練って、検討を重ねていった結果、「これならみんなが取り組んでくれそうだ」との結論に達したプロジェクトがSSPP (Sakadani Star Point Project) であった。本プロジェクトは、日常生活の中で少し意識をすれば取り組める16の項目が入ったポイントカード<sup>※資料1</sup>を地域に配布し、プロジェクトの参加者一人一人が実施の有無をチェックしていくことで、楽しみながら環境問題について考えてもらえるように考案した。

ポイントカードは改善を加えながら何度も作り直し、徐々に配布する地域を広げながら年間4回発行するに至った。最初は協力者や参加者が少なく、期待通りの成果が得られず苦労したが、子供たちは諦めることなく、活動を広げるための方策を模索し続けた。第3弾からはポイントカードに二次元コードを掲載し、参加者の取組状況や感想などを携帯端末から学校の端末に送信してもらえるよう工夫した。さらに第4弾では、念願だった大野市の協力が得られ、ポイントカードのタイトルをOSSP (Ono-city Star Point Project) と改め、市内全世帯（約11,000世帯）に配布、多くの方にプロジェクトを周知することができ、65名の方がプロジェクトのアンケートに回答した。

子供たちは、ポイントカードを1回発行するごとに、取組状況の集計と分析を行い、取り組んでくださった方にお礼の手紙を書いたり、子供たちが発案した環境保護啓発のオリジナルシールを送ったりするなどして、市民との交流を図り、今後も継続して関わっていただけるような取組を行った。また、第4弾の結果は令和6年7月発行の市広報誌「おおの」<sup>資料2</sup>に掲載された。



児童が作成したお礼の手紙



参加者に贈ったオリジナルシール

※資料1 子供たちが考案したポイントカード (第4弾)

自分の生活をチェック! できることからトライ! ☆1つ=1ポイント。  
17ポイントめざしてとりくんで、色をぬってね! ✓や○でもいいよ。

**光害対策**

- ☆ よるはカーテンをしめる
- ☆ つかっていないあかりははずす
- ☆ 空にあかりをむけない
- ☆ だん色系のライトをつかう
- ☆ 光害の情報をみる

【ライトダウン問い合わせ先】  
大野市役所 ぐらし環境部 環境・水循環課  
住所 〒912-8666 大野市天神町1-1  
TEL 0779-66-1111 FAX 0779-66-1118  
E-mail kankyo@city.fukui-ono.lg.jp

【カード問い合わせ先】  
大野市飯谷小学校 5・6年生 7名  
住所 〒912-0149 大野市秋石11-14  
TEL 0779-67-1012 FAX 0779-67-1500  
E-mail sakodani-sho@edu.city.ono.fukui.jp

【協力】 地域おこし協力隊 望月真帆

**星空学び**

- ☆ よるに星をみる
- ☆ 星のしやしんをみたりとったりする
- ☆ 星のイベントにさんかする
- ☆ 星空の情報をチェックする

【プラネタリウム鑑賞】  
【福井県自然保護センター】  
・週末天体観望会  
【福井県自然保護センター】  
・星空ハンモック【六呂師高原】  
・星降るランタンナイト【六呂師高原】

・星のまち鑑賞会  
【大野市役所駐車場】  
・星空ナイトクルージングコース【大野観光バス】 など

**脱炭素**

- ☆ エコバックをつかう
- ☆ つかっていない電気・テレビはけす
- ☆ 近い場所は、自転車や歩いていこう
- ☆ 日用品は、つめかえ用をかう
- ☆ 再利用マークのものをつかう
- ☆ カン、ペットボトル、ビン、プラスチック、かみ、ダンボールはリサイクルする
- ☆ 食料は、たべるぶんだけかい、つかいきる

【再利用マークのものをつかう】  
・ほしぞらからの手紙 (ほしぞらつうしん)  
・星ほごmobile (ウェブサイト)  
・星結事務所 (ウェブページ)  
・星のまちおおの (フエイスブック)  
・広報 おおの (こうほうし)  
・しんぶんきじ など

このカードを手もとにおいて、いっしょにとりくんでね!

オオノ シティー スター  
**Ono-city Star**  
ポイント プロジェクト  
**Point Project**

【ライトダウン問い合わせ先】  
大野市役所 ぐらし環境部 環境・水循環課  
住所 〒912-8666 大野市天神町1-1  
TEL 0779-66-1111 FAX 0779-66-1118  
E-mail kankyo@city.fukui-ono.lg.jp

【カード問い合わせ先】  
大野市飯谷小学校 5・6年生 7名  
住所 〒912-0149 大野市秋石11-14  
TEL 0779-67-1012 FAX 0779-67-1500  
E-mail sakodani-sho@edu.city.ono.fukui.jp

【協力】 地域おこし協力隊 望月真帆

名前

**光害対策**

【目的】 目的以外の方向に光がもれるのをふせいだり、周りの環境の害にならない明るい明るさのライトにかえたりして、光の害をふせぐこと

【地球温暖化】 地球があつくなくなる原因となる二酸化炭素の量をゼロにしようという

【取り組み】 とりくみのこと

【星空について】 星空について学び、いろいろなことをしること

**脱炭素**

**星空学び**

みんなで、「美しい星空を楽しむ」ことをきっかけにして、「環境を守る」ことについても考えていきませんか?  
表紙のQRコードのアンケートでは、みなさんの取り組み状況の集計を行い、今後の参考にさせていただきます。ぜひ、ご協力ください。

# 日本一美しい星空を未来へつなごう

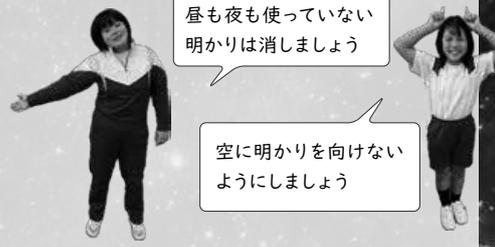
## オオノ シティー スター ポイント プロジェクト ～ Ono-City Star Point Project (OSPP) の結果報告～

美しい星空を楽しみ、環境を守る取り組みを実践する「OSPP」。OSPPに参加した65人のアンケート回答から見えてきた、市民の星空保護に対する傾向を、阪谷小学校児童が紹介します。

### ひかりがい 光害対策

対策	0	20	40	60	80	100
夜はカーテンをしめる	[Bar chart showing high frequency]					
使っていない明かりは消す	[Bar chart showing high frequency]					
空に明かりを向けない	[Bar chart showing high frequency]					
光害の情報を見る	[Bar chart showing moderate frequency]					
暖色系のライトを使う	[Bar chart showing moderate frequency]					

(単位：%)



昼も夜も使っていない明かりは消しましょう

空に明かりを向けないようにしましょう

### 脱炭素

対策	0	20	40	60	80	100
日用品は詰め替え用を買う	[Bar chart showing high frequency]					
缶、ペットボトルなどをリサイクルする	[Bar chart showing high frequency]					
使っていない電気・テレビは消す	[Bar chart showing high frequency]					
エコバッグを使う	[Bar chart showing high frequency]					
食材は食べる分だけ買い、使い切る	[Bar chart showing high frequency]					
近い場所は自転車や歩きで移動する	[Bar chart showing high frequency]					
再利用マークの物を使う	[Bar chart showing high frequency]					

(単位：%)

### 星空学び

学び	0	20	40	60	80	100
夜に星を見る	[Bar chart showing high frequency]					
星の写真を見たり撮ったりする	[Bar chart showing moderate frequency]					
星のイベントに参加する	[Bar chart showing moderate frequency]					
星空の情報をチェックする	[Bar chart showing moderate frequency]					

(単位：%)

暖色系ライトがオススメです！光害を軽減できます

星空のイベントにもっと参加してみませんか

星空イベント・ツアー情報▶ 

リサイクルやリユースの結果が良いです！ぜひ続けてください

阪谷小児童考案のポイントカード。2月に全戸配布しています



回答された人から温かいメッセージをいただいています。ありがとうございます！

- ・市民みんなで取り組めるといいです
- ・1人ができる小さなことを続けていく大切さを知りました
- ・今まで何気なく見ていた星空に興味を持つことができました
- ・これからも星空を楽しんでいきたいと思えます

ライトダウン期間中に取り組んだ内容を、右の二次元コードからぜひ回答をお願いします。



### 星のまちおおのライトダウン

～日本一の星空を未来へ～

みんなで電気を消して、日本一の星空を見ながら、環境のことを考えませんか。

**期間** 7月1日(月)～31日(金) (統一実施日 7月1日(月)、7日(日)、7月31日(金))

#### 取組方法

- ★期間中の午後9時～10時に極力照明を消すか、厚手のカーテンを閉めて外に光が漏れないようにする
- ★日本一の星空を眺めたり、動画サイトで星や環境の

動画を見たりして楽しむ

★期間中に開催されるイベントに参加して、星や環境のことを学ぶ

その他 この取り組みに参加する協力事業者を募集しています。専用フォームまたはホームページにある様式をメールかファクスで提出してください。参加事業者名は市ホームページに掲載します [詳しくはこちら▶](#)

☎ 環境・水循環課 (☎64・4828 FAX66・1118)  
電子メール kankyo@city.fukui-ono.lg.jp



### 3 SSPP (OSSP) の成果

(1) プロジェクトの結果の推移 (過去4回実施分) ※数値は「している」と回答した割合 (%)

視点	項目	第4弾	第3弾	第2弾	第1弾
光害対策	夜はカーテンをしめる	98.5	100.0	100.0	100.0
	使っていない明かりは消す	96.9	94.1	96.9	100.0
	空に明かりを向けない	89.2	85.3	96.9	76.2
	暖色系のライトを使う	60.0	61.5	59.4	47.6
	光害の情報を見る	56.9	55.9	62.5	57.1
星空学び	夜に星を見る	98.5	88.2	93.8	90.5
	星の写真を見たりとったりする	66.2	64.7	71.9	61.9
	星のイベントに参加する	38.5	35.3	62.5	61.9
	星空の情報をチェックする	52.3	61.8	65.6	57.1
脱炭素	エコバッグを使う	92.3	91.2	93.8	81.0
	使っていない電気・テレビは消す	95.4	94.1	100.0	90.5
	近い場所は自転車歩きで移動する	67.7	55.9	75.1	61.9
	日用品はつめかえ用を買う	93.8	88.2	93.8	100.0
	再利用マークのものを使う	63.1	41.2	46.9	57.1
	缶、ペットボトルなどをリサイクルする	96.9	79.4	93.8	100.0
	食材は食べる分だけ買い、使い切る	80.0	82.4	84.4	76.2

【アンケート回答数】第1弾…21人、第2弾…36人、第3弾…39人、第4弾…65人

(2) SSPP (OSSP) 参加者から寄せられた声

市民みんなで取り組むことは大事だと思います／難しいことでなく、誰でも取り組める／もっと環境のことを考えて生活していきたいです／確かに夜空の星がよく見えます／便利になり過ぎ。昔の暮らしに目を向けませんか／光害を減らしたいと思いました／きれいな星空のために、わたし自身ができることはまだまだあると感じました。機会があれば星空のイベントにも参加してみたいです／大野の素敵な星空を守るために小さなことでもよいので、できることから(脱炭素等)取り組んでいきたい。このアンケートに答えたことで、大野の星空に自分があまり関心をもてていないことに気付いた。せっかく大野に住んでいるのだから星空をもっと楽しんでいきたい。これからも阪谷小学校の皆さんの活動を応援しています／小学生のみなさんが、星空のことを一生懸命考えているのが伝わりました。一緒に大野市の星空を守っていきましょう／何回も改良して提案しているのがいいですね。大野市民みんなで美しい星空を守っていきましょう／スターポイントプロジェクトを続けてくれてありがとう。みんなのがんばりが大人も続ける意欲になっています／一人が出来る小さなことを続けていく事の大切さを教えてもらいました。これからも教えてもらったことはもちろん、自分に足りない事を意識しながら一緒に星空を守っていきたいと思います。ありがとうございます／

### (3) プロジェクトを企画した児童の感想

☆大人になったら県外に行くかもしれません。でも、星空が綺麗に見えるところに光害を出さないように毎日ライトダウンをチェックしたいです。他の人にはメールや自作のアンケートに協力してほしいです。分かってもらえなかったり、将来はもっと環境が悪くなっていたりするかもしれません。だから今自分に出来ることをして、未来を変えたいです。

☆私が大人になっても環境を守るために、いろいろなもので環境を守ることにについて広めていきたいと思います。将来も星が綺麗に見えるためには、私たちが今環境を守らないといけない。そのためにポイントカードを広めて頑張ってきました。でも、紙で広げるのは脱炭素じゃないと思ったので、アプリにできるといいけど、小学生の私たちにはできないから、将来できるといいなと思います。

☆アンケートに答えてくれた方々からもらった意見などを取り入れて、これからもライトダウンに協力してもらいたいです。私たちができることを発信することで、身近な人から広がっていくと思いました。大人になっても環境を守るためにインスタなどを使って、いろんな人に発信していきたいです。今やっていることをこれからも続けていきたいです。

☆ぼくは大人になっても阪谷に住みたいと思っています。ずっと星空がきれいに見えるといいと思っています。光害を減らしたいです。光を上に向けないようにしたいです。周りのみんなに呼び掛けることは少しやりにくいです。環境を守るというのは簡単そうで難しいと思います。

☆私は大人になっても、SDGsや光害のことについてたくさんの人に伝えていきたいなと思っています。インターネットを使ったりプレゼンをして発信したりしてみたいです。身近な人から伝えて輪を広げていきたいです。自分の子供にも伝えて未来にもつなげていきたいです。大人になったら、副業として星空イベントにも協力していきたいです。

☆大人になっても光害のことを忘れずにやっていきたいと思います。インターネットに載せてみんなに知ってもらえるように発信したいです。将来の子供たちにも私たちが取り組んできたことを教えたいです。ごみが落ちていたらごみ拾いをしたいです。インターネットにもイベントのことを載せたいです。

## 4 SSPP (OSSP) の成果と課題

### (1) 成果

- 行政主導のライトダウンキャンペーンに子供たちが新しいアイデアを提案できた。市の担当者もライトダウンキャンペーンが広く周知されないことに悩んでいたこともあり、子供たちが考えた取組が広がっていくことで、キャンペーンの効果が期待できるようになった。
- この取組を進める過程で、行政、地域住民、民間企業と学校が繋がりをもつことができた。市の担当課と連携して市の施策を実施できた。また、ポイントカードを地域の祭りやイベントの来場者に直接配布することで、地域の方と交流する機会となった。
- 子供たちや地域住民がSDGsや環境への意識を高めるきっかけになった。子供たちは、プロジェクトを通して環境問題や未来へつながる取組について真剣に考える機会となり、プロジェクトに参加した方のアンケートから、環境への関心が高まったとのコメントも寄せられた。
- 地域の魅力を広く発信することで、地域貢献につなげることができた。市広報誌、学校だより、学校ブログ、インスタグラムなどを活用し、本プロジェクトを通して子供たちが発見したふるさとの魅力を多くの方に周知することができた。

## (2) 課題

### ○関係団体との連携

本プロジェクトは地域の課題に直結する活動であるため、学校と行政、地域、民間企業の連携が不可欠であった。子供たちの希望や願いを実現するには、教育現場だけでは解決できない現状がある。実際に、子供たちから出たアイデアを実現するのは難しかった。例えば、ポイントカードをアプリにして携帯端末で活用してもらおうとか、参加者を増やすために割引券や商品を進呈するとか、ポイントカードをたくさんの人が利用する食料品店等に置いてもらい、特典をプレゼントするといったアイデアが子供たちから発案されたが、予算や技術的な障壁があり、実現には至らなかった。今後は、さらに多くの方に環境問題について考えていただくためにも、プロジェクトの企画当初から多くの人と課題を共有し、関係団体の協力を得ていくことが必要である。

### ○環境問題に対する意識から行動へ

環境に関する取組は世界中で行われているが、成果がすぐに見えないこともあり、その効果を感じるのが難しいため、環境問題に対する意識がなかなか上がらないことが現状としてある。未来を予測することは難しいことであり、SDGsの取組は未来への想像力を働かせることが重要であると考え。また、環境問題への取組が大事だと理解していても、多くの人は目下の発展に着目しがちになり、今を豊かに生きることには精一杯である。しかし、SDGsの取組は、よりよい社会を築くための未来への投資であり、子供たちが社会に対する見方や考え方を学ぶ機会として今後も大切にしていきたいと思う。

## IV 知見

子供たちは、粘り強く取り組むことで少しずつ参加者や協力者が増えていく貴重な体験をした。一方で、ポイントカードを全戸に配布したにもかかわらず、一部の人の心しか動かなかった現実も味わった。しかしながら、これは本気で環境問題にチャレンジした成果でもあり、予測困難なこれからの時代を生きていく子供たちにとって「生きた学び」になったと考える。

環境を守る、星空を守るなどの取組には一人一人温度差があり、市民や国民レベルで意識が広がっていくことは大変難しいことである。特に、星空保護の取組は温暖化などと違い、直接的に人の生活に影響を及ぼすものではないため、守らなくてはいけないという切迫感が低いと思われる。そんな中でも、一人でも多くの方の意識を高めるにはどうしたらよいかを考えていく必要がある。星空を守ることは脱酸素にもつながるという子供たちの気付きや学びがSSPPの取組で広がりを見せた。今後は、「星空保護区®」認定の盛り上がりをもっとつないでいくとよいか、自治体や個人がそれぞれの立場で考えていく必要がある。そして、子供たちがこの地域に住み続けたい、学んだことを地域のために生かしていきたいと思える学校や地域にしていきたいと考える。

☆下記のQRコードから、子供たちの活動の様子をご覧いただけます。



ミテログ



インスタグラム



YouTube

福井県大野市阪谷小学校（公式）

## 口頭発表 2

# キャリア教育を要とした小中9年間を見通した 環境教育を実践するためのカリキュラム・マネジメント

～生きる力を育み、ふるさとに誇りをもつ生徒の育成～

広島県広島市立湯来中学校  
校 長 大塚 由美  
教務主任 藤本 祐二

## I 湯来地域の概要

湯来地域は、広島市を流れる太田川の上流域と八幡川の源流域にあたり、川沿いの開けた土地には農地が広がっているが、地域の約9割は山林が占めている。自然環境を生かした林業や酪農が営まれ、鮎、こんにゃく、牛乳、ジビエ等湯来独自の食文化を形成している。

また、湯来地域には1500年前に、傷付いた白鷺が傷を癒やしているところを見た村人により発見された「湯来温泉」と、1200年前に発見され、江戸時代には藩主浅野公の湯治場として栄えた「湯の山温泉」の2つの歴史ある温泉があり、広島市の中心部から車で50分という利便性もあり「広島奥座敷」と呼ばれ、広島県の保養地としてかつては栄えた地域である。

このような魅力がある一方で、人口はここ20年で急激に減少しており、高齢化率は49.6%となっている。本校の全校生徒数は16名、広島市内で一番小さな中学校である。

こうした状況に対して、広島市が中心となり地域の魅力を再確認し、自然や食を生かした体験や温泉を活用した取組「地域活性化プラン『sugusoco 戸山・湯来』」が令和4年から本格的に始まり、将来的に地域の人口増加と復興に貢献できる人材を育成することを目指し進められている。

## II 広島市基本方針（広島市教育大綱より）

### 1 広島市の教育方針「『豊かで深い学び』による広島らしい教育」の推進

広島市基本方針は令和3年より5年構想で推進され、知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」を育む教育を推進していくための取組の一つである「9年間を見通した小中連携の推進」の行政施策対応研究校【教委指定型】小中連携教育推進校Bに湯来中学校校区が指定され、小中両校に加配が付いている。

小中両校とも教員数が少なく、授業はもちろん校内での分掌の仕事を一人が重複して何個も抱えなければならないため、これまでは小中連携に関する仕事を推進していくことが大変難しかった。しかし、この指定を受けたことで小中9年間の学びが大きく前進した。

### 2 ひろしま型カリキュラム「ひろしま学びの時間（旧：言語・数理運用科）」

平成22年度から小中9年間を見通した本市独自の教育課程、ひろしま型カリキュラムの一つとして「言語・数理運用科」を全校で実施した。（図1）

「言語・数理運用科」とは、「日常生活に見られる様々な事象についてテキストから目的に応じて必要な情報を取り出し、各教科等で身に付けた知識と経験とを関連付けて思考・判断し、自らの考えを適切に表現する力を育成する」ことを目標として実施した。（図2）実施学年は小学校5年生から中学校3年生で、授業時数は年間50時間（中1）・70時間（中2・3）の内35時間を指導時間に充て、小学校は担任、中学校は全教師が指導にあたった。

しかし、学習指導要領の改訂に伴い、探究的な活動を充実させるための時間確保が必要になったこと、及び、各教科で「情報の取り出し→思考・判断→表現」の活動が行われるようになったこと等があり、「言語・数理運用科」は「ひろしま学びの時間」と名称を変え、年間1単位（4h）以上の授業を行うように変更となった。

**ひろしま型カリキュラム**  
小中9年間を見通した教育を進めます

実効的・楽しいこれからの時代に、子ども一人一人が得意それぞれの分野で活躍できるよう、「読み」「書き」「計算」はもちろんのこと、思考・判断・表現するための「言語と数理の運用能力」を培うため、平成23年度から、全小・中学校に広島市独自のカリキュラムを導入します。

(1) 小学校と中学校の連携・接続を図ります。

小 学 校				中 学 校			
小1	小2	小3	小4	小5	中1	中2	中3
9年間を見通した市独自の学習指導計画により実施							
学びの基礎づくりと基礎の徹底				思考力・判断力・表現力の向上と発展			

読み・書き・算数の基本習得の徹底、技能の定着 → 主体的な学習、対人コミュニケーション

言語科、算数科の単元時間（1日15分×3日＝週あたり45分程度）の実施 → 新教科「言語・数理運用科」、小学校「言語科」の実施

●「言語と数理の運用能力」を高めるために  
各教科では、小学校1年生から中学校3年生までの9年間を通して、全学年の到達目標を明確にし、目標に合った指導を行っています。

(2) 小学校5年生から「言語・数理運用科」を実施します。

●「言語・数理運用科」では  
- 言語や数理を運用して、思考・判断・表現する力を育み、さらに日常生活の中で活用できる能力を育成します。  
●「言語・数理運用科」の授業は  
- 身の周りの事象について、必要な情報を取り出し、課題を究明し、これまでに経験した身に付いた知識や技能を駆使して、思考・判断し、自分の考えを表現する学習です。  
- 新聞記事、手書き、漢字書、映画、など日常生活の中にあるテキスト（資料）をもとに学習します。

(3) 小学校5年生から「言語科」を実施します。

●小学校「言語科」では  
- 「聞くこと」「話すこと」を中心に言語の音聲に慣れ親しむ活動を通して、言語の文化に対する興味・関心を高め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成します。  
●中学校「外国語科」では  
- 「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」をバランスよく取り入れるとともに、繰り返し学習の充実を図り、英語によるコミュニケーション能力の基礎を育成します。

(図1)

**言語・数理運用科**  
中学校第1学年(改訂版)

広島県教育委員会

待ってろ。ワシらで、思いっきり湯がせる。

その「たる」を溶かしたのは、広島とカープへの愛だった。

(図2)

### 3 学校教育活動地域連携推進事業

令和4年度には「自分たちのまちを愛する心」や「将来の地域社会を担う生き方や働き方について考える力」を育むために、地域人材等を活用した教育活動を行う目的で学校教育活動地域連携推進事業が全校で始まった。この事業は、それぞれの歴史的、地理的、人的資源等の地域特性や児童生徒等の発達段階を踏まえ、「地域の自然・歴史」「伝統文化」「キャリア教育」の3つのテーマから学校運営協議会等と協議しながら、最適なテーマを選択し、地域人材等を活用した取組である。

この事業により学校運営協議会等との結び付きが強くなり協力して下さる方々に講師の願いや謝礼金を渡せるようになり、声を掛けやすい状況を作ることができた。

## III 研究の視点

### 1 学校教育目標での位置付け ～キャリア教育を要として～

本校の学校教育目標は、「公の場に通用する人の育成（社会人として必要な学力、社会性、人間性を育む教育）」である。（図3）未来を予測することが困難な時代だからこそ「生きる力」を育み、力強く生き抜いていける力を身に付けてほしいという願いが込められている。



目指す児童生徒像を「郷土を愛し、心豊かでたくましく、主体的・創造的に生きる児童生徒」とした。

中学校区のすべての教職員が小中学校の9年間を見通して、同じ視点を持ち、育てたい子供の姿を共有することで、柔軟性をもった教育活動を行うことができるようにするためである。また、少人数であることや美しく実り豊かな自然環境を強みとして、将来この地域を支えてくれる子供たちを学校教育の中で大切に育てていきたいと考えたからである。

また、令和6年度の研究主題を「主体的・対話的に学ぶ児童・生徒の育成」～9年間で育てたい力に即した生活科・総合的な学習の時間の授業改善を通して～とし、この構想図に合わせて「YUKI未来プロジェクト」(生活科・総合的な学習の時間)育てたい力の系統表を作成し、児童生徒に付きたい資質・能力を見える化することで、どの学年でどういう力をどこまで付けておくかを全教員で共有することができた。指導案を作成するときには必ず付きたい力の記号を記入し、誰が指導するときも付きたい力を一目で確認できるように工夫した。(図6)



(図5)

YUKI未来プロジェクト(教科) (生活科・総合的な学習の時間)で育てたい力の系統表		湯東中学校区小中教育研究会		
	第1期(小学校1～2年)「ひらけろ」	第2期(小学校3～4年)「あひらけろ」	第3期(小学校5～6年)「つなげろ」	
育	1. 知識	1. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。	1. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。	1. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。
	2. 技能	2. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。	2. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。	2. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。
	3. 態度	3. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。	3. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。	3. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。
	4. 知識	4. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。	4. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。	4. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。
	5. 技能	5. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。	5. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。	5. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。
	6. 態度	6. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。	6. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。	6. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。
	7. 知識	7. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。	7. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。	7. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。
	8. 技能	8. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。	8. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。	8. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。
	9. 態度	9. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。	9. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。	9. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。
	10. 知識	10. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。	10. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。	10. 生活の中心となる、自然・社会・文化の知識を身に付け、生活に活用できる。

(図6)

#### IV 本校の取組

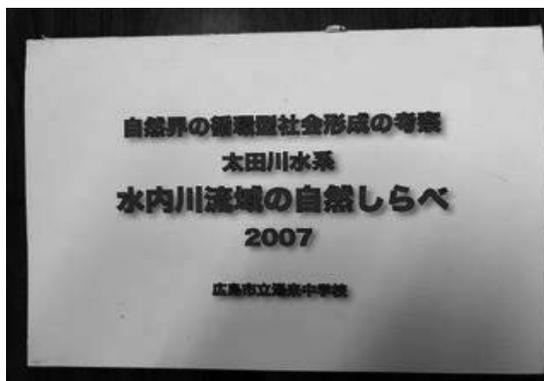
##### 1 環境教育の変遷（平成 17 年度～令和元年度まで）

###### (1) はじまり

「総合的な学習の時間」が本格的に始まったのは平成 14 年度からである。本校で水質調査が総合的な学習の時間の中ではじまったのは、広島市と合併した平成 17 年度からである。翌年、平成 18 年度からは「自然界の循環型社会形成の考察 太田川水系 水内川流域の自然調べ」と名前を付け、2 年生後半から 3 年生と学年をまたいだ取組であった。地域の方を特別非常勤講師として招き、指導をしていただいた。水内川水系の調査の集計（図 7）は、現在まで続いており、19 年間結果が 4 枚の表にまとめられている。

###### (2) 黄金期

平成 19 年度からは「自然界の循環型社会形成の考察 太田川水系 水内川流域の自然調べ」の目標を「心豊かな人間形成」として、水質調査だけでなく、森を調べて伐採した木で炭焼き体験をしたり、里山における人と自然の関わりや棚田を調査したりした。3 年生の終了時には一人一人が調べたことを小論文にまとめ発表し、認定証や冊子が授与された。



**水内川水系の調査集計表 1**      **2005 年～2023 年までの 19 年間の調査結果**

調査地点	A地点					B地点					C地点					D地点					E地点								
	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029				
調査年	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029				
ランク別生き物の名前 / 調査日																													
カワガサ	2																												
ヒラタカガロウ																													
ナガシトビケラ	2	1	5	63	5	15					4	8	45	1		20	8	12	2	12									
ヤマトビケラ	2										6					7	4	4	30	26									
A																													
ヘビトンボ																													
ブユ																													
アミガ																													
ザワガニ																													
ウスムシ / その他のA	73	71	194	14		5					71	4	711	3		76	8	711		710	14	710	1						
B																													
コガシマドビケラ	4																												
オオシマドビケラ																													
ヒラタドムシ																													
コオニヤンマ																													
ゲンジボタル																													
スジエビ																													
ヤマトビケラ																													
イシマキガイ																													
カワニナ / その他のB											180	48								10	6								
C																													
ヒメムシ																													
クイコウキ																													
ヒメカマキリ																													
D																													
イソコブツ																													
ニホントロコエビ																													
カニシ																													
ヒル / その他のC																													
ヒメシジミ																													
キョウハネ																													
E																													
イシマキガイ																													
イソシジミ																													
アザガザガニ / その他のD																													
その他の科別不明	9										50	15				6													
水質						22	15				20	14				24	16			25	16								
PH	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0				
DO	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0				
水質調査	A	A	A	A	B	A	B	B	B	A	A	A	B	A	A	A	A	C	A	A	A	A	A	A	A				

(図 7)

### (3) 言語・数理運用科導入

平成 22 年度に広島市では前述の「言語・数理運用科」が始まり、総合的な学習の時間の内容の変更が必要となった。総合的な学習の時間の授業時数は、言語・数理運用科で 35 時間を費やすため、1 年生 15 時間、2 年生 35 時間、3 年生 35 時間と大幅な減少となった。しかし、地域との関係やこれまでの取組を継続させたいという教職員の思いから、総合的な学習の時間や特別活動の授業時数が大幅に増えたが、言語・数理運用科がひろしま学びの時間に名称が変わる令和元年度までの 9 年間、取組は続けられた。しかし、教職員の人事異動もあり、取組開始当時の思いは徐々に薄れ、疲労感を感じる教職員が多くなっていった。

令和 2 年度、新型コロナウイルス感染症のため、本校においてもこれまでの取組の見直しを余儀なくされた。

## 2 環境教育再考期（令和 2 年度～令和 5 年度）

しかし本校は、コロナ禍の中でも少人数の強みを生かした環境教育を継続していくこととし、これまで取り組んできたものは方法を工夫しながら全てを実施することとした。

### (1) 鮎の放流

4 月中旬～5 月中旬、水内川漁業協同組合の協力で鮎の放流と「水内川」についての講義を行っている。講義の内容は、「水内川に棲んでいる魚」「川と山の関係」「漁協の仕事」等である。講義内容や放流体験の重要性はもちろんであるが、放流する最中に発する生徒のつぶやきへの漁業協同組合の方の生きた回答を聞くことのできる良い体験である感じている。



### (2) 水質調査

平成 17 年度から継続している「水内川の水質実態調査」の調査項目は 4 項目で、水温、PH（水素イオン濃度指数）、COD（化学的酸素要求量）、水中の石を 5 個拾い、裏をさらい水生生物の種類と個体数を調べている。



調査結果は、広島市の総合文化祭や本校の文化祭、地域の祭りで発表し、水内川の現状を地域の方々にお知らせしている。



### (3) シャワークライミング・カヤック体験

広島市湯来交流体験センターの協力でシャワークライミング体験とカヤック体験を隔年で実施している。場所は、学校から約5km西の水内川上流域である。

令和5年度は、カヤック体験、令和6年度はシャワークライミング体験を実施した。両体験共にライフジャケットに身をゆだねて、湯来の自然を眺めながら水内川の冷たい水につかり、全身で水内川の自然を体感できるダイナミックな体験である。保健体育の授業で行っている。



### (4) ふるさと湯来ごはん

「ふるさと湯来ごはん」は湯来で採れた食材を使って、美味しい和食をつくりいただくという取組である。食材の鮎は水内川漁業協同組合から、野菜や米は保護者や地域の方に安価で提供していただいている。家庭科の調理実習で行い、地域の水内女性会の方々と共に作っている。

写真は、女性会の方に鮎の内臓の処理を教えてもらいながら、鮎の唐揚げを作っている所と、献立メニューの湯来米のごはん、水内川の鮎の唐揚げ、湯来産の野菜を使ったおひたしとみそ汁と佃煮である。



## 3 環境教育転換期（令和6年度から）

令和6年度、本校は昨年度に引き続き学校教育目標を「公の場で通用する人の育成（社会人として必要な学力、社会性、人間性を育む教育）」に設定した。短期経営重点目標の具体的方策として、「実生活に活用できる思考力や表現力等の育成を目指し、生徒が主体的に学び、行動できる力を育成するために探究的な学びの学習内容の充実を図る」とした。

### (1) 研究主題

研究主題を「主体的・対話的に学ぶ生徒の育成～キャリア教育を要とし、9年間で育てたい力に即した生活科・総合的な学習の時間の授業改善を図ることを通して～」に設定し、総合的な学習の時間の授業改善を中心とし、すべての教育活動をキャリアの視点でつなぐことで生徒自らが「主体的・対話的」に学びようとする姿の育成を目指すこととした。

令和5年度は、キャリア教育を要とし3年間の系統的な教育課程の実践を目指したカリキュラム・マネジメントを通して、すべての教育活動をキャリア教育の視点でつなぐことをテーマに研究し、カリキュラムマップ(図4)の作成、1年間を「見通し、振り返られる」キャリア・パスポート(図10)の使用、キャリアカウンセリングとリンクさせる等、文字通り「要」として充実させてきた。

学校評価アンケートにおいても、「自分の夢や目標、やりたいことなどを決めている」の項目に対して8割の生徒が肯定的な評価をしており、取組の成果がうかがえる。

また、小中連携教育研究会において、生活科・総合的な学習の時間における「9年間で育てたい力の系統表」を作成した。(図6)

令和6年度は、今まで以上に小中の連携を強め、この系統表をもとに小中9年間の生活科・総合的な学習の時間の授業改善を中学校区として研究していきたいと考えている。

(2) 具体的な取組について

キャリア教育カリキュラムマップに基づいた総合的な学習の時間を「主体的・対話的な展開重視の単元」と「技能を獲得することを重視した単元」に分け、探究課題・目標・時数・主な内容・取組日程等を示した取組概要(図8)と9年間で育てたい力に即した単元の内容を再検討し、ルーブリック(図9)を作成した。

学年	探究課題	探究目標	単元	学習時間	内容	学習内容	単元	学習内容(1) 総合的な学習の時間											
								1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年
1年	キャリア教育	キャリア教育	キャリア教育	1年 16時 2年 21時 3年 21時	キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用	キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用	1年 2年 3年	キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用											
								キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用											
								キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用											
2年	キャリア教育	キャリア教育	キャリア教育	1年 23時 2年 23時 3年 23時	キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用	キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用	1年 2年 3年	キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用											
								キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用											
								キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用											
3年	キャリア教育	キャリア教育	キャリア教育	1年 23時 2年 23時 3年 23時	キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用	キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用	1年 2年 3年	キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用											
								キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用											
								キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用											
4年	キャリア教育	キャリア教育	キャリア教育	1年 23時 2年 23時 3年 23時	キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用	キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用	1年 2年 3年	キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用											
								キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用											
								キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用											
5年	キャリア教育	キャリア教育	キャリア教育	1年 23時 2年 23時 3年 23時	キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用	キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用	1年 2年 3年	キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用											
								キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用											
								キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用											
6年	キャリア教育	キャリア教育	キャリア教育	1年 23時 2年 23時 3年 23時	キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用	キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用	1年 2年 3年	キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用											
								キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用											
								キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用											
7年	キャリア教育	キャリア教育	キャリア教育	1年 23時 2年 23時 3年 23時	キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用	キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用	1年 2年 3年	キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用											
								キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用											
								キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用											
8年	キャリア教育	キャリア教育	キャリア教育	1年 23時 2年 23時 3年 23時	キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用	キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用	1年 2年 3年	キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用											
								キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用											
								キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用											
9年	キャリア教育	キャリア教育	キャリア教育	1年 23時 2年 23時 3年 23時	キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用	キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用 キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用	1年 2年 3年	キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用											
								キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用											
								キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用											
学習時間合計		1年 50時 2年 50時 3年 50時	備考		※本コースは、キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用による学習時間(1)と、キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用による学習時間(2)とを合わせた学習時間(3)を示している。学習時間(1)は、キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用による学習時間(1)を示している。学習時間(2)は、キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用による学習時間(2)を示している。学習時間(3)は、キャリア教育(総合的な学習の時間)の活用による学習時間(3)を示している。														

(図8)

小学校では探究のサイクルの中の「課題設定」に焦点を当て、体験や資料等の出会いから様々な問いを生み出す経験を積み重ねていくことや「整理分析」の場面では、様々な思考ツールを繰り返し活用し、その良さを実感させることを通して、いずれは児童が自発的に活用できるようにしていきたいと考え、各学年で指導案を作成している。中学校では、社会活動と

リンクした学習課題を設定し、学習した内容が実際の社会の中で具現化されるという明確なゴールを設定し、そのことで意欲をより引き出し主体的に学習を進めるとともに実社会の中で考えたことが実行されることを踏まえ、対話を重ね検討を深めることにつなげていきたい。小中両校で今年度重点を置くポイントは異なるが、9年間を見通した際に、探究のサイクルを回すことができるよう、それぞれの発達段階に応じて系統立てて研究を進めていきたいと考えている。

小学校では11月に「課題設定」の場面を授業公開する。児童が自ら課題をもつためには、考えるための素材が必要となる。その素材とは、経験や体験、資料や対話が挙げられる。課題を設定できるようにするには、どのような素材を与えれば良いのか、そしてその素材から課題を生み出すために、教師がどのように意図的な働き掛けをしていけば良いのかを検討し、中学校区で共有することにより、9年間を見通したカリキュラム及び教育活動の礎としていきたい。(図9)

(図9)

(図10)

(2) 取組計画

実施した単元においてはキャリア・パスポートを使用した振り返りを必ず実施し、分析したことを計画の改善に役立てるようにしている。また、全教員でキャリアカウンセリングを年4回実施することや先を見通した計画をたてるためのフォーサイトノート、メンター制度を実施することで、特別活動と総合的な学習の時間を系統的につなぎ、生徒も3年間見通して学校生活を送れるように見直した。

研究授業も年3回(小学校1回・中学校2回)実施する予定とした。

日時	内容	
4月	研修会1回目	研究についての概要説明
4月	特別活動	キャリアカウンセリング①

4月末～5月	授業	関連した授業スタート（総合・学活）
5月30日（木）	第1回小中連携教育研究会 全体会	内容未定 地域活性化プランについて
6月～7月	研究授業①	総合：「ふるさと湯来」（課題設定）
夏季休業中	校内研修会	シンキングツールの活用について
夏季休業中	第2回小中連携教育研究会 全体会	内容未定
8月	夏休み明け学級開き	キャリアカウンセリング②
9月～10月	研究授業②	総合：「ふるさと湯来」（情報の整理・分析）
11月8日（金）	ふるさと湯来 企画提案 ※小学生が参観	@湯来東小 提案対象予定：学校運営協議会委員 地域活性化プランコーディネーター 広島市職員 小・中学校保護者
11月	進路に向けて （3年生）	キャリアカウンセリング③（3年生のみ）
11月～12月	第3回小中連携教育研究会全体会	生活・総合 研究授業（小学校）
1月	冬休み明け学級開き	キャリアカウンセリング③（1・2年）
3月	年間のまとめ	キャリアカウンセリング④
通年	キャリアノート	見通しと振り返りの継続

## V 成果と課題

### 1 成果

- ・小中9年間の環境教育をキャリア教育と結び付けたカリキュラムを構築することで、中学校区全体で情報を共有し、議論しながら全教員で授業改善を進めることができた。
- ・学校教育の全ての活動の中で日頃から何気ない小さな気付きを大切にしながら、失敗を恐れず取り組むことで持続可能な楽しい環境教育につながっていくことが分かった。
- ・限りある財源の中で、色々な角度から広く活用方法を工夫し、地域の特徴を生かしながら進める事ができた。

### 2 課題

- ・中学校3年間だけでは、探究的な学びは獲得できない。中学校区として取り組んでいくことが必要である。小中9年間の中での失敗できる時間を大切にしていきたい。
- ・生徒たちにとって新たな発見があるように、課題設定を工夫することが重要である。そのためにも振り返りをしっかり行わせ、次の進め方を話し合い、取組が形骸化しないように工夫したい。

## VI 終わりに

湯来地域は、令和12年度に湯来地域の小中学校4校が統合され、「小中一貫教育校」が新設される予定である。湯来地域の何をどのような形で残すのかを学校内だけでなく、教育委員会や地域、保護者としてしっかり議論していかなければならないと考えている。生徒にとって目の前にある当たり前前の豊かな自然の素晴らしさに生徒自身が気付き、自分たちの力でこの環境を大切に持続していこうという気持ちが湧くような教育をこれからも実践していきたいと思う。

今回、全国小中学校環境教育研究大会で発表させていただいたことで、改めて私たちの取組の重要性や改善すべきと事が理解できた。今後も、生徒と共に湯来地域の環境はもちろん、もっと視野を広げて環境教育を研究し、後世へ伝えていきたいと思う。

## 持続可能な社会づくりのための環境教育の推進

～環境教育によって育む学力と環境保全意識～



東京都小中学校環境教育研究会  
 会 長 箱 崎 高 之  
 研究部長 鈴木 元

### I 研究主題設定の理由

今年7月21日の世界平均気温が、1940年以降の観測史上最高を更新したとEUの気象情報機関「コペルニクス気候変動サービス」が速報値として発表した。また、昨年7月、国連のアントニオ・グテーレス事務総長は、国連本部での記者会見において、「地球沸騰化の時代」と発表し話題となった。今年度も昨年同様、私たち自身が暑さを体感し、地球沸騰化を実感する毎日を送っている。

これまで本研究会は、人類の行き過ぎた社会活動が引き起こしてきた環境問題に警笛を鳴らし、持続可能な社会への改善を試みる教材化を進め、授業実践を重ねてきた。例えば、2100年の気温予想を取り入れた授業、気候変動に関する授業、食品ロスやプラスチックの廃棄等の問題についての授業、生産者視点での環境保全に向けた授業等である。

#### —今だからこそ「身近な環境保全」を考えさせたい—

世間では、多くの場面でSDGsのアイコンを見ることができるようになった。また、子供たちの多くは、様々な環境問題について学ぶ機会が増え、環境保全意識が高まってきているように思われる。実生活では、紙ストローの利用やマイボトル持参の推奨などCO<sub>2</sub>削減に向けた取組が見られるようになってはきているものの、ペットボトル飲料やプラスチック繊維を使用したファストファッションの減少には、なかなかつなげていない。環境問題と言っても、扱わなければならない課題は、プラスチック問題、エネルギー問題、衛生、食糧問題等と多岐にわたる。このままでは2030年にSDGsを達成することは、大変困難である。また、これらの課題に対して、解決の糸口を見つけることが困難なものも多くある。2030年以降に、どのような取組をしないかなければならないか。さらに考える必要がある。

これまでの本研究会の研究も踏まえ、地球温暖化対策についての授業だけではなく、より身近な環境保全の意識を醸成し、子供たち自ら考え、取り組んでいくことが、子供たちの行動変容につながると考えた。

そこで、今年度の研究は、総合的な学習の時間を中心とした「学校ビオトープ」の活用に焦点を当てた。多くの学校にある「ビオトープ」を活用した実践を行うことは、環境課題に対する行動変容に一見遠回りのように思われる。しかし、より身近な環境への保全意識を高めることで、多岐にわたる環境課題をより自分事として捉え、自分には何ができるのかを具体的に考え、行動することができるようになると考えた。

#### —私たちにはESDがある—

学校教育では、何からどのように取り組んでいけばよいのだろうか。新学習指導要領の前文に

は、「持続可能な社会の作り手となることができるようにする」と記されている。この先の世界をどうしていきたいのか、そのためにどのような人間を育てるのか、そのビジョンをもたない教育は、持続不可能な地球を増長させていく。公害の滅失、持続可能な社会の実現、2030年までの目標としてのSDGsの達成には、数ある問題に主体的に立ち向かい、発信、行動する人材を育成する必要がある。その人材育成のために必要となる学校教育の学習活動の根幹は、学校経営に直結した「総合的な学習の時間」である。GAP(グローバルアクションプログラム)やホールスクールアプローチ、カリキュラム・マネジメント、ESDカレンダーなどに基づいて、未来を構築する学びを実践するために「総合的な学習の時間」の果たすべき役割は大きい。

さらに、これまで本研究会が取り組んできたESDは、その実現を可能にすると信じる。それは、教育の、教師の、そして児童・生徒の変容をまさに希求するものである。これまで本研究会が取り組んできたESDの授業概念を盛り込み、持続可能な社会に向けての小さな一歩を積み重ねてゆくべく、教師一人一人が児童・生徒の実態に応じ、自らすすんで環境教育の実践を構築することができるように、単元及び教材開発を行った。環境教育とは何か、ESDとは何か、学校現場が来るべき私たちの明日に向けて迷うことなく前進するために、本研究を生かして欲しい。

## II 研究の方法

- 1 役員定例会で理論構成を行う。
- 2 全国小中学校環境教育研究会で作成した「新しい環境教育」で示す児童・生徒の3つの能力・態度をもとに、本会研究部で指導計画・単元・授業プランを作成する。

### 【児童・生徒に身に付けさせたい3つの能力・態度】

地球とそこに生きるすべての生命にとって

- (1) よりよい環境を求め持続させる意欲や態度
- (2) よりよい環境のあり方を考える力
- (3) よりよい環境の創造を目指す社会にすすんで参画し、貢献する実践力

- 3 全国小中学校環境教育研究会、外部機関と連携をし、研究員各校において指導実践を深める。
- 4 全国小中学校環境教育研究会の発表会(令和6年12月26日)において、研究発表を行う。

## III 研究経過

- 1 学校現場でのESD推進状況の確認
- 2 取り組み可能な課題の検討
- 3 昨年度の研究の検証
- 4 学校ビオトープを活用した教材、単元開発、授業構築
- 5 研究会員の学校における授業実践(一部)
- 6 ポートフォリオによる授業検証

## IV 授業実践例

### 1 町田市立小中一貫ゆくのき学園大戸小学校 第6学年・総合的な学習の時間等

「学校ビオトープ」～身近な環境保全から、自分たちにできること～

A校は、多摩丘陵に位置し、自然環境に恵まれ、ビオトープや学校林等の環境資源が豊富な環

境にある。しかし、これまで、その豊富な資源を活用した体系的な環境教育は行っていたものの、単元設計から10年ほどが経過し、児童の体験的な活動のみとなり、児童が受け身で授業を受けることが多くなった。そのため、児童が、「学校ビオトープ」という身近な環境を取り扱うことを通して、自ら課題を設定し、探究的な学習を行うことを重点とした。

### (1) 単元の目標

身近な環境への保全意識を高めることで、多岐にわたる環境課題をより自分事として捉え、自分には何ができるのかを具体的に考え、行動することができる。

### (2) 単元の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準	①「ビオトープ」や「環境保全」といった視点をもとに、詳しく調査したり、体験したりできる。 ②調査結果、体験活動をふまえ、探究課題解決に向けた効果的な学習計画を立てることができる。 ③G Tの話から、ビオトープ環境の実態や課題について理解している。 ④学び得た知識や情報をもとに、環境保全に効果的なアプローチができる。	①自分たちのどのような思いや願いを実現させたいのかを明確にし、課題を設定することができる。 ②学校のビオトープの実態を知るために、どのような調査を行うことが有効か考えることができる。 ③自分たちが選択した課題についてより良く知るために必要な手立てや意見を出し合いながら考えることができる。 ④学校ビオトープの実態をふまえ、現在の魅力を保ちつつ、よりよい環境にしていくにはどうすればよいかを話し合える。	①環境保全や自校の自然の魅力について関心をもち調査したり、体験したりしようとしている。 ②自分と異なる意見や考えを生かしながら、協働的に探究活動に取り組んでいる。 ③G Tの話に関心をもち、自分たちの課題解決に必要なことを質問したり、まとめたりしようとしている。 ④環境問題を自分事として捉え、自分には何ができるかを具体的に考えたり、行動できたりする。

### (3) 単元計画 (全28時間)

	時間	主な学習活動	備考
知る	3	○ビオトープの定義、環境保全の意義を知る。 ○「ビオトープや環境保全」という視点で学校を探索し課題や、やりたいことをみつける。	○ゲストティーチャー(環境保全専門家)から環境保全について学ぶ機会とする。
課題設定	3	○課題設定をする 「学校にいる生き物を元気にしたい」 「昨年度から取組んでいる池の整備」 「学校の動植物についてもっと知りたい」 「学校ビオトープについて、他の学年へ広めたい」 ○取り組みたい内容を分類していくつかのチームをつくる。 「生き物復活大作成」 「池ガマとの闘い」 「ビオトープ調査隊」 「ビオ広報」	○課題設定は、それぞれがテーマを考え、類似するテーマの子供たちが集まり、チームを作る。 ○1チーム3～4名程度 ○子供たち自身が主体的に取り組むことができるよう助言していく。
探求学習	18	○各チームごとに活動計画を立て分担する(3) ○計画に沿って活動を進める(8) ○活動経過報告。(1) ○池のガマを整備。根元ら駆除する。(2) ○池の周りに石を置いたり浮島を作ったりする。(2) ○校内の石を集める(授業外活動) ○里山から採取した粘土で土器づくり(2)	○10月中旬に実施。(ブヨに注意) ○10月下旬に実施。 ○主に放課後の時間を利用して石集めをする。 ○土器づくりは図工と連携。時数を確保する。
まとめ	4	○チームごとに活動報告を作る(2) ○全体の活動報告をつくる(2)	○活動報告(発表)の方法についても、チームごとに決める。
表現	3	○チーム別活動報告。(1) ○B小学校とリモート報告会。(2)	○学校ビオトープについて、オンラインで共有する。

#### (4) 授業の様子 (チームごと)

##### ① 生き物復活大作戦

生き物復活大作戦では、ビオトープに集まる鳥類を増やすために、子供たち自ら巣箱を制作、設置。また、池のエコトーン (陸域と水域の境界) に生物の住処を増やすために、集めてきた石を設置した。



巣箱づくり1



巣箱づくり2



エコトーンへ石を設置

##### ② 池ガマとの闘い

本校の池は、ガマが大量に増え、蒸散量が多くなり、夏場は極端に水位が下がる現象があった。また、ガマが密集していたので、水生生物が移動しづらい状況だと予測し、ガマを根から取り除く作業を行った。



ガマを抜く様子



エコトーンへ植栽シート設置

また、崩れ始めていた水辺を守るために、植栽シートを貼り、植物の根により、水辺を補強することとした。植栽シートにより植えた植物は、在来種にこだわり、ススキ、チカラシバ、ヨモギ等とした。



シート設置2か月後

##### ③ ビオトープ調査隊



池の周りを歩くタヌキ

学校ビオトープにどのような生物が集まってくるのかを調査し、図鑑を作成しようと考えた児童は、写真を撮り、調べるだけでなく、定点カメラを使用して、定点観察も行った。昼間は、カラス等が集まってきたが、夜には、タヌキやウサギも見られた。



ビオトープマップ

##### ④ ビオ広報

校内にビオトープ (生き物の住処) がどこにあるのかを調べ、他の学年に知らせるために広報活動を行った。

これらの活動は、子供たちが自発的に考え、教職員に相談しながら実施してきた。もちろん大人の手を借りることもあるが、あくまでも子供たちが発信したアイディアへの援助をするにとどめた。

### (5) オンライン発表会

学校ビオトープに関する探究学習の成果を、豊島区立仰高小学校の5年生（実践事例2）とオンラインで発表会を実施し、共有をした。探究した内容を共有したことで、両校の児童は、地域による環境の違いや探究方法の違いを感じ、互いの探究に刺激を受け、さらに学びを深めていこうという意識の醸成が見られた。



### (6) ESDカレンダー

今年度のビオトープについての探究学習は、1年間では完結するものではなく、次年度へ引き継ぎ、継続的に行っていくものである。そのため、学校全体として持続的に取り組むために、ESDカレンダーの作成を行った。他の学年でもESDカレンダーを作成し、環境教育をホールスクールアプローチで進めていく。

**大戸小学校 ESDカレンダー**

知識・技能 → 「ビオトープ」や「環境保全」という視点で調査する。得た知識や情報をもとに、環境保全に効果的なアプローチする。ビオトープの環境や変化、課題について理解する。  
 思考・判断・表現 → 実現したいことを明確にし課題を設定する。実施するために、どのような調査が必要かを考える。自分達の選択した課題についてよりよく知るための多立てや意見を出し合いながら考える。  
 学びに向かう力・人間性等 → 環境保全や会社の自然の働きに関心をもつ活動する。異なる意見や考えを認めながら探究活動をする。環境問題を自分事としてとらえ、自分には何が出来るかを具体的に考え行動する。

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
外部連携						宮内さん・長島先生	環境調査プログラム		豊島区環境小		
体育 特活	体育：設定した目標を達成するためにどんなポイントを意識して練習するかを判断する力をつける。 特活：テーマや目的などの「軸」から決めないで話し合いを進める力をつける。										
算数	問題解決学習の基礎を身につける。学習のねらいをつかむ+予想+自力解決+解決後記+まとめ+学習のふりかえり										
道徳 家庭	道 自然遺産 白神山				道 サマゾノ川	道 家康さんからのメッセージ				道 きばくを辞めよう	道 持続可能な社会
理科	ものごとの見え方と空気	人や他の動物の体	植物の体		生き物と雲・霧・水・空気		火山や地震と土地の変化		電気の利用		人の生活と自然環境
総合	<b>学校ビオトープ</b> I. 学校のビオトープを知る。 II. 学習課題をつくる III. 探究学習 ①生き物保護大作戦 ②ビオトープ調査隊 ③編文土器を作ろう ④池がまどの戦い ④ビオ広報 IV. まとめ V. 表現										
国語	語り道	聞いて、考えを深めよう	デジタル機器と私たち		せんねんまんねん	いちばん大事なものは	みんなで楽しく読書のために	『鳥獣図説』を読む	考えるとは		高い命
社会 行事		社会1 鶴岡の村から三徳の園へ		行事 日光林間学校							社会2 世界の未来と日本の役割
外国語 音楽・図工	積極的にコミュニケーションをとる態度や表現力をつける										

## 2 豊島区立仰高小学校 第5学年・総合的な学習の時間等

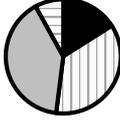
### 「地球グリーン大作戦～仰高小ビオトープと環境保護～」

#### (1) 単元の目標

里地里山の理念をもった本校ビオトープと豊島区のかつての豊かな自然を再現した「としま

の森」に共通する都市における自然との共生と自然保護について調べ、環境保護の必要性を考える。

## (2) 児童の実態

<p>① 総合の学習は好きですか。</p>  <p>■とても好き(24人) □好き(15人) ■あまり好きではない(5人) □好きではない(6人)</p>	<p>② 自分の学校のビオトープにどのような生物がいるか知っていますか。</p>  <p>■よく知っている(8人) □知っている(18人) ■あまり知らない(20人) □知らない(4人)</p>	<p>③ 授業以外で学校のビオトープに息ますか。</p>  <p>■よく行く(4人) □行く(16人) ■あまり行かない(14人) □行かない(16人)</p>
<p>④ 自分の学校のビオトープを他の人に説明することができますか。</p>  <p>■よくできる(4人) □できる(12人) ■あまりできない(24人) □できない(10人)</p>	<p>⑤ 自分たちが住んでいる地域の生き物について知っていますか。</p>  <p>■よく知っている(9人) □知っている(15人) ■あまり知らない(16人) □知らない(10人)</p>	<p>⑥ 総合の学習等で作ったものを他の学校へオンラインで発信したいと思いますか。</p>  <p>■とでもしたい(8人) □したい(26人) ■あまりしたくない(3人) □したくない(13人)</p>

ビオトープに関係する質問を見てみると、②のように自分の学校にいる生物を知っていると回答した児童が多い。しかし、記述させてみるとほぼ「メダカ」と答えた。仰高小のビオトープは地形が工夫されており、メダカ以外にも様々な生物が生息している。しかし、③の通り児童はビオトープに授業以外では行かなかつたり、興味がなかつたりする様子が見られる。この学習を通して、自分の学校のビオトープや地域に生息する生き物について説明できる児童④⑤が少しでも多くなることが期待される。

## (3) 単元計画

学習過程	○学習過程	☆留意点
<p>課題設定 (1時間)</p>	<p>○身の周りの環境について考える。 ○ビオトープについて知っていることや、調べたいことを話し合う。</p> <p>-----            ビオトープについて考え、疑問に思ったことを話し合おう。            -----</p>	<p>☆毎時間振り返りシートの活用をする。 ☆思考ツールウェビングマップを使用して、身の回りの環境を考えさせる。</p>

小单元一 「仰高小のビオトープについて知ろう」 (10時間)	情報の収集 (4時間)	<p>○仰高小ビオトープ創設者の話を聞き、仰高小ビオトープの歴史と地球環境・環境保全の大切さを学ぶ。</p> <p>○全員でビオトープの観察を行う。</p> <p>○自分で調べたいものを決め、一人で行うのかグループで行うのか選択させる。</p> <div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-right: 5px;">本</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-right: 5px;">タブレット</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-right: 5px;">顕微鏡</div> <div style="margin-left: 20px; border: 1px solid black; padding: 5px;">選択</div> </div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>ビオトープについて疑問に思ったことを調べよう。</p> </div>	<p>☆としまいきものさがしを児童と一緒に取り組む。</p> <p>☆自分たちで視点をもって観察をさせる。</p> <p>☆年間を通して、継続的に観察を行う。</p> <p>☆仰高小のデータを配布する。(令和2年度豊島区動植物生態調査報告書)</p>
	整理・分析 (2時間)	<p>○集めた情報を整理・分析する。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>今まで集めた情報を誰にどのように伝えるか考え、話し合おう。</p> </div>	
	まとめ・表現・振り返り (3時間)	<p>○調べたことをまとめる。 まとめ方：ポスター・スライド・劇・新聞</p> <p>○単元を振り返り、今後の見通しをもつ。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>仰高小のビオトープを全校のみんなに伝えよう。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>まとめていく段階で、仰高小と比較対象が必要になった場合は、状況に応じて小单元2に入る。</p> </div>	
小单元二 豊島区のビオトープについて考えよう (15時間)	課題設定 (2時間)	<p>○学習を振り返り、活動のゴールを決める。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・このままで活動を終えるのはもったいない。もう少し調べてみたい。</li> <li>・豊島区の他のビオトープはどうなっているのだろうか。</li> <li>・まとめをする前にそもそも仰高小以外の小学校のビオトープについて知った上で、他の学年に伝えたい。</li> </ul> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>1学期の学習を振り返り、これからの活動のゴールを考え、話し合おう。</p> </div>	
	情報の収集 (3時間)	<p>○豊島区のビオトープについて段階的に調べる。</p> <div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-right: 5px;">小学校</div> <div style="margin-right: 20px;">駒込小、清和小、池袋本町小、池袋第三小、南池袋小、西巣鴨小、池袋第一、長崎小、富士見台小 【千早小・目白小(画像のみ)】</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">選択</div> </div> <hr style="border: 0.5px dashed black;"/> <div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-right: 5px;">中学校</div> <div style="margin-right: 20px;">千登世橋中</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">選択</div> </div> <hr style="border: 0.5px dashed black;"/> <div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-right: 5px;">公園</div> <div style="margin-right: 20px;">池袋の森、南長崎はらっぱ公園</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">選択</div> </div> <hr style="border: 0.5px dashed black;"/> <div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-right: 5px;">豊島の森</div> <div style="margin-right: 20px;">区役所のとしまの森</div> </div> <p>○立教大学理学部 scola との連携を行う。 →専門家を招いてビオトープについての理解をさらに深める。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>豊島区のビオトープについて疑問に思ったことを調べよう。</p> </div>	<p>☆豊島区動植物生態調査報告書を活用する。</p> <p>☆豊島区の行政の境界線の入った白地図を用いて、情報をそれぞれ調べさせる。</p> <p>☆段階的に緑を意識できるように豊島区案内地図を出す。</p> <p>☆小单元IIでは、共通課題を様々な方法で情報収集させる。</p>

整理・分析(4時間) 【本時】	整理・分析が苦手なため、情報の収集と整理・分析を往還する。	☆思考ツールを使用して集めた情報を整理する。
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○集めた情報を基にし、分かったことを話し合い、考えたことを整理する。</li> <li>○豊島区の小学校の分析を行う。</li> <li>○区内の中学校や公園についての分析を行う。</li> <li>○豊島区についての生態系について分析を行う。 ・思考ツールを使用すれば、自分たちができそうな活動がみえてくるのではないか。</li> <li>○アメリカザリガニを通して外来種の危険性について整理する。</li> </ul> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 5px;">調べた情報を整理し、豊島区のビオトープの特徴を知ろう。</div>	
まとめ・表現・振り返り(6時間)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○仰高小のビオトープや豊島区の生き物についての特徴を外部へと発信しよう。 ・他の小学校へ発信しよう。(新聞やポスターの発行) <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">オフライン</span></li> <li>○全員で、他の学校に仰高小のビオトープをプレゼンしよう! google ミートの活用→<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">オンライン</span> ※状況に応じて小単元1で行えなかった、1～4年生の発表も行う。</li> <li>○他の学校の発表を聞く。</li> <li>○オンラインやスライドを伝えた感想を振り返る。</li> </ul> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 5px;">学習したことをまとめ、外部へ発信しよう!</div>	☆豊島区は、数年前消滅可能都市であったことについても触れる。 ☆単元を通して何を学ぶことができたのかを最後の時間に自分の言葉でまとめさせる。

※小単元Ⅲ「仰高小のビオトープを広めよう」(15時間)は誌面の都合上、省略

#### (4) 単元実施後の成果

これまでビオトープにあまり関心を示していなかった児童が、自ら選択したテーマで探究活動を行った結果、身近なビオトープに生息する生き物が多様であることがわかり、自分の学校や豊島区の自然やビオトープに興味・関心をもつようになった。また、自分事として捉え、豊かな環境を守りたいという児童が増えた。

さらに、情報発信の場(オンライン・オフライン)を通して、自分たちが行った調査研究・探究を客観的に振り返る機会となり、より理解が深まり環境保全意識が高まった児童が多くなった。

### 3 新宿区立西戸山小学校 第2学年・生活科 「生きものなかよし大作せん」

西戸山小学校の周辺は、公園や緑地が多く、比較的的自然環境が豊かである。しかし、子供たちは、生き物と関わるのが少なく、身近な昆虫などを知らない児童が多い。また、同小学校には、整備された人工池があるが、生活科での活用が十分ではなく、単元開発の余地が大きいと考えた。小学校低学年の時期に、自然に触れるという原体験を大切にすることで、環境への関心を高め、身近な生き物を大切にしようという意識を高めたいと考えた。本単元では、生き物の育つ場所に注目し、建設会社の協力を得て木材を活用し、子供たちが生き物の育つために最適な場所を自由に考えることで、自然環境が自分にも身近なものであると捉えられるようにした。

(1) 単元の見積

- ア 生き物やなかよし花壇に関心を持ち、親しんだり大切にしたりすることができる。
- イ 生き物が住んでいる環境の様子や生き物の変化の様子など、考えたことを表現することができる。

(2) 単元の指導計画 (全5時間)

時	目標	学習内容・学習活動
第1時	身近な生き物に関心をもって関わる ことができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・なかよし花壇にいる生き物を予想する。</li> <li>・なかよし花壇でフィールドワークを行い、どのような生き物がいるのか観察する。</li> </ul>
第2時	身近な生き物に関心をもって関わる ことができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・なかよし花壇で見つけた生き物をクラスで共有する。</li> <li>・子どもから出てこなかった、生き物を教師が提示する。 また、なかよし花壇以外で見られる生き物に触れる。</li> </ul>
第3時	これまでの経験や聞いたり調べたり したことを基に、生き物のいる場所を 予想し、生き物の育つ場所の特徴に気 付くことができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今まで見てきた生き物を振り返りながら、それぞれに 適した環境があることを確認する。</li> <li>・なかよし花壇や教師の提示で見た生き物たちがよりよ く生活するためには何が大切なのか考える。(大建工 業の木の学習に繋げる)</li> <li>・生き物たちにとって理想の場所を考える。</li> </ul>
第4時	生き物にとって快適な環境について 考えることができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然を保つための伐採について知り、簡単なクイズを 通して大まかな仕組みを知る。(木の循環)</li> <li>・テーマとする生き物を決める。(今まで見つけた生き 物で一番好きなものは何ですか？なぜそれが好きで すか?)</li> <li>・生き物たちにとって理想の家を構想する。</li> </ul>
第5時	生き物に親しみを持ち、どのような場 所が棲みやすいのか考え、また、その ような環境を保つために、自分たちに 何ができるかを考えることができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大建工業の素材を使い、生き物たちにとっての理想の 家を製作する。</li> <li>・製作した家を共有する。</li> <li>・生き物が生活する上で自然が不可欠なことを伝える。</li> <li>・授業の振り返り</li> </ul>

(3) 本時について(全4時間中の第4時、第5時)

ア 本時の目標

生き物が住んでいる環境の様子や生き物の変化の様子など、考えたことを表現することができる。

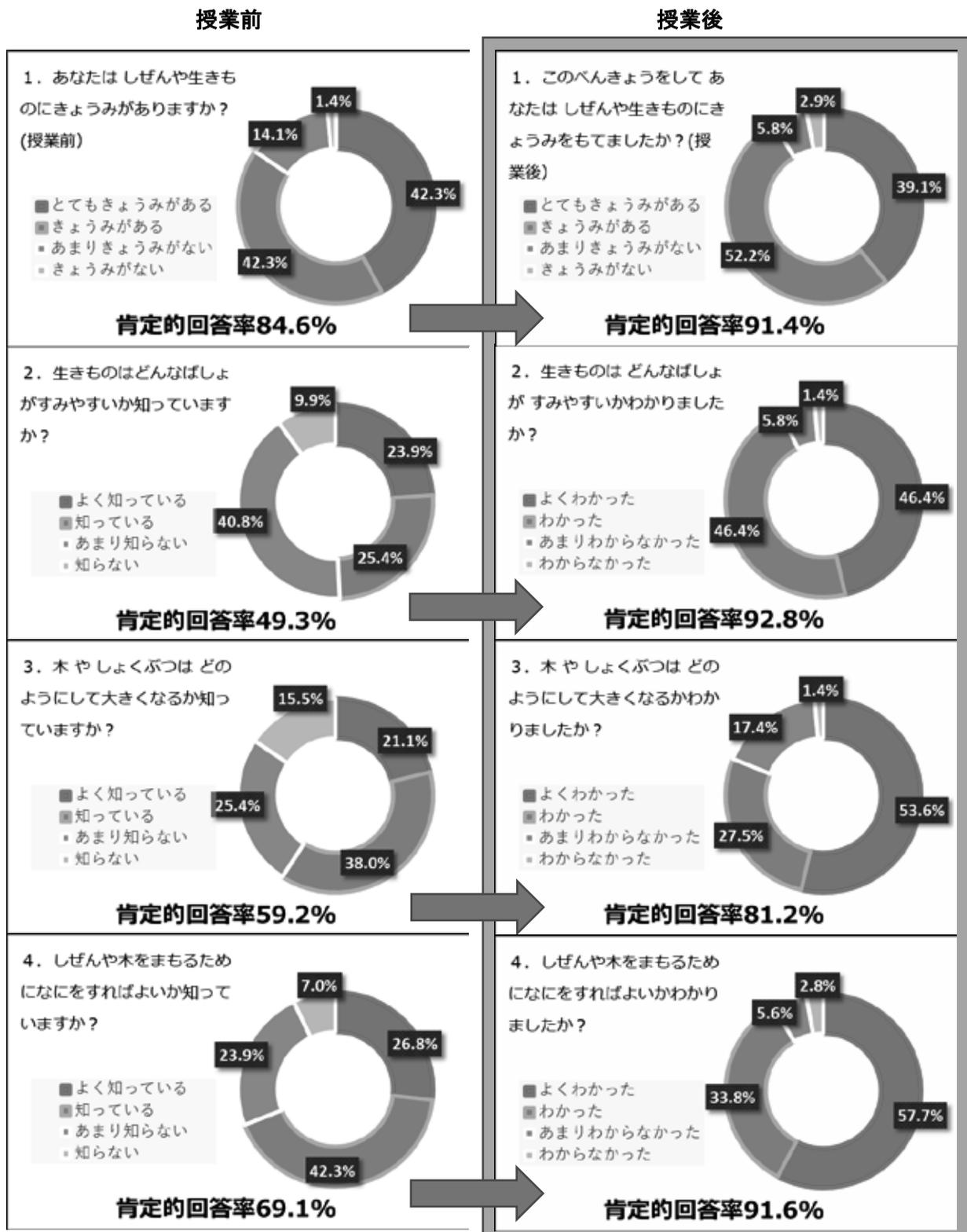
イ 本時の展開

時間	○学習内容 ・学習活動	・指導上の留意点 ◆評価方法
導入 5分	<p>1 生き物の振り返りと自然の重要性について考える。</p> <p>・これまでに見つけた生き物を振り返る活動を行う。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>生きものたちがあんしんして てくらせるお家を作ろう</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生き物や自然に対する個々の子供たちの感情や経験を共有する時間を設け、愛着や関心をさらに深められるようにする。</li> </ul> 

<p>展開 ① 20 分</p>	<p><b>※大建工業の方が、メインで レクチャーをする</b></p> <p>2 木の循環と自然保護に関する学 ぶ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・簡単なクイズを使って、木の成長 や伐採、再植林のサイクルについ て子供たちに理解を促す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子供たちが考え、答えを共有する形で進める。</li> <li>・展開③の提供素材が環境にどのような影響を与えるかにつ いても簡単に説明し、自然資源の循環の大切が伝わるよう にする。</li> </ul> 
<p>展開 ② 20 分</p>	<p>3 理想の生き物の家を考える</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子供たちが好きな生き物を選び、 その生き物がどんな家に住みた いかを想像し、デザインする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・テーマとなる生き 物を決めた後に、 テーマの虫が過ご しやすいためであらう 理想の家を考えら れるようにする。</li> <li>◆生き物にとって快 適な環境について 考えている。(設計 図の記述)</li> </ul> 
<p>展 開 ③ 30 分</p>	<p>4 理想の生き物の家を製作する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・考えたデザインに基づいて実際 に家を製作する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子供たちがそれぞ れのアイデアを 実現できるように 必要に応じて 助言をする。</li> </ul> 
<p>展 開 ④ 10 分</p>	<p>5 製作した家を共有する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・工夫した点をグループ→全体の 流れで共有をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どのようにして生き物が快適に住める家を作ったのか、制作 内容の理由などを整理させた後に活動を始める。</li> <li>・感想や質問を述べる機会を設け、他の視点からの学びが得ら れるようにする。</li> <li>◆生き物に親しみをもち、どのような場所が棲みやすいのか 考え、また、そのような環境を保つために、自分たちに何が できるかを考えている。(行動、発言)</li> </ul>
<p>ま と め 5 分</p>	<p>6 授業の振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業で学んだことや感想を共有 する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後の学びに繋がるように、教師が本時の内容を総括しなが ら振り返りを行う。</li> </ul>

#### (4) 児童の変容

授業後のアンケート結果から、児童たちが自然や生き物への理解や関心を深めていることが分かった。生き物が住みやすい場所や木の成長・保護についての変化が大きく、授業後の「よくわかった」「わかった」と答えた児童が8～9割を超える結果となっている。その背景には、身近な校内環境を利用した、実際に見て触れる活動が児童の興味を引き出し、学びを深められ



からだと考える。また体験後に行った、生き物の家の制作や木の循環に関する授業を通じて、児童が「自然や木を守るために自分たちができること」を具体的に考え、行動する意識が高まったと感じている。実際に単元終了後も校内で生き物の採集、観察を楽しむ児童が増え、係活動も活発になった。

課題を含め、今後この学びの広げていくには、木や植物だけでなく、他の自然環境や資源(例:

水やエネルギー) についても学ぶ機会を作ること、持続可能な社会への理解がさらに深まると考える。そして、「あまりわからなかった」「わからなかった」と答えた児童への支援を行い、全員が理解を深め、自然環境に親しみがもてるようにしたい。

今回の授業から、低学年においても環境を意識したカリキュラムの工夫を行うことで持続可能な環境づくりに向けた基礎的な考え方を形成に繋がったと考える。そこには、発達段階と実態に応じた体験型学習や具体的な問いかけ、持続可能な社会に向けた取り組みの工夫を伝えたことにより、児童の興味関心を高めたことが、知識や行動意識を向上させた要因であると考えられる。

#### 4 港区立高陵中学校 第3学年 理科「人間と環境」／総合的な学習の時間「人間と環境」

高陵中学校は、麻布・広尾地区に位置し、高層タワー等が多く存在する一方、古くからある住宅街も残っている地域である。しかし、周辺には水辺のあるような大きな公園等は少なく、生徒の多くは、生物に触れる機会があまりなかった。

港区は学校ビオトープづくり支援をはじめ、区的环境課から専門家を派遣し、ビオトープの整備方法や適切な管理方法、環境教育への活用方法への助言等によりビオトープづくりの支援を始めた。また、令和5年度から区内全小中学校にビオトープを整備したものの、授業への活用にはまだ課題がある現状である。



港区学校版環境マネジメントシステム(みなエコ)HP資料

##### (1) 単元の目標

身近な自然環境や地域の自然災害を調べる活動を行い、人間の活動などのさまざまな要因が自然環境に影響をあたえていることについて理解させ、自然環境を保全することの重要性を認識させるとともに、大地の特徴を理解し、自然を多面的、総合的に捉え、自然と人間の関わり方について、科学的に考察して判断する能力や態度を身に付けさせる。

##### (2) 単元の指導計画

	目標	学習内容・学習活動
第1時 理科	○人間の生活が身近な自然環境にどのような影響を与えているか適切に調査し、その結果を記録することができる。	○川に棲む生物について調べることで、水の汚れの程度を判断できることを知る。 ○マツの気孔の汚れ具合を観察することで、大気汚染を把握できることを知り、実際に観察してみる。
第2時 理科	○学校における身近な自然環境について考え、その役割について理解する。	○ビオトープとは何かを学ぶ。 ○令和5年度から港区の全小・中学校でビオトープの取組を行っていることを知る。 ○ビオトープはどのような役割があるのか、考える。 ○土地利用の違いによって、水質が異なる場合がある。

第3時 理科	○ビオトープの水に棲む生物を実際に観察し、水質調査の方法を理解する。	○実際に、高陵中学校にあるビオトープを見学し、水を採集して観察してみる。 ○識別珪藻群法に用いるケイソウの観察を行う。 ○シミュレーションソフト「SimRiver」を活用して、水質調査を擬似体験する。
第4時 (本時) 総合	○学校等におけるビオトープの取組がより広まるためには何が必要か考える。	・なぜ、港区をはじめ多くの学校でビオトープの取組を推進しているのか考える。 ・今後、高陵中のビオトープを遺していくにはどうすれば良いか考え、探究する。 ・豊島区立仰高小学校などの先進的な取組事例を紹介し、自分たちができていることを深める。

### (3) 本時 (全4時間中の第4時)

#### ア 本時の目標

学校等におけるビオトープの取組がより広まるためには何が必要か考える。

#### イ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点
5分	○ビオトープはどのようなものでしたか。	・理科で学んだ「ビオトープ」について復習する。「生物の生育・生息空間」のこと。
15分	<p style="text-align: center;"><b>&lt;問&gt;なぜ、港区をはじめ多くの学校でビオトープの取組を推進しているのか。</b></p> ・港区の小中学校のビオトープマップを改めて確認し、取組にはどのような効果があるのか考える。	・生物多様性の減少、環境意識の推進 ・生き物の大切さを身近に知ることができる
15分	<p style="text-align: center;"><b>&lt;課題&gt;今後、高陵中のビオトープを遺していくにはどうすれば良いか。</b></p>	・自分たちだけが理解し、活動するだけでは、長く続かないことに気付かせる。
10分	<p style="text-align: center;"><b>他の学校等での取組を参考に、自分たちができていることを深めよう。</b></p>	・先進的な取組事例を紹介し、自分たちができていることを深める。
5分	○振り返り	・授業を終えて疑問に思ったことやさらに学びたいと思ったことを書く。

### (4) 成果と課題

識別珪藻群法による水質判定にあたり、水を採集してケイソウを顕微鏡で観察することはできるが、汚濁階級指数に関係するケイソウの種類が同定が難しかった。そのため、今回の授業実践では、ケイソウを観察するにとどめ、東京学芸大学の真山研究室を中心とした研究グループである「ケイソウプロジェクト」ホームページにある「SimRiver」を授業で活用した。「SimRiver」(シムリバー)は、パソコンで河川環境を創造しながら、ケイソウを用いた水質判定を行い、人間活動と河川の水質(環境)を楽しみながら理解し、学ぶシミュレーションソフトウェアである。これを用いると、難しい同定作業もクイズ形式で行うことができ、河川などの水質調査をシミュレーションによって擬似体験することができた。

<採集した水に棲む生物の観察>

- ① ビオトープにレンガを入れ、一定期間放置しておく。

- ② 観察する日にレンガを取り出し、そのレンガをタワシ等でこする。
- ③ 溜まった水をスポイトで吸い取り、ホールスライドガラスに乗せる。
- ④ 光学顕微鏡（400倍）で観察し、写真に撮る。



## V 4つの授業実践例を通して（成果と課題）

今年度は、東京都の区部、市部の小学校低学年・高学年、中学校の地区や校種の全く異なる環境で、児童・生徒にとって身近である学校ビオトープという一つのテーマで単元及び授業づくりを行った。今の東京の子供たちは、日常生活で生き物に触れる機会が少なくなっている。また、校内の安全性の確保等の要因により、ビオトープで遊ぶ経験も減っている。さらに、都内には学校ビオトープそのものがない学校も多く存在する。そのため、身近であるはずの学校ビオトープですら彼らには、遠い存在となっていることが改めて分かった。

今年度の研究では、どの校種、学年においても学校ビオトープの活用により、多くの児童・生徒がより生き物や自然を身近に感じ、その環境を守りたいという意識の変容が見られた。このことは、ビオトープを活用した授業実践は、環境保全意識を高める上で、大変効果的であることを意味している。

一方で、ビオトープの維持・管理、安全性の確保についての課題も多く、教員だけの力では、それらの課題を解決することは難しい。子供たちが率先して学校ビオトープに関わり、子供たち自ら維持・管理していく仕組みを学校ごとに構築していく必要がある。

ビオトープの充実・活用により、子供たちの環境保全意識の変容は見られたが、2030年のSDGs達成には、時間があまりにも短すぎると感じている。多くの環境課題に対し、様々なテーマで、子供たち自身が探究し解決策を見出していく取組をさらに充実させていかななくてはならない。これらの答えの見えない問いに対して、各学校で、児童・生徒と教員だけでなく、地域、保護者、関係機関、企業等の連携を強固なものにし、ESDを推進していく以外に道はない。ESDの推進にむけ、本研究を参考にいただければ幸いである。

最後に、今年度授業実践に御協力いただいた、各学校の校長、子供たちに御礼申し上げます。

令和6年度 東京都小中学校環境教育研究会研究員（授業実践等実施校）

新宿区立新宿西戸山小学校	教諭	長谷川 聡也
豊島区立仰高小学校	教諭	小鹿 成軌
港区立高陵中学校	教諭	清水 祥彦
町田市立小中一貫ゆくのき学園大戸小学校	主任教諭	梶原 勝
多摩市立連光寺小学校	教諭	吉田ありさ



# □ 誌上発表 □ P 4 6 ~ 9 3

- 1 地域と協働で取り組む環境教育の推進  
～4年生「カーミージー探検隊」海の観察等を通して～  
沖縄県浦添市立港川小学校 校長 金城 勝己  
学年主任 喜屋武 仁……46
  
- 2 日本らしい自然の再生  
～子供たちと自然をつなぐ体験活動プロジェクト～  
東京都江戸川区立小松川小学校 校長 坂野眞太郎  
教諭 泉田 陽菜……54
  
- 3 持続可能な社会を実現するための行動を考え、進んで社会に参画しようとする児童の育成  
～高見の山・川・海を題材とした「総合的な学習の時間」の探究学習をとおして～  
広島県尾道市立高見小学校 校長 金子 恵子……64
  
- 4 地域の宝を誇りとし 大切にする児童生徒の育成を目指して  
～ユネスコスクールとして小中一貫で取り組む自然体験活動～  
山梨県南アルプス市立芦安小中学校 校長 根津 盛吾……76
  
- 5 持続可能な社会の担い手を育むための教育の推進  
～ふるさとの海に親しみ、ふるさと愛を高める活動を通して～  
福井県小浜市立内外海小学校 校長 一瀬 泰史……84

## 地域と協働で取り組む環境教育の推進

～4年生「カーミーギー探検隊」海の観察等を通して～

沖縄県浦添市立港川小学校  
校長 金城 勝己  
学年主任 喜屋武 仁

### I はじめに

本校は昭和55年に開校し、現在、特別支援学級を含め41学級、児童約940人、職員73人が在籍する大規模校である。沖縄県浦添市のほぼ中央部に位置し、西海岸開発の進捗とともに、高層マンションが続々と建設されており、校区の人口は増加傾向にある。学校周辺の環境としては、幹線道路から近く、自動車メーカーのショールームや大型量販店、外国人住宅と呼ばれる本土復帰前の面影が残る商業エリア等がある一方、豊かな生態系をもつ海「カーミーギー」が広がるなど多様な顔をもつ地域である。

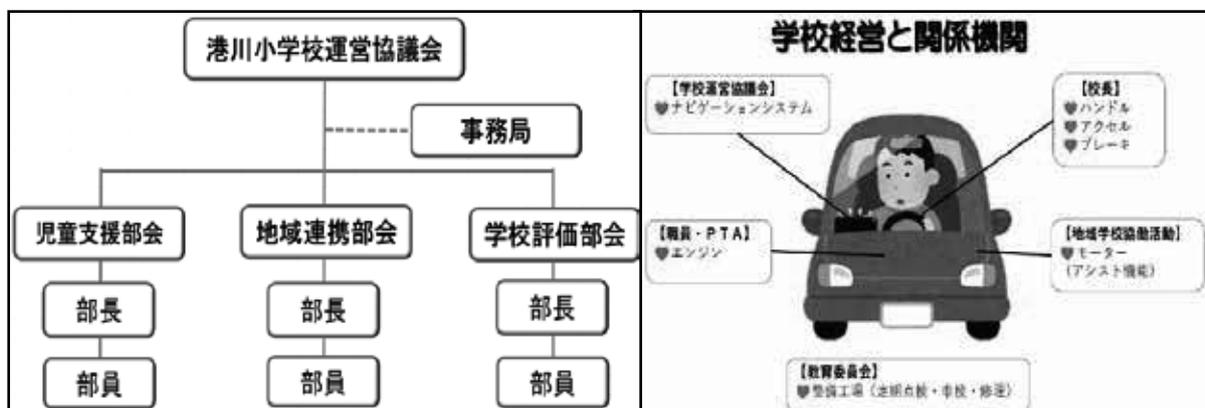
道路・港湾整備により、都市化が進む本校地域ではあるが、「令和5年度環境教育・ESD実践動画100選」に選定された。選定理由としては、18年にわたり地域の方々と協働で教育活動を行ったことや令和4年度にコミュニティ・スクールの指定を受けたことを契機に、地域企業を資源と捉え、子供の資質・能力向上に連携して取り組んだことが評価されたと考える。

本稿では、環境教育を推進するにあたり学習環境を整え、学習の質の確保に努めながら持続的なカリキュラムとなっている要因を紹介する。続いて実践事例として、地域・自治会と協働で取り組んでいる海の観察活動「カーミーギー探検隊」と、観察から生じた課題を解決する学習活動「ゴミ減量プロジェクト in 港川」について紹介する。

### II 持続可能なカリキュラムづくり

#### 1 コミュニティ・スクール

本校の学校運営協議会は12名で構成されている。特徴としては、企業の役員、管理職を委員に委嘱し、企業が教育課程に参画しやすい風土の醸成を図っている。昨年、委員とは別の企業（リサイクル企業）から環境教育に協力したいとの申し出があり、「ゴミ減量プロジェクト in 港川」の充実につながっている。以下に本校のコミュニティ・スクール組織図と私見として学校経営と学校運営協議会等の関係を示す。



## 2 地域コーディネーター（地域学校協働活動推進員）

本校は、コミュニティ・スクールとなるずっと以前から、地域学校協働活動が充実しており、当時から港川自治会と二人三脚で「カーミージー探検隊」海の観察会を実施していた。ここでキーパーソンとなるのが浦添市立全小中学校に配置されている地域コーディネーター（地域学校協働活動推進員）の存在である。本校が充実した取組を持続することができたのは、本校の地域コーディネーターの力量はもとより、地域コーディネーターがPTA事務員と兼務したことも大きい。ほぼ毎日出勤しているため職員の要望や相談に即応できる体制が整っており、講師等との打ち合わせ調整も行っている。さらに学習のねらいや流れなど具体的な内容を熟知しているため、毎年25人程度の職員の異動や、コロナ禍を経ても本校の環境教育が持続できた理由である。

## 3 互恵関係（Win・Win）

「カーミージー探検隊」の活動を持続可能なカリキュラムにしている最も大きな要因は、港川自治会の支援である。そのおかげで、4月に着任した新職員が担任となっても、前年度経験者の担任と同じように、児童を指導することができる。ある時、自治会長に、なぜここまで学校を応援してくれるのか聞いたことがある。「我々にもメリットがあるからです」という自治会長の言葉は、今も個人・団体と協働で取り組む際のチェックポイントである。このことは、リサイクル企業の社長と面会したときにも感じた感覚である。「会社の安全教育の充実、社員の自己肯定感が向上するんです」とメリットを強調していた。本校が外部団体と協働で行う際は「協力依頼」とは言わず、互恵関係を大切にするため「相談」という表現を使っている。環境教育を持続させるには、学校と支援団体の両者がWin・Winであることが重要だと考える。

## III 実践事例

### 1 教育課程での位置付け

本実践における環境教育は、主に4学年での総合的な学習の時間において位置付けている。4月から7月には、地域の自然環境について調べる「カーミージー探検隊」を20時間程度実施し、環境問題について関心をもたせることをねらいとしている。9月以降は、漂着した海ごみについて調べ地球規模で環境がつながっていることや海の環境保全のために自分たちができることについて考える「ごみ減量プロジェクト in 港川」という学習を30時間程度行い、まとめたことを発表し、行動につなげる学習を展開している。

「カーミージー」とは、「亀」を表す方言「カーミー」と「瀬」を表す「ジー」が組み合わさった本校の校区に広がる遠浅の自然海岸の名前である。浅瀬に突き出た岩が亀に見えることからその名がついている。沖縄の海岸線は産業の発展とともにその多くが開発されていったが、カーミージーは全長3kmの長さで昔からの貴重な海の自然を保ち続けている。



浦添八景の一つ、カーミージー



亀の形に似た岩場

「カーミージー探検隊」指導計画

1 単元名 **カーミージー探検隊** (23 時間)

2 単元の目標

- (1) カーミージーの生き物や環境を通して、地域の身近なところに豊かな海や生き物が住んでいることに気づき、カーミージーを豊かにしている海くさ藻場や生き物たちを調べ、効果的に伝えることができる。
- (2) 地域の方々や専門家の方から話を聞くことを通して、カーミージーの自然や地域を取り巻く環境が移り変わっていることに気づき、これから先の未来のために自分たちに何ができるかを考えることができる。

3 単元の評価基準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
○解決への見通しをもって事象を比較したり、関連付けたりして考える。 ○地域の自然の素晴らしさやそれを守る人々の工夫を考える。	○地域の事象から課題を発見し、設定する。 ○課題の解決について見通しをもつ。 ○相手を意識してわかりやすくまとめる。表現する。	○設定した課題の解決に向けて行動する。 ○地域の自然環境の現状を理解し、その保全のために自分にできることを考える。 ○他者の考えの違いやよさを受け入れ、自分の考えと比較する。

4 単元と評価計画

月	時	学習活動	評価の観点	評価基準	評価方法	他との関わり
4月	課題の設定	<b>1 地域の自然環境について考える</b> ①オリエンテーション これからの学習について概要を知る。 ②地域の方の話を聞く。 「昔のカーミージーについて」 ③海の専門家の話を聞く。 「海の生き物について」 ④観察会のオリエンテーション 観察のポイントを知る。 ⑤観察会 直接見たり触れたりして、生き物に触れる。	学びに向かう力  知識及び技能	○これからの学習に見通しをもつ。  ○昔の地域の様子や海の生き物について特徴を見付け類別し、関連付けて考える。	・ワークシート ・発表内容  ・発言・態度 ・行動	地域の方 海の専門家  地域自治会
5月 6月	情報の収集 9時間	<b>2 課題をもち、調べよう</b> ①課題をもち、調べたいことを考える。 講話や実際に体験したことなどから、事実や関連を考え、ウェビングや脳内ワークスなどを使ってグループで課題をもつ。 ②調べ学習の計画を立てる。 ③課題について調べる 図書館資料やインターネットを使って、生き物について調べる。 専門家に聞いて詳しく調べる	思考力・判断力・表現力  学びに向かう力	○地域の自然環境から体験したことをもとに、課題解決をするための方策を考え、調べる。  ○課題を解決するためにどのように調べるかを決める。	・ワークシート ・発表内容	国語 「新聞を作ろう」
6月	整理・分析 5時間	<b>3 調べたことをまとめよう</b> ①新聞教室 新聞記者から記事のまとめ方や新聞のレイアウトについて学ぶ。 ②新聞を作る 調べて分かったことを新聞にまとめる。 ③調べたことをまとめて、発表の準備をする。 ポスターセッションの仕方を学び、相手に伝えるためにはどのような方法がよいか、グループで考え、発表の準備をする。	知識及び技能  思考力・判断力・表現力	○相手や目的に応じた、記事の書き方や絵の配置、レイアウトなどを考え、新聞を作成する。  ○友達の考えの良さなどを受け入れ、自分と比較し協力する。	・ワークシート ・発言・態度  ・新聞原稿 ・新聞 ・態度	国語 「新聞を作ろう」
6月 7月	まとめ・表現 3時間	<b>4 調べたことを発表しよう</b> ①発表をしよう ポスターセッションで発表する ②発表を聞く ほかのグループや学級の発表を聞いて気付いたことや分かったこと、新しい疑問などを共有し、さらに探求活動へつなげる。 ③これからカーミージーの自然を守っていくために、自分に何ができるかを考え、話し合う。	思考力・判断力・表現力  知識及び技能 学びに向かう力	○地域の課題解決のために自分にできることは何かを考える。 ○身の回りの環境との関わりを考え、生活する。 ○多様な表現方法で相手に伝える。	・発表・態度  ・ワークシート	道徳 自然愛護「石っこけんさん」

## 2 カーミージー探検隊

### (1) 事前学習

4月にオリエンテーションを行い、これからの学習についての見通しをもたせる。その後、地域の自治会の方を招聘して、昔のカーミージーの様子について話をしてもらった。その中で、昔から地域の人々に親しまれてきた海であることや、近年は海洋生物の数や種類も激減していることなどを知った。また、カーミージーの海に対する地域の人々の思いを感じることもできた。

次に、環境教育やカーミージーの保全活動取り組んでいる「しかたに自然案内」の鹿谷麻夕氏と鹿谷法一氏にお話を聞き、カーミージーの海洋生物やカーミージーを取り巻く環境に関することについて学習した。また、生物の観察の仕方や浅瀬を移動する際の注意点などについての講話を通して、カーミージーでの観察学習の方法についても確認をした。

児童は興味のある海洋生物に関する調べ学習を行い、書籍やインターネットを利用したり、鹿谷氏らに直接質問をしたりして詳しく調べ、観察日を迎えるまでに学習意欲を高めていった。



地域自治会の役員による講話



昔のカーミージーの様子を紹介する資料



専門家による観察に関する講話



海の生き物についての事前学習

### (2) 観察会

観察会は初夏の大潮の時期に設定し、遠浅の海が広がる観察のしやすい時間帯に行った。熱中症対策として地域の自治会がテントを張り出したり冷水等を用意したりして支援を行った。時間は各クラス1時間程度だが、専門家の先導の下、多くの生物を発見し、ふれあうことができた。陸の上から眺めるだけでは気付かなかった海洋生物の姿について、実際に足を踏み入れてみることで次から次へと見えてきて、児童は感動したり興奮したりしながら、観

察を続けていた。児童からは、「かわいい魚がいっぱいた」「いろんな生き物をいっぱい  
見ることができてうれしい」といった感想や「いつまでもこの海を残したい」といった願  
いの声を聞くことができた。



海に入って生きものを探す



ナマコを持ち上げて観察



大きなシャコにふれる



小さな魚は水槽にすくって観察

### (3) 事後学習

観察会の後、新たに浮かんだ疑問や興味をもったことについて調べ直す学習会を行った。  
カーミージーの海で出会い興味をもった生き物の詳しい生態や海の変遷などについて、調べ  
たことを新聞にしてまとめ、共有していった。



カーミージーで見付けた生きものたち



新たな疑問を専門家に尋ねる



観察した生きものについて更に調べる



学習したことを新聞にまとめる



知識と体験を結び付けてまとめる

### 3 ごみ減量プロジェクト in 港川

#### (1) 海ごみの学習

カーミーの海に漂着する海ごみにはどんなものがあるのか、そして私たちはどうすればよいのかということについて、専門家の講話を聞きながら考えていった。児童はさまざまなごみが流れ着くことや国を超えて考えていくべき課題であるということに気付くことができた。



観察後の気づきを整理する



海ごみについての学習会



実際に流れ着いた海ごみ



海ごみの種類について確認する

## (2) クリーンピクニック

ごみを減らすための具体的な行動として、カーミージーを含む校区内のごみ拾いを兼ねたピクニックを行った。持参するおやつは包装されていないものに限定し、ごみを減らすという意識をもたせるようにした。路上や植え込みの中に、予想以上に多くのごみを発見することができた。カーミージーの海岸では外国製品のごみを採取し、海ごみの問題を身近に感じることができた。集めたごみは学校に持ち帰って分別をし、ごみの傾向や大きさについて確認をした。



校区をクラスごとに分担してのごみ拾い



分別を通して多くの気づきが得られた

## (3) 学習のまとめと発表会

これまでに学習してわかったことや感じたことを詩やポスター、動画などにまとめた。そして3年生を対象にして発表会を行った。



ポスター



詩・スローガン



掲示用の詩

#### 4 成果と課題

##### (1) 成果

- ・講話や観察を通して、地域の身近なところに豊かな海があり、多くの生き物が住んでいることや生き物同士が関わりあって海の自然が成り立っていることに気付くことができた。
- ・地域の方々や専門家の方々から話を聞いて、その思いを知ることで環境問題に対して自分に何ができるのかということを考えさせることができた。
- ・海ごみや校区内のごみについて調べる活動を通して、ごみ問題が地球規模の環境問題であることに気付き、そのためにできる具体的な行動を考えることができた。

##### (2) 課題

- ・ごみを拾う活動だけでなく、ごみを減らす生活について自分事として目を向けさせ、社会科や家庭科、道徳など教科横断的にカリキュラムを編成することにより、環境問題に対する児童の意識は更に変容すると考えられる。
- ・タブレット端末を有効活用して、学習したことを蓄積したり共有したりすることによる、効果的な学習活動の可能性はある。

#### IV おわりに

カーミージ探検隊は、コミュニティ・スクールの活動として、地域の方々や専門家の方々に支えられて19年の長きに渡って続いてきた。今後も児童が地域の美しい海に誇りをもち、この恵まれた素晴らしい環境を大切にしたいという心を育てていきたい。

## 日本らしい自然の再生

～子供たちと自然をつなぐ体験活動プロジェクト～

東京都江戸川区立小松川小学校

校長 坂野 眞太郎

教諭 泉田 陽菜

### I はじめに

本校は、東京都江戸川区北部に位置している。大正3年に開校し、今年度で開校110周年を迎える。現在は全校児童342名、12学級の中規模校である。本校は、東に荒川や中川、江戸川、西に旧中川が流れており、川に囲まれている。

江戸川区は、令和4年度に2100年に向けた区の目指す姿を描いた「2100年の江戸川区（共生社会ビジョン）」を、令和5年度にその理念を実現するために必要となる取組の方向性を「アクションプラン」としてとりまとめた。令和6年度は、アクションプランにまとめた方向性に沿って、具体的な取組をすすめている。共生社会ビジョンには、区が目指す「ともに生きるまち」の姿を「人・社会・経済・環境・未来」の5つの視点から描かれている。アクションプランには、区内の自然環境を守り、生物多様性を確保していくことが明記されている。

本校は、荒川下流域に隣接しており、スーパー堤防には外来植物が多く生息している。その一方で、日本にもともと生息していた在来植物が少なくなっている。そこで、本校では令和2年度から在来植物の移植活動を行い、日本らしい自然の緑の再生に取り組んでいる。

本稿では、本校の環境教育の概要について、総合的な学習の時間の実践から紹介する。続いて河川環境教育に重点を置いて実践している3・4年生の事例を紹介し、その成果と今後の課題について述べることとする。

### II 研究の方法

- 1 元東京大学大学院農学生命科学研究科の根本正之先生から分けていただいた、在来植物のカントウタンポポと外来植物のセイヨウタンポポを比較
- 2 在来植物のカワラナデシコとキキョウの苗を育て、観察
- 3 根本先生による「日本らしい自然の緑の再生」の講義を受講
- 4 「子供たちと自然をつなぐ体験活動プロジェクト」として、埼玉県生態系保護協会、公益財団法人サイサン環境保全基金の支援を受け、荒川太郎右衛門自然再生地に行き、カワラナデシコを移植
- 5 日本生態系協会の堂本泰章先生による出前授業を受ける
- 6 本校で育てたカワラナデシコの苗と種を、つばさ南小学校、つばさ北小学校、しののめキッズパーク保育園に渡し、4校でオンラインによる植栽活動の報告会を行う

これらを継続して行っている。

### III 研究経過

- 1 昨年度までの研究の検証
- 2 活動の継続、推進、普及

#### IV 単元事例

##### 1 対象学年・教科等

第4・5学年、総合的な学習の時間

##### 2 単元名「日本らしい自然の再生」

##### 3 単元開発の背景

小学校に隣接する荒川下流域のスーパー堤防には外来植物が多く、日本にもともとあった在来植物が少ない。荒川下流域の小学生が、荒川上流域から取得した絶滅の恐れのある種子や株を育てる。荒川中流域の荒川太郎右衛門自然再生地へ、外来植物を取り除いた後のギャップに在来植物を移植する方法（汐入方式）で日本らしい自然の緑を再生し、児童に在来植物・外来植物、生物多様性などについて考えさせる機会とする。

##### 4 育てたい資質・能力

よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力

##### 5 単元のねらい

###### (1) 4年生の単元のねらい【総合的な学習の時間】

荒川の在来植物・外来植物、生物多様性などについて、調べたいことを決め、研究計画を立て、資料を集め、必要な情報を探し、記録を整理し、新聞にまとめる。友達の新聞を読み、自分の考えを深める。

###### (2) 5年生の単元のねらい【総合的な学習の時間】

荒川を自然を守るためにはどうすればよいかを考え、研究計画を立て、資料を集め、必要な情報を探し、記録を整理し、意見文を書いて発表をする。友達の意見文を聞いて、自分の考えを深める。

##### 6 単元計画

###### (1) 4年生【総合的な学習の時間】（全11時間）

回数	授業名	ねらい	時数
1	カントウタンポポとセイヨウタンポポの観察	小松川小学校正門横のビオトープには、小松川小学校でこれまで育ててきた在来植物が植えてあり、また、カントウタンポポ広場がある。児童は、在来植物のカントウタンポポと外来植物のセイヨウタンポポを比べ、同じところと違うところを観察して観察カードに書き、在来植物について興味・関心をもたせる。	2

	<p>カワラナデシコとキキョウの観察</p>	<p>夏休みに、カワラナデシコとキキョウの苗を家に持ち帰って、観察をする。夏休みの終わりに、児童用iPadのTeamsのソフトを使い、家にあるカワラナデシコとキキョウの写真を投稿し、在来植物について興味・関心をもたせる。</p> 	
<p>2</p>	<p>荒川の在来植物・外来植物、絶滅危惧種などについて、調べたいことを決め、新聞にまとめよう</p>	<p>ウェビングマップに「在来植物」、「外来植物」、「絶滅危惧種」などといった、キーワードを書き出し、その中から自分のテーマを決め、本やインターネットを使って、調べ学習をする。そして、新聞を書いて分かりやすくまとめる。友達の新聞を読み、自分の考えを深める。</p> <p>元東京大学大学院農学生命科学研究科の根本正之先生より「日本らしい自然の再生」をテーマにした授業を受け、自分の考えを深める。</p> 	<p>7</p>

3	カワラナデシコの種取りと発芽	<p>カワラナデシコは9月ごろ、花が咲き終わって茶色になったさやから、種子を取り出し、種子が取れたら、育苗箱で発芽させる。在来植物の保全活動を行い、在来植物に興味・関心をもたせる。</p> 	2
---	----------------	---	---

(2) 5年生【総合的な学習の時間】(全11時間)

回数	授業名	ねらい	時数
1	カワラナデシコの移植	<p>カワラナデシコの苗が大きくなったら、小松川小学校の全校児童に、大きくなったカワラナデシコの苗をプランターに植えかえるよう声かけをする。在来植物の保全活動について、興味・関心をもたせる。</p> 	2
2	荒川の自然を守るためにはどのようにすればよいか、意見文を書こう	<p>「子供たちと自然をつなぐ体験活動プロジェクト」として、埼玉県生態系保護協会のお力添えもあり、公益財団法人サイサン環境保全基金より支援を受けた。</p> <p>小松川小学校の児童が荒川太郎右衛門自然再生地に行き、カワラナデシコを移植し、荒川太郎右衛門にいるたくさんの生き物を観察する。そして、埼玉県生態系保護協会の堂本泰章先生による出前授業を受ける。</p> <p>荒川の自然を守るためにはどうすればよいかを考</p>	7

		<p>え、意見文を書いて発表をする。友達の見文を聞いて、自分の考えを深める。</p> 	
3	<p>オンラインによる植栽活動の報告会</p>	<p>小松川小学校から苗の提供を受けた川島町立つばさ北小学校の4年生、川島町立つばさ南小学校の3年生、しののめキッズパーク保育園も、三ツ又沼ビオトープと荒川太郎右衛門自然再生地に、カワラナデシコを移植する。学習のまとめとして、オンラインによる植栽活動の報告会を行い、この学習活動のふり返りする。</p> 	2

## 7 授業開発

### (1) 本時の指導のねらい

本時では、埼玉県川島町立つばさ北小学校の4年生、川島町立つばさ南小学校の3年生、しののめキッズパーク保育園に、本校のこれまでの学習活動についてオンラインで紹介し、本校児童の育てたカワラナデシコの苗の提供を申し出る。荒川の草花を育てることの意義を、児童に理解させることを本時の指導のねらいとしている。

### (2) 本時のめあて

荒川の自然を守るためにはどのようにすればよいかを考え、オンライン交流会を通して、自分の考えを深める。

### (3) 本時の流れ

流れ	指導内容	指導上の留意点	指導するスライド（一部）
導入	Zoom 接続開始 はじめの言葉		
展開	江戸川区立小松川小学校の紹介（児童代表） 川島町立つばさ南小学校の紹介（児童代表） 川島町立つばさ北小学校の紹介（児童代表） しののめキッズパーク保育園の紹介 （園スタッフ） 荒川の草花を育てる意義について（埼玉県生態系保護協会 堂本泰章先生） 小松川小学校がカワラナデシコの育苗について紹介し、苗の提供を申し出る（児童代表） カワラナデシコの受け渡し （贈呈校2名・受け取り校・園それぞれ2名） 学校・園より自由に質疑応答 つばさ南小学校・つばさ北小学校・しののめキッズパーク保育園よりお礼の言葉	荒川の草花を育てることの意義を、児童に理解させる。  カワラナデシコの育て方を、相手に分かるように伝える。  荒川の自然を守るための考えを深められるよう助言をする。	 小松川小学校がカワラナデシコの育苗について紹介をする動画
まとめ	終わりの言葉 オンライン交流終了		

## 8 単元の効果検証

4年生の学習感想から、「在来植物」、「外来植物」、「絶滅危惧種」などのかかえる課題を解決し、自己の生き方を考えていこうとする、児童の変容が見られた。

5年生の学習感想から、荒川の自然を守るためにはどのようにすればよいかという課題を解決し、自己の生き方を考えていこうとする、児童の変容が見られた。

## V 成果と課題

### 1 成果

『私はカワラナデシコを他の人達と一緒に移植しました。カワラナデシコは絶滅危惧種で、絶滅するカワラナデシコを植えるのは、責任感が大きかったです。カワラナデシコを守るためには、外来種を自然に持ち込まないようにポスターを作ったり、地域の人たちにその自然のことについて聞いたりすることで、次の世代につなげていくことができると思います。』（A児の学習感想）。

『最初は何も知らなかったのに、活動しているうちにどんどん興味がわきました。秋の七草のキキョウやカワラナデシコを守っていくうちに自然が大好きになりました。植物を守った時に、きれいな花が咲くと、とても楽しく嬉しかったです。キキョウやカワラナデシコは、今はほとんど見られなくなりました。私はとてもかわいくきれいな日本の在来植物が、いつかどこでも見られるようにしたいです。みんなにきれいな花を見てもらいたいです。』（B児の学習感想）。

4年生は、荒川の在来植物・外来植物、生物多様性などについて、調べたいことを決め、研究計画を立て、資料を集め、必要な情報を探し、記録を整理し、新聞にまとめる。友達の新聞を読み、自分の考えを深めることができた。

5年生は、荒川の自然を守るためにはどうすればよいかを考え、研究計画を立て、資料を集め、必要な情報を探し、記録を整理し、意見文を書いて発表をする。友達の意見文を聞いて、自分の考えを深めることができた。

### 2 課題

学校の環境学習の担当者が他校へ異動すると、学習活動を継続することが難しくなることが多かった。学習活動を継続させるためには、より地域の方々と連携していく必要がある。

## VI 終わりに

三ツ又沼ビオトープで長い間保全活動を行い、環境省から「みどりの日」に、自然環境功労者環境大臣表彰をされた、荒川の自然を守る会の菅間宏子先生から、多くのことを教わりました。菅間先生の『上尾とその周辺の植物』の本を読むと、カワラナデシコは残念ながら、上尾市の周辺では絶滅したことがわかります。カワラナデシコについて書かれてある部分を紹介します。『「林の縁やあぜ道で咲いているのをよく摘んで遊んだっけ」と、なつかしむ方が大勢いらっしゃいます』。

『「いつの頃だったか、気がついて探してみても、一本として見つけることができなくなっていた。それも50年も前のこと」と残念そうに話していました』。小松川小学校ではこの活動を引き継いで、児童が日本らしい自然を再生させています。

本校ではこの学習活動を行うにあたって、河川財団より河川基金助成事業学校部門の助成を受けています。また、公益財団法人サイサン環境保全基金の支援を受けています。

### 【参考文献】

- ・根本正之『在来植物の多様性がカギになる』岩波ジュニア新書、2023
- ・根本正之『在来野草による緑化ハンドブック』朝倉書店、2020



# 荒川でつながる 熊谷市(荒川大麻生公園)、 川島町と上尾市、 江戸川区

荒川大麻生公園  
ホームページ



# つばさ北小学校の4年生と つばさ南小学校の3年生が、 荒川太郎右衛門自然再生地(川島町)と 三ツ又沼ビオトープ(川島町)に カワラナデシコを移植



荒川太郎右衛門自然再生地  
三ツ又沼ビオトープ  
ホームページ

P.162、根本正之『在来植物の多様性がカギになる』  
岩波ジュニア新書、2023

カワラナデシコは、川原や沼の浅い水辺に生える多年草で、花は淡紫色で、葉は対生で、根元から葉を伸ばす。この植物は、水辺の生態系を豊かにし、多くの昆虫や鳥類の生息地を提供する。また、水質浄化にも役立つ。この植物を移植することで、自然再生地やビオトープの生態系を回復させることができる。



# 荒川太郎右衛門自然再生地の たくさんの生き物を観察



(公財)サイサン環境保全基金の  
プロジェクトによって、バスの  
チャーターや堂本泰章先生の  
出前授業が実現しました



子どもたちと自然をつなぐ  
体験活動プロジェクト  
YouTube



## 持続可能な社会を実現するための行動を考え、 進んで社会に参画しようとする児童の育成

～高見の山・川・海を題材とした「総合的な学習の時間」の探究学習をとおして～

広島県尾道市立高見小学校  
校長 金子 恵子

### I はじめに

本校は、「しまなみ海道」の起点である尾道の対岸にある向島（むかいしま）の南部一帯を校区としている。目の前には瀬戸内海が広がっている。ここ（干汐地区）には向島町漁業協同組合があり、付近では養殖漁業や栽培漁業も行われている。その他、広島大学瀬戸内CN国際共同研究センターブルーイノベーション部門臨海実験所、尾道市マリンユースセンターなどの諸施設も所在している。また、見上げると瀬戸内海国立公園の一部を形成する「高見山」（標高283m）があり、頂上の展望台からは芸予諸島を一望できる。

このような身近な環境を題材とし、ふるさとへの愛情と誇りをもつ子供たちを育成するため、「総合的な学習の時間」の内容を設定している。高見山に端を発し、学校のすぐ近くを流れる段入川を通して目の前の干汐海岸に流れ込む水の始終を題材とすることで、身の回りには素晴らしい自然があること、しかし生息する生き物の個体数や種類は私たちの生活の影響を受けて減少・変化していることに気付き、素晴らしいふるさとを守り残していくため、そして持続可能な社会を実現するために今自分たちにできる行動を考え、進んで社会に参画しようとする児童の育成を目指している。

本稿では、第3学年の総合的な学習の時間を中心に、環境教育にかかわる取組を紹介し、成果と課題について述べることとする。

### II 総合的な学習の時間の概要

#### 1 目標

探究的な見方・考え方を働かせ、ふるさと向島に関わる横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) ふるさと向島に関わる地域の人、もの、ことに関わる探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識および技能を身に付け、地域の特徴や良さ、人々の工夫や努力によって支えられていることなどについての概念を捉えるとともに、探究的な学習のよさを理解できるようにする。 【知識及び技能】
- (2) ふるさと向島に関わる地域の人、もの、ことに関わる中から問いを見だし、その解決に向けて仮説を立て、情報を集め、整理・分析しながら考察し、根拠を明らかにしながらまとめ・表現することができるようにする。 【思考力、判断力、表現力等】
- (3) ふるさと向島に関わる地域の人、もの、ことについての探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、持続可能な社会を実現するための行動の仕方を考え、進んで社会に参画しようとする態度を養う。

【学びに向かう力、人間性】

## 2 各学年の主な学習活動

- ・海の生物について探究することを通して豊かな高見の海を守ることに取り組む。(第3学年)
- ・高見山について探究することを通して、山の環境を守ることに取り組む。(第4学年)
- ・川の環境調査から、自分たちの生活と地域や地球の環境を守ることに取り組む。(第5学年)
- ・これまでに学んだ向島の良さから、自分の生き方を見付ける。(第6学年)

### Ⅲ 各学年の実践紹介

#### 1 第3学年「高見の海 調査隊」～春と夏の生き物～ ～秋の生き物～ ～高見の海の生き物～

##### (1) 目標

- ①高見の干潟と磯の保全に関わる人・もの・ことに関わる探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、高見の海の過去と現状の特徴やそれぞれの良さ、そして人々の工夫や努力によって高見の海の環境が守られていることについて捉えるとともに、探究的な学習の良さを理解できるようにする。
- ②高見の干潟と磯の保全に関わる人・もの・ことに関わる中で問いを見だし、その解決に向けて予想や仮説を立て、情報を集め、整理・分析しながら考察し、自分が思い描く未来の高見の干潟と磯についての提言を、根拠を明らかにしながらまとめ表現することができるようにする。
- ③高見の干潟と磯の保全に関わる人・もの・ことについての探究的な活動に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、持続可能な社会を実現するための行動の仕方を考え、進んで海の環境保全活動に参画しようとする態度を養う。

##### (2) 学習の内容

第3学年児童の多くは、これまでに学校の目の前の干汐海岸で清掃活動を行った経験や保護者とともに海で釣りをした経験をもっている。地域柄、海に親しむ機会は多く、干潟の生き物については全員、ある程度の知識をもっている。そこで、校区内立花地区に存在する「広島大学臨海実験所」の田川訓史所長（広島大学特定教授）をはじめとする先生方にご協力をいただきながら、実験所周辺の磯の生き物について種類や季節による生き物の違い等を調査した。その中で児童は、磯で見つかる生き物の種類や数を季節ごとに比較し、変化に気付いた。また、様々な要因により生態系が変わったり、魚介類をはじめとする生物の個体数が減少したりしていることを知った。また、マリレジャーに訪れる人も多いことから、ごみについて課題があることにも気付いた。

こうした現状について、磯や干潟での生態調査を通して児童が体感した。特に近年はクラゲが非常に多いことに日常的に海とふれあっている児童が気付き、ゲストティーチャーである広島大学臨海実験所の方々からも海水温が高くなっていることが原因として考えられることを聞いた。なぜ生き物が減っているのか。なぜ海水温が高くなっているのか。それらの疑問から、児童自身が「高見の海をもっと豊かにしたい」「もっときれいにしたい」という思いをもった。そして、干潟と磯のそれぞれの生態についての情報を集め、昨年度までの様子と比較・分析することを通して、そのように変化している要因について根拠を元に考察するとともに、地域に住む自分たちや観光客のそれぞれができることについて考えをまとめ、表現していった。

##### ①「オリエンテーション」

「高見の海 探検隊」は本校において永らく継承されてきている学習内容であり、前

年度の3年生が磯探検をして全校児童に向けて発表していたことも思い出しながらスタートを切った。釣りや海水浴等の生活経験を想起させながら干潟や磯について考えた。

「干汐海岸の干潟には潮干狩りで行ったことがあるけど立花の磯は行ったことがないな」「磯は海水浴で行く干潟とは波の激しさや岩の大きさが違う」「クラゲが今年は多いと聞いた」といった経験や「立花の磯では、釣りで釣ったことのある魚は見付けることができそうだ」等の予想があがった。これらをもとに学習計画を立てた。

## ②「干潟と磯の様子や生き物を観察しよう」

まず「干汐海岸の干潟には、どんな生き物がすんでいるのだろう」と、学校の目の前にある干汐海岸の干潟で生き物を調査した。干潟には貝やヤドカリ、カニが多く見られたが、海にいるはずの大きな魚の姿は見られなかった。次に「磯にはどんな生き物がすんでいるのだろう」と、立花の磯探検を



広島大学臨海実験所の先生と実施した。磯ではタコを見つけたが、干潟にはいなかったことなど、干潟と磯にすむ生き物が違うことに気付いた。また、個体数が減っていることやゴミが多いこと、クラゲが多いことにも気付いた。広島大学臨海実験所の先生からは、海水温が高くなっていることが原因として考えられることを聞いた。なぜ生きものが減っているのか、なぜ海水温が高くなっているのか。これらの疑問から児童自身が「ゴミが多かったからきれいな場所になって、生き物にとってすみやすい海になるといいな」「最近、釣れなくなった魚がいる。いなくなったのかな。もしそうなら、高見の海に戻ってきてほしいな。」等の思いをもった。

## ③「調べたことを次につなごう」

考えた高見の海の将来像を実現するために、これまでの調査を振り返り、「季節ごとの生き物に違いがあるのか比べてみたい」「昨年や一昨年との違いはあるのかな」と、次の活動への見通しをもった。また、「調べるときに先輩たちが作った生き物図鑑やリーフレットが使えるかな」と調査方法についても新たに気付きがあった。そして、「海浜清掃やボランティア活動で砂浜をきれいにしたことはあるけど、それ以外できれいにする人はいるのかな」と、環境保全の取組についても考えるようになっていた。環境と生物の生存についての関連を調べるために、塩分濃度や海水温について定点観測し、違いを調べていけるようにした。

## ④「生きものが生きるために必要なことはなんだろう」

すんでいる生き物の違いにはどんなことが関係しているのかを、理科や国語科の学習と関連付けながら考え、改めて「えさ、すみか、子孫を残す場所」がないと生き続けることができないことに気付いた。そこで、大きな台風を経験したことと結び付けて、「雨や台風の影響はあったのかな。もしかしたらすみかが危険な状態になっているかもしれない」と考えたり、夏の暑さを思い出して「早くからクラゲが多かったことと関係

はあるのかな」と地球環境との関連を考えたりしていた。また、干潟でたくさん見付けたごみにも原因があるのではないかと考えた。

#### ⑤「環境を守ろう」

海の生き物の環境を守るため、環境保全に向け取り組む企業の出張講義を受けて考えていくこととした。ここでは、海に流れ込む川の水と海との繋がりを学んだ。児童は、「家で使った洗剤は川から海に流れていたんだね。川や海をなるべく汚さないようにするために工夫していることも分かったよ」「水は海で繋がっているから一人一人が気をつけないといけないね。ぼくたちにできることはあるかな」「海の温度が高くなっていると言うことは、昔すんでいた生きものは今はすみにくいかもしいかな」等の感想をもち、自分たちの生活と海の環境が深く結びついていることを理解した。また、この学びを学校行事である地域の海浜清掃活動へとつなげ、主体的に参加していった。

#### ⑥「自分たちにできることを考えよう」

川の水が海に繋がっていることを知った児童たちは、地域を流れる段入川の環境にも関心をもった。(段入川の水質や環境については第5学年で学習する。)  
「高見山の方から流れてきているよ」「人が使った水が水路を通して川に流れてそのまま海に流れ込んでいるのかな」と、段入川の環境と干汐海岸の環境を結びつけて考えるようになった。そこで、より良い高見の海の将来像を実現するために自分たちにできることを考えた。児童は、「これからも釣りができるほどたくさんの生きものがすむ海でいてほしい」「ごみのないきれいな海にしたい」「釣りや潮干狩りなどで遊びに行く回数を増やして、行ったときにいつも掃除して帰ったらよいかもしれない」と考えていた。



#### ⑦「秋と冬の磯を比べよう」

季節による生きものの種類の違いを調べることを当初計画していた児童たちは、秋冬の時期にも広島大学臨海実験所の磯に調査に行った。この時にも同所の先生方にご指導いただきながら磯の調査を行った。児童は、「魚と同じで、海藻もたくさんの種類がある」「冬は魚よりも海藻の方が多いように感じるけどどうかな」と海藻にも目を向けることができた。

#### ⑧「干潟の海の塩分濃度と海水温を調べた結果は」

年間数回にわたって調査してきた結果をまとめることにした。児童は、「塩分濃度はほとんど変わらなかったけれど温度は2月になると低くなっている」「大学の先生が今年はずっとより海水温が低いから海藻はまだあまり育っていないと言っていたけれど、干潟も同じように海水温が低いね。やっぱり水は繋がっているんだね」「一年とおして調べてみたいな」という思いをもった。大人にとっては海が繋がっていることは当然のことだが、児童にとっては離れた場所の水が繋がっていることや影響し合っていることは驚きであったようだ。

### ⑨「調べたことを伝えていこう」

児童は、自分たちが採集した海藻を使ってしおりを作ることにした。そして、これをお世話になった6年生に感謝の気持ちとともにプレゼントすることにした。「6年生が喜んでくれてよかった」

「海藻は食べるだけじゃなくてアレンジもできるね」「季節ごとに違うしおりを作れそうだね」と身近な海藻を活用しながら、季節による海の様子（海藻）の変化にも気付いていた。そして、後輩たちに学びを残す活動を行った。「立花の海の生きものについて、干汐海岸の塩分濃度と海水温について、そして海や川の環境についてまとめられるね」「生きもの図鑑だけでなく、棒グラフや、海や川の絵を入れると分かりやすいね」と、内容や方法についても考えることができた。



### ⑩成果

- ・海や海に生息する生き物について調べるだけでなく、そのことから、水を通して人と海に関連する環境問題について課題意識をもち、課題解決のためにできることを実践しようとする一人一人の意識が高まった。
- ・水生生物の生育状況と水資源の環境、それを取り巻く暮らしの変化を関連付けて児童一人一人が主体的に考えることで、それぞれの概念を形成することができた。
- ・児童が探究的な活動を行うことをとおして、水や海を取り巻く環境の様々な問題や実態を実生活と置き換えたり、他教科・他学年とのつながりを意識しながら思考・判断したりする力がついた。
- ・高見の海の未来について、各教科の既習事項から自分なりの表現方法を用い、具体例を挙げながら書く力がついた。
- ・塩分濃度計や防水カメラを使って、塩分濃度や水温、水の中の生き物の様子など、普段調べる機会がない事柄を調べることができ、児童にとって貴重な体験とすることができた。

### ⑪水を学習の題材・素材としたことによる効果

- ・本校の児童は、海や川を身近に感じながら生活しているので、河川に着目して学習していくことで問題や改善策などを見だしやすく、課題を発見・解決していく能力が養われた。また、身近な事柄であるため、児童は興味・関心をもちやすく、主体的に活動することができた。
- ・社会科では、市の土地や人々の移り変わりを調べている。川や海は今と昔の比較対象として取り上げやすく、河川を題材にしたことで、土地を比べたり、新たな発見や予想を

立てたりしていた。

- ・海の環境について学習することがSDGsについて考えることにつながり、集会発表では3Rについて意欲的に調べてまとめ、発表することができた。

## 2 第4学年「高見の山調査隊」～高見の植物を発信しよう～

### (1) 目標(育成したい資質・能力 抜粋)

#### ①知識・技能

- ・高見山には、様々な種類の植物や生き物が生存しており、それらと環境との関わりについての概念を形成することができる。
- ・高見の自然との関わりから、その自然を守るために関わっている人々の思いや努力、工夫について理解することができる。 他

#### ②思考力・判断力・表現力

- ・学習したことをもとに、山の環境をよりよくするための活動に向け、課題を設定することができる。
- ・高見山の自然に対して聞いたり調べたりしたことから出た結果を基に考察したことを、表現方法を選び、表現することができる。 他

#### ③主体性

- ・高見山について活動をする中で、自分で課題を設定し、課題解決に向けて調べる方法や計画を考えたりすることができる。
- ・高見山の良さに気付き、自分の地域に誇りをもつことができる。 他

### (2) 学習の内容

第3学年の時に「海の環境は、海に繋がる川の水も影響している」ことを学んだ児童は、第4学年では、段入川の水源であり、校区の象徴として校名の由来ともなっている高見山の環境について学ぶ。高見山には樹木や植物・動物等、豊かな自然が残っているが、豪雨の影響による土砂崩れ、観光客等によるごみの不法投棄など、環境が守られているとは言いがたい現実もある。しかし、地域の人々による環境保全の取組は100年以上前から行われていること、現在も地域の方々や先輩である中学生たちが「高見山の森づくり」として植樹や清掃活動を行っていることを知り、高見山の環境を守るために自分たちにできることを考えていった。

#### ①「知っているかな、高見山」(オリエンテーション)

導入として、高見山について知っていること、聞きしったり体験したりしたことについて話し合った。児童からは、保護者と自家用車で登った体験や、日々学校や自宅周辺から見上げている経験から「木がたくさん生えている」「鳥(カラスなど)がたくさんいる」「イノシシがいると聞いたことがある」といった自然環境に関する情報や「山頂付近に古い建物や施設がある」「(山頂からは)遠くまでよく見える」「ごみが捨てられていた」など、山と人々の生活に関わる情報を体験的に出し合った。その後、web上に公開されている国土地理院の地形図で全校遠足のルートや自宅の位置などを確認しながら高見山各所の風景写真を見て、疑問に思ったことを出し合った。

#### ②「みんなで見付けた 高見山のなぞ」(課題設定)

地形図や写真、日常の経験から、高見山について追究したい課題を設定する活動を行った。児童からは「『自然が豊か』と聞いたけど、それはなぜだろう」「実際にはどん

な動物や植物がいるのだろう」「(周りの山には見られない)知らない地図記号がたくさんある。何だろう。(なぜ高見山にはあるのだろう)」「だれも住んでいない(普通の家はない)高見山に、どうして大きな施設、立派な道路やトイレがあるのだろう」といった疑問をもとに、「(3年生の「磯たんけん」の時のように、)みんなで見つけた『高見山のなぞ』を、実際に自分たちで調べて解明しよう」という課題を設定した。

③「調べよう 高見山のなぞ」(調査活動[文献等調査、フィールドワーク]の計画)

調査計画として、先輩たちの活動報告をもとに、実際に高見山に登る日を決め、高見山の動植物に精通しておられる地域の方をゲストティーチャーとしてお招きして当日のフィールドワーク及び事前・事後の学習を指導して頂くこととした。半日という限られた時間の中でのフィールドワークであるため、「現地ではできないこと」「ゲストの先生からこそ学びたいこと」「高見山のために今自分たちができること」という三つの視点から活動内容を精選する必要があることを示したところ、子供たちは、「動植物の観察」「山上の清掃活動(ごみ拾い)」の二つを選択した。これを基に、「地図記号から調べよう」「動植物観察の準備をしよう」「高見山に登ろう」「学習のまとめをしよう(後輩につなごう)」という学習の流れを設定した。

「地図記号から調べよう」では、子供たちは気付いた3種の記号を調べ、それぞれ「砂防ダム」「記念碑」「電波塔」であることを突き止めた。この「記念碑」のうちの一つは国土交通省に「自然災害記念碑」として登録されているものである。児童は、この碑文(授業者が平文に直したもの)から、100年以上前の人々が、乱伐による山林破壊に対し、地域を挙げた植林事業で山を蘇らせたことを知った。児童はこのことを砂防ダムの建設と結びつけ、山中にある多数の砂防ダムの画像を確認しながら、高見山の自然を守る取組が国・県・市及び地域の人々により連綿と受け継がれていることを理解した。

④「登って調べよう 高見山の植物」

フィールドワーク当日、児童はゲストティーチャーとともに徒歩で山頂を目指した。ルート上の各所で多彩な植物、イノシシが掘り返した斜面や登山道に残されたタヌキの糞などを興味深く観察した。ゲストティーチャーの解説を含め、「家族に伝えたいこと」「学校で発表し、みんなに知らせたいこと」「後輩(未来)に引き継ぎたいこと」という視点で得た情報を整理することにしており、それぞれがワークシートいっぱいメモを取っていた。東側山頂に到達後は清掃活動を行い、下山後学校でごみの分別を行った。児童からは、ごみの量に改めて驚く声とともに、空き缶の中に捨てられたたばこやペットボトル内に飲み残された飲料など、マナーの悪さを指摘する声が相次いだ。



「それだけ高見山に来たい人が多いということでもある」と考えた児童もいた。山上で他県からの観光客と話した（車のナンバープレートからレンタカーであると気付いた児童が自分から話しかけていった）体験と関連させ、「それだけ魅力のある高見山を、これから守っていききたい」との思いを全員で共有することができた。

⑤「学習のまとめをしよう（後輩〔未来〕につなごう）」

学習のまとめとして表現活動を計画・実施した。タブレットPCを活用してグループ毎にまとめのプレゼンテーションを作成し、参観日に保護者に対して発表した。授業後、保護者から「子供にせがまれて、3回も一緒に高見山に登りました。親も知らないことが多く、勉強になりました。」との感想をいただくなど、高見山の自然が児童にとって大切な、誇れる地域の宝として意識されていることを感じる事ができた。また児童は「（自分たちがそうであったように）後輩が自分たちのまとめを学習に活用してくれるといい」との思いをもっており、地域の自然を自分と周囲の人々とで共有し、大切に守り育てていくことの素晴らしさを実感することができる学習となった。

3 第5学年「高見の川調査隊」

(1) 目標(育成したい資質・能力 抜粋)

①知識・技能

- ・自然を守ることや環境保全の取組について情報を集めることができる。
- ・自分たちの身近な自然について考え、自分たちの生活に生かす事ができる。 他

②思考力・判断力・表現力

- ・川の調査をもとに自分なりに分析し、わかりやすくみんなに伝えることができる。 他

③主体性

- ・川の調査、分析をすることを決め、意欲的に高見の自然の様子を調べようとする。
- ・川の調査を通して、自分たちの生活を見直したり、自然を守るために何ができるか考えたりすることができる。 他

(2) 学習の内容

第3・4学年に続き、高見山から干汐海岸に流れ込む高見の川「段入川」について調査を行う。児童は、これまでの学習から、山から川が流れて海に注いでいること、校区にホテルが飛ぶ水路があること、また春の遠足の時に段入川沿いを歩いていたことを知っている。このふるさとの川が今どのような状況なのかを調査し、自分たちにできることを考え、発信していく。

①「オリエンテーション」

高見学区に流れる川について知っていることを交流した。児童からは、学校の近くの川では夏になるとホテルが見られること、川はあるけれどほとんど水が流れていないこと等が挙げられた。そこで、地域の方に段入川の様子や歴史を教えていただき、児童は護岸工事がされたことや生活・農業に欠かせないものであったことを知った。次は児童自ら段入川とホテルの水路の探検に行き、違いを見付けることにした。

②「川の様子を調べよう」

川をたどって行き、川の様子や流域を調べることにした。水の量・流れの速さ・川岸の



様子・すんでいる生きもの(指標生物)・水質調査(CODパックテスト)・流域調査を行った。山の方からも流れてきていたことや住宅街の中にもたくさんの水路があったことに気づき、疑問をもった。

指標生物を見ると「やや汚い水」と判断された。パックテストでは、ある箇所が他の場所と比較して特に汚れているという結果が出た。「家庭排水のせい?」「水が少ないから?」と理由を考えたが、正解にはたどり着けなかった。

### ③「段入川についてもっと知ろう」

自分たちだけの調査では分からないことが多かったので、尾道市公衆衛生推進協議会の方にゲストティーチャーとして来校していただき、段入川の環境について教えていただいた。段入川から繋がる水路にはカワニナがすんでいるのでホタルもきつといること、川はずっと繋がって流れているので指標生物も移動し、当該指標の場所にしかすんでいないというわけではないこと、パックテストは温度や時間、また取水場所の水量に左右されるので正確な検査結果を求めるのは難しいことなども教えていただき、自分たちの調査が間違っていたわけではないことが分かった。また、尾道市の下水道普及率は16.9%と非常に低く、小型合併浄化槽を設置していることを知った。しかし、これを活用しても10%の汚水は海に流れてしまうことも知った。



### ④「段入川と私達の生活についての関わりを考え、発信しよう」

段入川の歴史も現状も知った児童は、私達の生活に不可欠な大切な存在であり、ホタルがすめる環境でもある段入川の自然環境を守るために自分たちができることを考えていった。家庭から排出される汚水を減らすために、「洗剤を使いすぎないようにする」

「味噌汁などを作るときは食べられる量だけにする」などの意見があった。これらを壁新聞にし、全校児童に見てもらうことにした。また、これらの学んだことと自分たちが取り組みたいことについて、保護者やお世話になった地域の方々に発表した。環境について親子・地域で考えるよい機会となった。

## 4 第6学年「高見探検隊」～江府島探検をしよう～

### (1) 目標(育成したい資質・能力 抜粋)

#### ①知識・技能

- ・江府島探検をするために、たくさんの人々が関わっていることに気付くことができる。

- ・自分たちが地域の人々と関わり合いながら過ごしていることに気付くことができる。

他

## ②思考力・判断力・表現力

- ・江府島探検で何を追究したいのか考え、自分のテーマを決めることができる。 他

## ③主体性

- ・漁協の方に質問したりインターネットで調べたりして自分たちの作りたいいかだの設計を考えたり、江府島に上陸して調査したいことを考えたりすることができる。 他

## (2) 学習の内容

第6学年では、これまでの総合的な学習の時間で学んできた高見の山・川・海の学習の集大成として高見小校区の海に浮かぶ無人島「江府島」に自分たちで作ったいかだで探検に行く。干潟や磯の生き物、山の植物、川の水質等を調査してきた経験を活かし、江府島で何を調査したいのか個々でテーマをもって出発する。この学習には多くの地域の方が協力をしてくださっている。竹の切り出し、いかだのつくり方、実際に島へ渡る際の安全確保など、向島町漁業協同組合の皆様、近隣各校に勤務の技術員チームの皆様、そして保護者の皆様の多くのお力添えがあって実施できている。児童は地域の環境の素晴らしさとともに自分たちの周りにいる人の優しさに触れることで、感謝の気持ちとふるさとへの誇りを持ち、ふるさとの素晴らしい環境を守っていき、後輩たちにつないでいきたいという思いを強くしている。

### ①「テーマを決めよう」

江府島探検は、20年以上続く高見小学校6年生の一大イベントである。この活動をするために本校に入学してくる児童もいるなど、小さいころからあこがれの活動となっている。先輩たちの活動も参考にしながら、島に上陸して調査してみたいことを考え、グループごとに計画を立てていった。今年度の調査内容は「島周辺の魚介類の種類」「島で釣れる魚の種類」「島の全周を測る」「島にあるもので火おこしをする」の四つであった。第3学年の時に干潟や磯で調べた生き物との違いを調べ、環境の違いを比べてみたいと思うと同時に、いつも見ている無人島で、いつもとは違う体験をしてみたいと思っている。

### ②「歴史を知ろう」

この無人島にいかだで渡る活動を始めた元校長先生をお呼びして、活動が始まった時のことを教えていただいた。自分たちで考え、準備し、試行錯誤しながらいかだを作っていたことや上陸して当時実施していた活動などを教えていただいた。これに加え、児童の周りでこの活動を支えてくださっている家族や地域の温



かさ、環境の良さ、そして続けてくれている先生達、全てがそろっているから、今自分たちが江府島探検をできていることを語ってくださった。児童はこの活動ができることは当たり前ではないことに気づき、周りの人々への感謝の気持ちをもつことができた。

### ③「準備をしよう」

いかだを組むための竹の切り出しから作業を始めた。竹は、校区内の方が所有する竹林から譲ってもらっている。以前は保護者と一緒にP



TC行事として行っていたが、近年は地域の方や学校職員で切り出したものを児童たちがいかだの長さに測ってのこぎりで切っている。いずれにしても、多くの方に協力をいただきながら行うことができている。切った竹は向島町漁業協同組合の倉庫に保管させていただき、後日漁協の皆様にご教壇をいただきながら児童がいかだを組み上げていった。

### ④「江府島探検に行こう」

夏季休業に入り、出港時刻にちょうど良い潮になる日を選び、実行した。この日も漁協の皆様が児童のいかだの周りを漁船で並走して見守り、安全を確保してくださっている。無人島は出港場所からいかだで1時間弱の位置にある。教職員も複数体制で児童のグループ活動の支援を行う。暑い時期なので、短時間での活動ではあるが、児童は目的をもって無人島の調査を行った。「小さな魚がいるよ」「貝やカニを見つけた」と発見を次々としていった。しかし、島の砂浜には、たくさん木切れの他にペットボトルやビニール袋が漂着していることにも気付いた。「ごみ（ペットボトル）を拾ったよ。持って帰ろう」という声もあがった。自分たちや観光客が町で捨てたゴミが海に流れ着いて海の環境を汚染している現実を見ることになった。

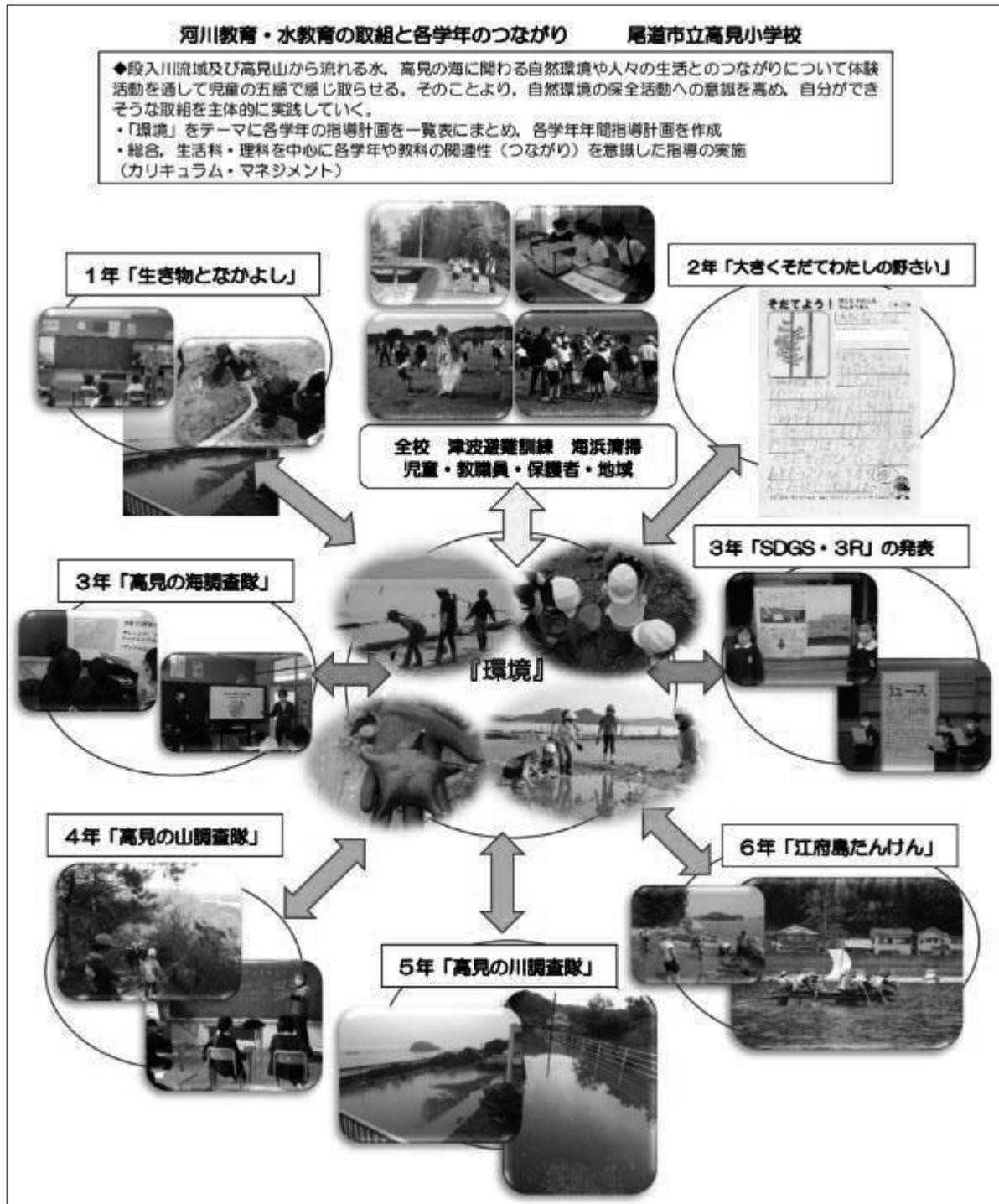


### ⑤「伝えよう」

江府島探検で多くのことを学んだ児童は、発見をスライドにまとめ全校児童に報告会を開いた。これまで4年間の総合的な学習の時間で学んできたことを振り返り、高見の環境を守っていききたいという思いが伝わる発表となった。さらに、下学年の児童には、6年生になったら江府島探検に行きたいという憧れの思いももっていた。また、校舎内にある江府島の環境に関する掲示を更新していこうと意欲をもった。

#### IV まとめ

- ・地域の特色について、水のつながりをキーワードに据えて追究することによって、総合的な学習の時間4年間をかけて系統的に環境を守り地域を誇れる児童を育成することができた。
- ・各学年の段階に沿って環境を守るために自分たちにできることを主体的に考え、発信することができた。
- ・地域の方達とのつながりを深くし、一緒に環境保全活動に取り組むことで、ひととのつながりを築き感謝の気持ちをもつことの大切さに気付くことができた。
- ・本校の宝である自然と地域人材の力を継承し、学びが充実するよう改善を重ねていきたい。



## 地域の宝を誇りとし大切に作る児童生徒の育成を目指して

～ユネスコスクールとして小中一貫で取り組む自然体験活動～

山梨県南アルプス市立芦安小学校  
校長 根津 盛吾

### I はじめに

本校は、小中一貫校として「郷土を愛する心と夢を育み 未来を拓く人づくり」を学校の教育目標に掲げ、南アルプスの広大な山林資源と、清らかに流れる水を生かした教育活動を進めている。

2011年には、隣接する芦安中学校と共にユネスコスクールに加盟した。これを契機に、ユネスコスクールの活動テーマのうちSDGsの目標4（教育）に関連した「持続可能な開発および持続可能なライフスタイル」の分野を通して、自然環境の保全と持続可能な社会のあり方について考えることのできる資質・能力の育成を目標とし、取組を推進してきた。特に「生物多様性、環境、エコパーク」を中心テーマとした学習と自然体験活動を重視し、学区の芦安地域だけでなく、ユネスコエコパーク内にある周辺の自然環境（緩衝地域）と人々の生活の関わりについても学びを続けている。

本校の小中一貫の自然体験活動の概略は、下表のとおりである。本校の学校教育グランドデザインから引用する。

教科等	小学校	中学校
総合学習等	自然体験（夜叉神峠・白根御池小屋） 自然体験教室（NPO 芦安ファンクラブとの連携） 巣箱づくり等 御勅使川治水の学習（歴史・文化の観点から） 総合的な学習の時間 芦安探検隊（歴史・伝統文化など） 夜叉神太鼓（和太鼓演奏）	全校登山（北岳・仙丈・鳳凰） 自然パトロール（夜叉神峠） 芦安探検隊
生活特活等	農園を活用しての活動（栽培・食育活動） 学校林整備事業（緑の少年少女隊） 地域の方々や他校（早川北小）との交流（小中合同文化祭“白峰祭”） 芦安ふれあい運動会（小中の児童生徒・保護者・地域住民一体）	
その他	ユネスコスクール（SDGs・ESD教育）のユネスコエコパークの体験学習	

以下、それぞれの活動の中から、特に自然環境とのかかわりが深い事業内容について、項目ごとに報告する。

### II 自然体験活動の実際

#### 1 巣箱づくりと巣箱の設置（4・5・6年生）※ NPOとの連携

NPO芦安ファンクラブの方を講師としてお招きし、芦安地区に生息する鳥たちの種類や生活について学んだ。その後、ご用意いただいた製作キットを基に、巣箱づくりに取り組んだ。仕上がった巣箱は、近くの学校林に取り付けたり、各児童の自宅に持ち帰り、近隣の樹木につけたりした。数日後には「鳥のひながいたよ！」という児童からの嬉しい報告が数件あった。



NPOの方による巣箱づくりの学習



巣箱づくりの実習



完成した巣箱

## 2 春先の学校林整備と地域清掃（小学生&中学生&保護者）

授業参観日の午後に、1～4年生が学校の周りの清掃活動を行い、5・6年生と中学生が学校林整備で桜の記念植樹を行った。目的地となる学校林は、登山コースを徒歩で45分間。山あり谷ありの難コースだったが天候に恵まれ桜の植樹も無事に終了した。有意義な活動となった。

小学1～4年生も親子でしっかり学校周辺の清掃やごみ拾いができた。



沢を下り、目指す場所へ移動中



急斜面ながらも桜の植樹を実行



急斜面ながらも桜の植樹を実行

## 3 秋の学校林整備（小学生&中学生&保護者） ※NPOとの連携

春に続き、秋には小学校が保有する学校林において、整備活動を行った。毎年NPO芦安ファンクラブの講師の方々にご協力をいただいている。毎回レアな体験となっている。

まず始めに、講師の方々より「森はなぜ大切か」「木を育てるといこと」など、なかなか普段は自覚できないことを、丁寧にわかりやすくご説明いただいた。要旨は以下である。

### ～森を育てるといこと～

私達の生活に欠かせない“木”。木を育てるといことは、どんな風に私達の生活に関わってくるでしょうか？

家を建てたり、椅子やテーブルを作ったり、味噌汁の茶碗だったり、暖炉で燃やして暖かく過ごしたり、ふと見渡せば様々なところで見つけられます。木を加工して何かを作ることは、私達の生活に欠かせないのです。

また、木を育てるとい事は私達の生活を守ってくれることにも繋がります。

しっかりとした木を育てれば、地面の中で根は大きく、土を掴むようにしっかりと広がります。雨が降った時に水は色々な物を押し流します。当たり前のことですが、水は高い所から低い所に流れていきます。

もし山の斜面の何もなければ、土や岩は水に押し流され私達の家まで押し寄せてくるかもしれません。大雨が降り、家に向かって大量の土砂が流れてきたら家は簡単に壊されてしまいます。

しかし、木の根がしっかりと土を掴んでくれて、水を吸い上げてくれていれば、たくさんの土が流されることはないのです。

このように、木そして森は、私たちの生活にとっても役立つ存在であり、「私たちを守ってくれる」という存在でもあります。ですから、私たちは普段から木を大切にしていかなばなりません。

私たちが利用しやすいように、「まっすぐに育てる」ことや「間伐」をするということが必要なのです。今日の活動は、そうした「大切な木と森のお手入れ」の活動です。

保護者にも協力を呼びかけ、一緒に活動していただいた。

上記にあるように、活動の主な内容は「枝打ち」と「間伐」である。長いのこぎりを用意し、脚立やはしごも用意して、下部を保護者に支えてもらいながら、児童は「高い場所の枝打ち」を体験した。おそるおそる、おっかなびっくりだった子どもたちも、次第に慣れてきて、意欲的に活動していた。伐採した木材は、人力で校庭まで運び出した。これも重労働だった。



← 高い場所の枝打ちや木の切断と運び出しを行う小学生 ↑

また、中学生は、講師の手ほどきにより「チェーンソー使用体験」をした。生まれて初めてのことである。豪快な音を出し、太い木をみるみる切り出していくチェーンソーの力に、驚きと興奮を隠せない生徒たちであった。

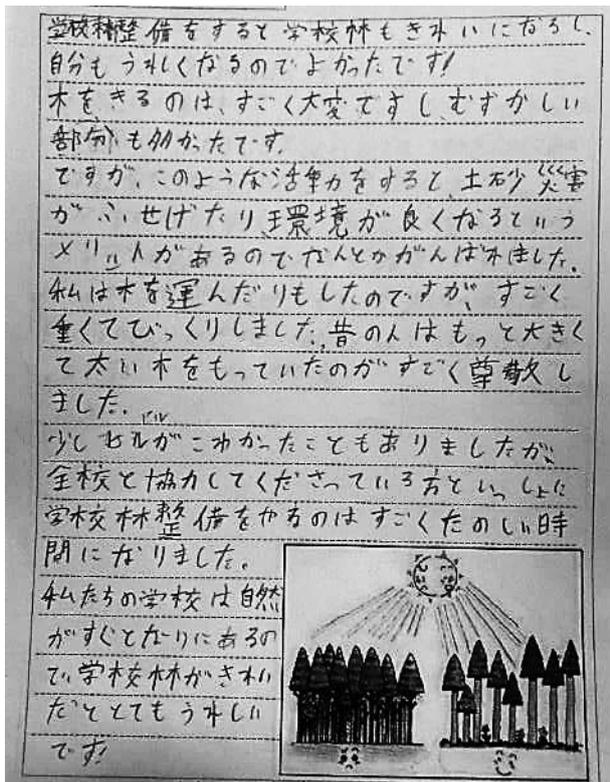


↑ チェーンソー体験をする中学生 ↑ →

#### <子どもたちの感想（抜粋）>

■ 2年生になってから、のこぎりをつかえたので、よかったです。木とかをはこぶしごともあったけど、大きい木をはこんだりしてつかれました。でも、みんなやゆおとうさんおかあさんとかが手伝ってくれたので、よかったですとおもいました。

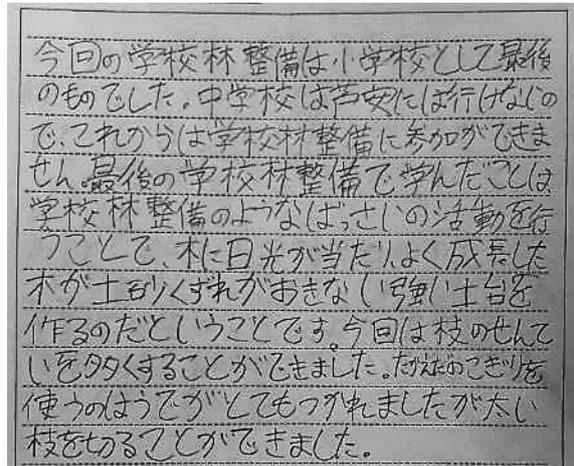
はしごをのぼるのはこわかったけど、のぼってみたら、楽しかったので、また来年もやってみたいです。ながいのこぎりとかあってびっくりしました。【2年生女児】 ■



【6年女児】

■最初は「ヒルにさされるかな」とこわかったけど、やっていくうちにこわいヒルのことは消えました。木に生えている小枝を長いのがざりで切るのがけっこう大変でした。

なぜ木を切るのかが知れて、とてもよかったです。来年はもっといろいろな木を切りたいと思いました。【4年女児】■



【6年男児】

#### 4 地域の自然（森林）学習会 ※NPOとの連携

NPO法人「芦安ファンクラブ」の方を講師に招聘し、自然豊かな学区「芦安地区」に存在する植物の植生などについてフィールドワークを行った。併せて「芦安地域の歴史を学ぶ」という趣旨で、地域の伝承について、講師から学ぶ機会を持った。



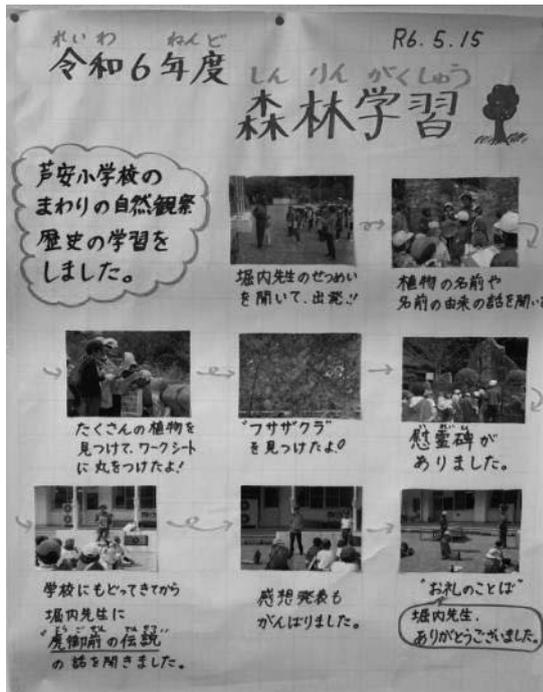
予め講師が地域を巡り作成した、左の「手作り図鑑」を各児童に配布し、実際に戸外で自然観察会を行った。

特に1年生にとっては、新鮮な活動となり、熱心に探し、メモを取っていた。



以下、子どもたちの感想（抜粋）である。

- 「くさのしゅるいやかたちがわかってよかったです」低学年児童
- 「最後の（ネイチャー）ゲームが楽しかったで、またやりたいです」中学年児童
- 「虎御前の伝説などがいろいろと聴けて良かったです」中学年児童
- 「いつも見ても何も見つからなかったけど、ゆっくり見てみると、いろいろ見つかってよかったです」中学年児童



■「5年生の最後に源頼朝のことを調べていた中で、そのときに芦安の歴史も（今日聞いた話と）同じように出てきて、調べたことがたくさん出てきて面白かったです」高学年児童

体験から学び、抱いた思いを自分の言葉で表現し発信する。これからの時代に求められる力が、少しずつ身に付きつつあるように感じられた。



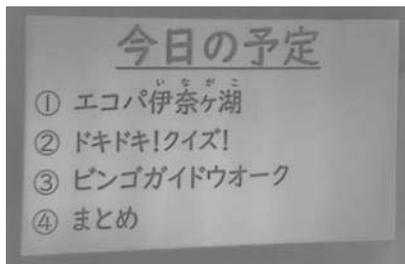
熱心に調べている六年生

### 5 エコパ伊奈ヶ湖 自然体験学習会 ※NPOとの連携

エコパとは「生物圏保存地域(ユネスコエコパーク)」の略である。世界自然遺産が、顕著な普遍的価値を有する自然地域を保護・保全するのが目的であるのに対し、ユネスコエコパークは、生態系の保全と持続可能な利活用の調和を目的としており、保護・保全だけではなく自然と人間社会の共生に重点が置かれている。日本では10ヶ所が認定されており、本校がある「南アルプス市」も、3県10市町村の「南アルプスユネスコエコパーク」の一員として2014年に登録承認された。

「持続可能な社会の構築」の実現のために、SDGsとも関連づけながら総合的に扱う学びを展開することにより、持続可能な地域づくりを担う子どもの育成を目指している。

本校では、「緩衝地域」にある伊奈ヶ湖に全校児童で赴き、エコパの理念や環境保全の大切さを体験的に学んでいる。



↑ 自然観察ビンゴのシート  
← ビンゴガイドウォークの様子

6 南アルプス開山祭参加と広河原園地の散策（小中学生） ※市環境課・NPOとの連携

鳳凰三山（地蔵ヶ岳・観音岳・薬師岳）、白根三山（北岳・間ノ岳・農鳥岳）等の南アルプス連峰の開山に際し、地元の広河原で「開山祭」が毎年6月に催されている。芦安小中の児童生徒が、地元の代表として招かれ、「北岳の歌」や「雪山讃歌」の歌唱を披露している。午後には、NPO芦安ファンクラブの方々の手ほどきにより、広河原園地の散策と自然体験を行っている。



↑ 歌の披露 / 黙とう



広河原ガイドマップ→  
(NPO 芦安 FC 作成)



ガイドマップを頼りに、広河原独自の植生や動植物について学ぶ機会となった。何気ない通り道の脇にたまた貴重植物について、芦安FCの方々に教えていただきながら、資料を基に観察を行った。また、かつて芦安村で盛んだった「林業」について、園地の巨木たちの姿をもとに歴史を学んだ。江戸城築城の際、木こりたちが大変な思いをして、大木を切り出し、川から運び出していた話を学びつつ、「巨木を切り出す斧」の使用体験も行った。



↑ 大木の大きさ体験



↑ 大木切り出し体験



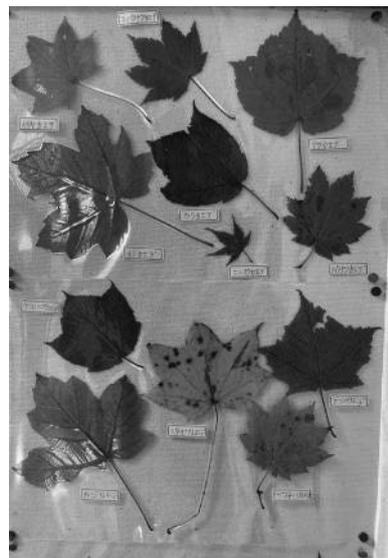
↑ 北岳



↑ 双眼鏡を使用しての観察

7 登山体験「夜叉神峠」 ※小学3・4年生とその保護者 およびNPOとの連携

日本第2位の高峰「北岳」を学区に抱える本校では、3年生からの登山活動が特色の一つになっている。3・4年生は、毎年「夜叉神峠」までの登山活動を行い、樹名板の設置や芦安村時代の人々の暮らし（林業）、ネイチャーゲームなどを楽しんできた。※下の写真 左の2枚は事前学習。





↑ 樹名板の設置



↗ ネイチャーゲーム 児童感想 →

夜叉神峠に登り、ちやう上へ登った  
 時間がはたまたまと思いましたが  
 ちやう上に登ってほりうち先生から  
 夜叉神のたたりのお話を  
 聞いてその話がハッパにのこり  
 ました。下山する時もきつが  
 けれど楽しかたです。よく物や  
 重た物にふいてもいろいろで、おもしろいと思ひは

8 登山体験「白根御池小屋（北岳中腹）」※小学5・6年生 およびNPOとの連携

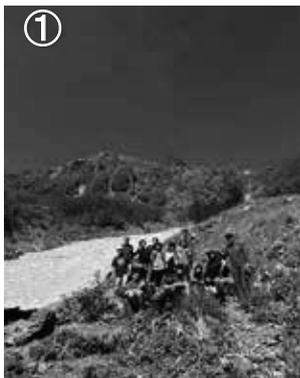
5・6年生は、毎年7月に北岳登山道の中腹にある山小屋「白根御池小屋（標高約2,200m）」まで登る。ここに宿泊する一泊二日の行程である。ここで高学年児童は、NPO芦安FCの方々と登山体験をすることで、「山の歩き方・山でのマナー・自然保護と環境保全の実際・北岳近辺の貴重な生態系」等の様々なことを学んでいる。

【目的】

- (1) 南アルプスの自然や文化とそれを取り巻く環境について学び、自然に親しみ、大切にしていこうとする心情や態度を育てる。
- (2) 自らの力で最後まで登山することで、困難に耐える心身の育成を図る。
- (3) 公共の場のルールやマナーを学ぶ。
- (4) 集団生活を通して、人を思いやり、協力することの大切さを理解する。

【活動を終えて】

- ① 登山の途中で様々な植物にふれ、芦安ファンクラブの方の説明をしっかりと聞いて、それぞれの植物の特徴を学ぶことができた。
- ② お花畑の道を歩き、雪崩による樹木の変化や標高による植生の違いを知ることができた。
- ③ 大樺沢の雪渓を観察すると共に、雪渓の氷に触れ、自然への愛着を感じる事ができた。



①



②



③



④

- ①→大樺沢二俣の大雪渓の前で撮影した一枚
- ②→白根御池小屋の前でNPOのみなさんと記念写真
- ③→「花カルタ」で学びながら遊ぶ子どもたち
- ④→芦安ファンクラブの方と植生について学んでいる子ども

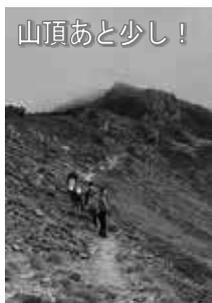
【子どもたちの感想】抜粋

- ◆一日の感想を書くときに振り返ったら、自分がどれだけがんばったか良くわかりました。
- ◆ヘリコプターが食べ物やトイレを運んでいるのを見た。大変なことだと思った。
- ◆雪渓が心に残っている。アイゼンをはいて雪渓を歩いて記念になった。
- ◆下山がとてもこわかったのですが、がんばりました。「こわい」が「楽しい」に変わりました。
- ◆チョーレアなオコジョを見れてマジうれしかったです！チョーかわいかった。会えてよかった！
- ◆昼食の後に出了たサービスのアイスクリームがとてもおいしかった。つかれた体にしみこんだ。
- ◆草すべりでは、キタダケキンポウゲが見れた！その他にもいろいろな動物や植物がいた！
- ◆私が一番きれいだなと思った花はカラマツソウです。フワフワで白くてステキだなと思いました。

### Ⅲ 芦安中学校生徒の活動

#### 1 登山活動「北岳・仙丈ヶ岳・鳳凰三山」

芦安小から芦安中に進学すると、さらに上級の登山活動が待っている。それが「北岳・仙丈ヶ岳・鳳凰三山」の登山である。三か所をローテーションして回っている。かなり過酷である。だが、この活動を乗り越えるとたくましさと強さが磨かれる。



#### 【芦安中の学校だよりから】

今回の登山の途中で偶然出会った方から「昔は登山を経験させる学校がたくさんあったが、最近あまり聞かなくなった。世の中の流れてやむを得ないことかもしれないが、苦勞に耐え、乗り越えた先の喜びを身をもって体験するいい機会なのに・・・素晴らしいことなのでぜひこれからも続けてくださいね」と言われました。確かに今の世の中「できるだけ苦勞をしないように」「面倒なことはしない」「コスパ、タイヤが悪いことは無駄」という方向に物事が進むことが多いと感じます。ただそうした時代の中で、芦安中学校の伝統行事の価値や私たち教師の狙いを理解していただき評価して下さる方がいることをうれしく思いました。

#### 2 夜叉神の森自然パトロール「夜叉神峠入口と登山道の清掃活動」



生徒・教職員で夜叉神峠登山口・登山道・夜叉神峠付近の環境美化活動を行った。峠や登山道付近には他人が捨てた飲食物のごみがたくさん落ちていていたが、どの生徒も意欲的に清掃活動に取り組んでいた。全校登山に臨む際のマナー向上にもつながることができた。こうした「実感を伴った地道な活動」が生徒たちに必要なことだと感じた。



### Ⅳ おわりに

芦安小中学校は、市街地からは離れた山間部に位置する山あいの学校であり、小学校は全校児童28名、中学校は全校生徒11名の小希望校である。しかしながら、地の利を生かした自然体験活動を学校の特色として打ち出し、「芦安郷育」の理念のもと、既述してきたような活動を積極的に展開してきた。

恵まれた自然環境に囲まれつつ、「地元の学校を大切にしよう」という意識の高い地域の皆様の応援もいただきながら、「芦安ならではの」環境教育に力を入れている。児童生徒は、公立学校としての通常の教育課程での学習に加え、紹介してきた「本物の自然に触れる活動」にも意欲的に取り組み、得難い体験をしている。「ふるさと芦安が好きだ」という郷土愛と自然愛護の心をより一層育成できるよう、これからも全職員の共同・協働体制のもと励んでいきたい。

## 持続可能な社会の担い手を育むための教育の推進

～ふるさとの海に親しみ、ふるさと愛を高める活動を通して～

福井県小浜市立内外海小学校  
校長 一瀬 泰史

### I はじめに

本校は、福井県小浜市北部の海側に位置し、全校児童71名 7学級の学校である。平成3年に堅海小学校、阿納尻小学校、矢代小学校を統合し、内外海小学校として開校した。平成24年には田鳥小学校と統合し、内外海地区全体が統合された学校となり現在に至る。

内外海地区は、小浜湾に面する内海と若狭湾に開ける外海の両方に面している。校歌に「久須夜と彦姫」「天平の塩」「日本に初めて渡ってきた象」「天下の奇勝蘇洞門」が歌われ、各集落から海の道が続き風光明媚な地域である。日本に初めて象が渡ってきた際、象をつないだとされる“象つなぎ岩”が校区に現存する。この歴史にちなみ、学校には、象の石像が設置されており、児童から“パオンちゃん”の愛称で親しまれている。

海の幸に恵まれ、古代から若狭国は御食国（みけつくに）とされ、塩や魚介類など豊かな食材を奈良や京都の都に提供してきた土地柄でもある。校舎からは小浜湾を一望することができ、全ての校区は海に面しており、児童は、日々海への親しみと恵みを感じながら育っている。

### II 本校の学びについて

令和6年度は、「内外海の子として大きな志をもち、未来へ挑戦できる子」の育成を学校教育目標とし、「志高く！輝け 内外海っ子！」をスローガンとして掲げ教育活動を進めている。本校が目指す児童像として、「地域を愛し、地域に愛される子（地域に愛される学校）」を設定し、複雑で広範な社会課題を自分事として捉えられるよう、ふるさと学習を基盤として、地域と連携した体験活動の充実を図っている。

本校はユネスコスクールに加盟しており、SDGsの達成に貢献できるよう、ESD教育に取り組んできた。教育活動全体を通して、ESDの視点に立ち、6つの概念（I多様性 II相互性 III有限性 IV公平性 V連携性 VI責任性）に関わる課題を見だし、解決に向けて取り組んでいる。活動を通してつけたい資質・能力として、国立教育政策研究所の7つの能力を参考に、本校では3つの資質・能力にしぼり、育成を図っていきたいと考えており、ESDカレンダーを作成し、これらの力を色分けして表示している。なお、ESDカレンダーは学期毎に振り返りを行い、修正を加えながら活用している。

本校の強みとして、海洋教育によるふるさと学習が挙げられる。海とのつながりを生かし、海洋教育パイオニアスクールプログラムにも参加しており、海に親しみ、海を知り、海を守り、海を利用するという海洋教育のキーワードを意識して体験学習を進めている。海的环境について考える活動として、『海ゴミ調査』や海ゴミの『アップサイクル』をテーマに活動に取り組み、自分達の生活を振り返る学びを行っている。

これらの活動のまとめとして、学習成果を学校外に『発信すること』にも取り組んでいる。校内学習発表会はもちろんのこと、「福井県のプレゼン大会」や「県立若狭高校のSSHポスター発表会」などを活用しながら、自らの学びを発信することを通して、ふるさとへの更なる気付きを喚起し、ふるさとの環境や素晴らしさを未来に引き継いでいきたいと考える児童を育成したいと考えている。

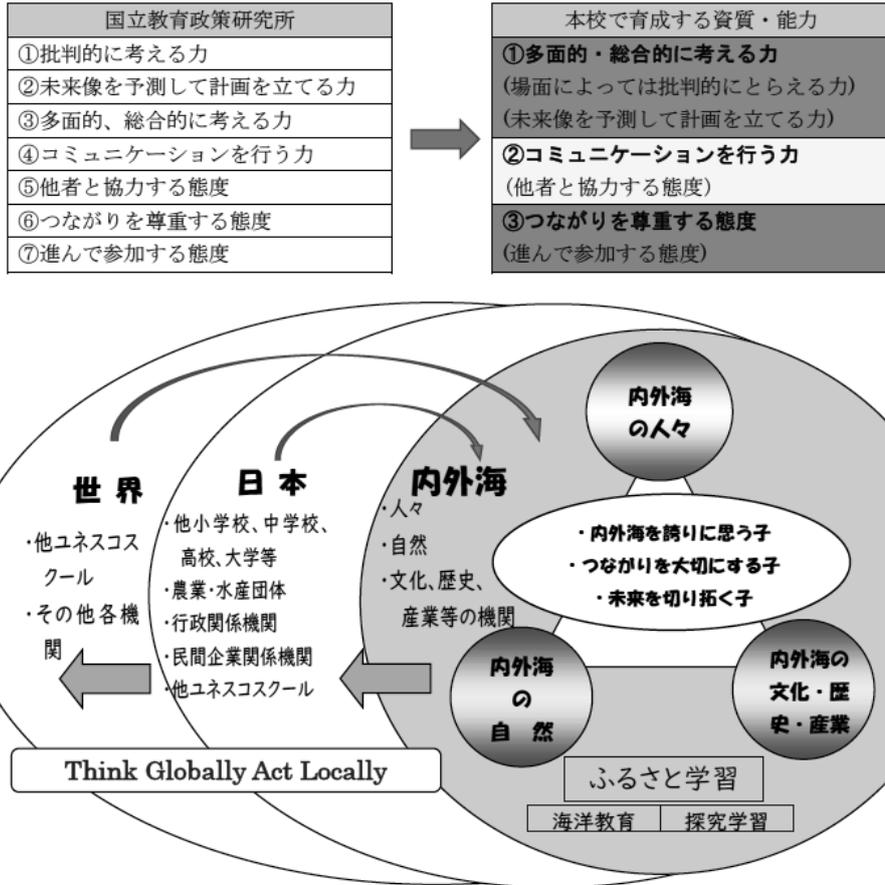
1 ESD教育全体計画

令和6年度 持続可能な開発のための教育（ESD）の全体計画

小浜市立内外海小学校

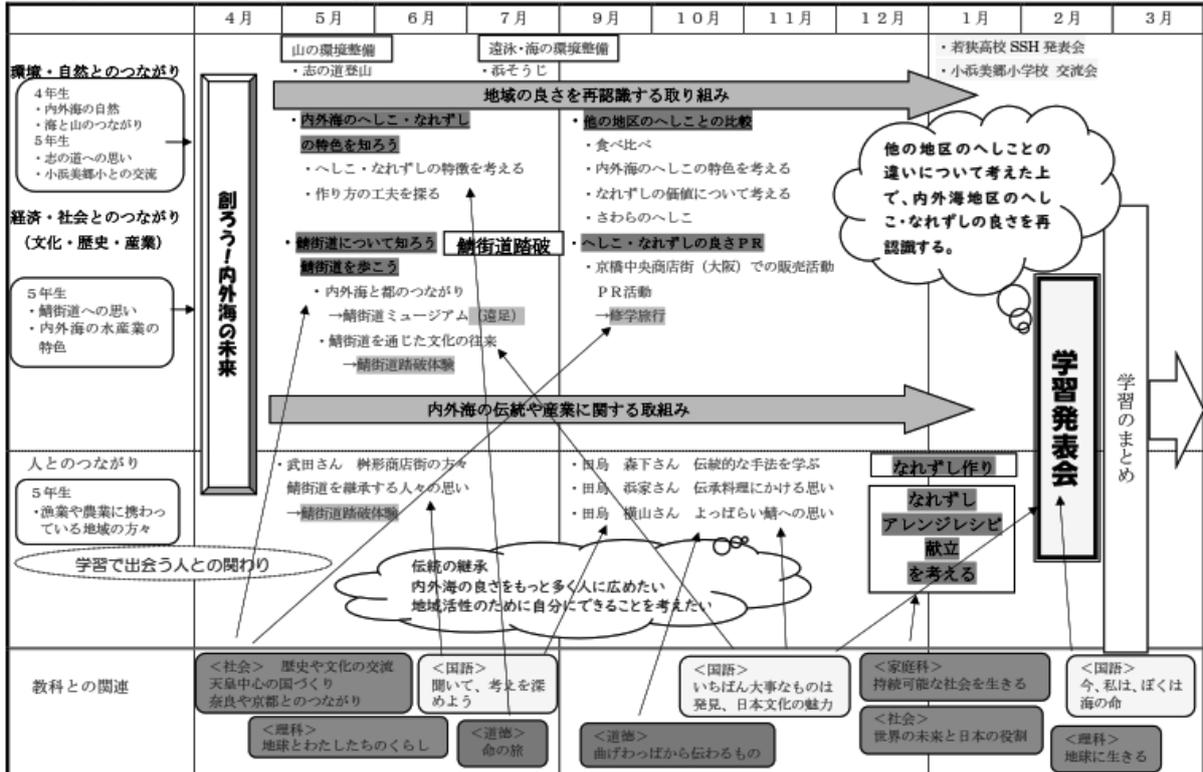


## 2 本校で育成する資質・能力



## 3 本校のESDカレンダーの例（令和6年度 6学年）

令和6年度 小浜市立内外海小学校 6年生 ESDカレンダー



### Ⅲ ふるさと学習の実践

本校では、総合的な学習の時間や生活科を中心に、ふるさと学習と各教科の学習を横断しながら、「ふるさと内外海の海」についての学習に取り組んでいる。小浜や内外海の海の魅力を感じ取り、恵みに感謝し、ふるさと愛を高めることで、この素晴らしい環境を未来に引き継いでいきたいという思いがもてるよう活動を行っている。特に高学年においては、活動を行う中で生まれてきた海に関する様々な課題を地域と共有し、解決に向けて思考し、外へ発信する活動を行っている。

以下に、令和5年度から令和6年度にかけての実践を報告する。

#### ○ふるさと学習単元

単元名	対象学年
内外海の魅力を見つけよう！	全学年
内外海の海を守ろう！	4・5・6年生
内外海の魅力を広めよう！	4・5・6年生

#### 1 【単元名】内外海の魅力を見つけよう！ 【対象学年】全学年

##### (1) マリンレジャー体験



シーカヤック体験

使っておにぎりを作り、釣った魚と一緒に食した。山の幸、海の幸に触れ、地域の魅力を五感で感じる事ができた。

また、「ブルーパーク阿納」は、修学旅行生の受け入れを行っており、毎年他県から多くの生徒が修学旅行で訪れる。このような施設を運営していくことが持続可能なまちづくりや美しい海の維持につながる旨の話をお聞きし、児童は、それぞれにふるさとの未来を思い描いていた。

2・4年生が校区内の「ブルーパーク阿納」において、シーカヤック体験に取り組んだ。事前学習では、4年生がスライドや過去の写真を使って2年生にパドルの使い方説明を行った。当日は、4年生が2年生とペアを組み、パドルの使い方をアドバイスしたり、景色や海を楽しんだりすることができた。

3・5年生では、ブルーパーク阿納を利用し、海釣り体験や海水を用いた塩作りを行ったり、釣った魚を捌く体験を行ったりした。自分たちで作った塩と梅干しを



海釣り体験

##### (2) 内外海の特産物を知ろう①

3年生では内外海地区の特産物についての学習に取り組んだ。特産物の1つでもある梅を1～3年生で収穫し、梅を使った料理を探し、ゲストティーチャーの指導により「梅干し」と「梅ジャム」作りに取り組んだ。冬には養殖の「若狭わかめ」の出荷体験にも取り組んだ。



わかめ収穫体験

深まったようである。特に、ヒラメの陸上養殖は、酸素ナノバブルを用いた完全無投薬養殖技術により養殖されており、魚のえさや排泄物等で海の水を汚さないとのことであった。養殖の新しい技術について理解を深めると共に、これから地元の海の環境をどう守っていくかについても考えるきっかけとなった。

5・6年生では、地域に残る伝統料理と、継承する人々の努力について調査を行った。若狭湾一帯では、伝統的に鯖料理の文化が根付いている。調査を踏まえ、地域の伝統料理である「鯖のへしこ」や「なれずし」作りを行った。ここ数年、地球の温暖化により海水温が上昇し、地元では天然・養殖を問わず、鯖の収穫量が激減している。このような状況の中、地元の特産物の鯖を使用できる喜びを感じ、海の恵みの持続可能性について学びを深めることができた。

また、2・3年生児童は、海洋学科の高校生に指導を受けながら、鯖を捌く体験を行った。地元で獲れた鯖を使い、それぞれ三枚おろしに挑戦した。慣れない包丁使いであったが、真剣な取組が見られた。地域の特産物について調べるだけでなく、実際に体験することで、海の恵みを体感できたようである。



鯖へしこづくり体験

ゲストティーチャーから養殖の方法について教えて頂き、出荷作業と同じように、重さを量り、袋詰め作業を体験した。

地域の海の特産物の魚についても学習を行った。5年生では、ヒラメの陸上養殖場やふくいサーモンの海上養殖場見学、タコかご漁体験を行った。それぞれ、育てる漁業の大切さについて理解が



ふくいサーモン養殖場見学



タコかご漁体験



陸上養殖場の見学



鯖さばき体験（高校生と）

### (3) 内外海の特産物を知ろう② 「牡蠣養殖」の学習



牡蠣の養殖について学ぶ

令和5年度から、内外海地区で盛んに行われている「牡蠣養殖」の学習を4年生が中心に取り組んでいる。内外海地区の特産物の代表格の一つである「牡蠣」がどのように成長し、出荷されているかを学ぶことで内外海の海の豊かさを感じることが目的である。養殖に携わっている方々からのお話で、近年、温暖化の影響を大きく受けており、多くの人が協力して対応策を練っていることを知った。

この活動を発展させ、令和5年度末から令和6年度において、牡蠣の養殖学習を福井県立大学海洋生物資源学部・漁業協同組合・市役所・牡蠣養殖業者との協働により活動を進めている。実際に牡蠣を育て、成長観察していくことで牡蠣と海的环境について学ぶことが目的である。最初に、県立大学の教員から内外海の海の豊かな環境と牡蠣の成長の関わりについて教えていただいた。温暖化が進む日本の海の現状に不安と問題点を感じ取る児童が多かった。

牡蠣の成長観察の具体的な活動として、県立大学から3倍体（早く成長する個体）の牡蠣の稚貝を譲り受け、寸法や重量を計測し、学校近くの養殖筏において、海中に垂下を行い、定期的に成長観察を行っている。



牡蠣養殖筏で成長観察



水槽での牡蠣成長調査

さらに、学校内においても、牡蠣の稚貝を水槽で育てており、海と水槽での育ちの比較を行っている。牡蠣が育つ環境について学び、内外海の海の豊かさを改めて感じ取った児童が多かった。今後も定期的に調査を進めていく予定である。

### (4) 地域の民話から学ぶ

3年生は、地域に残る昔話の学習で、海に関わる地域の民話に親しむ活動を行った。地域の語り部の方から、校区の西小川地区や仏谷地区に伝わるお地蔵さんの昔話を聞き、西小川地区のフィールドワークを行い、お地蔵さんのお堂の見学や地域の方からお話を聞いた。また、仏谷地区では牡蠣の養殖が盛んであるが、なぜ内外海地区で牡蠣の養殖が盛んになったのかを昔話と絡めお話しいただいた。



地域の漁村に伝わる昔話を聞く

なお、西小川地区の昔話は、日本財団「海ノ民話のまちプロジェクト」によりアニメ化され、完成後全校児童で作品鑑賞を行った。児童は、昔話が単なる昔の話ではなく、海と関わる地域の人々の心に現在も生き続けていることを実感したようであった。

#### (5) 内外海の海をみんなで泳ごう（遠泳大会）

毎年、5・6年生は、内外海地区の海水浴場において、遠泳大会を実施している。練習から本番当日まで多くの地域の方や保護者の方からの支援を頂き、校区の犬熊海水浴場から隣の阿納海水浴場まで、6年生が800m、5年生が500mを泳ぎ切っている。最初は足が着かない深い海での水泳に恐怖心を感じる児童も多いが、練習と多くの方からの支援により、全員が完泳している。ゴールまで泳ぎ切った際の笑顔はとても素晴らしく、それぞれが自信を付け、自己の成長を感じ取ることができた。



遠泳大会

#### (6) 内外海の海の魅力を描こう

1・2年生が内外海の海の魅力をテーマに共同制作に挑戦している。事前学習として、内外海の海について話し合ったり、魚を調べたり、海での体験を語り合ったりして海の魅力を確認し合った。

令和6年度は、北陸新幹線をテーマに、親しみのある内外海の海の魅力を大きな紙に描いた。自慢の魚や海の波等に北陸新幹線のイメージを組み合わせた作品となった。

作品は、市役所をはじめ、JR小浜駅、文化会館等に巡回展示し、児童らの海への愛着と内外海の海の素晴らしさを広く伝えている。



内外海の海の魅力を共同制作

## 2【単元名】内外海の海を守ろう！【対象学年・人数】4・5・6年生

### (1) 海洋プランクトン調査

4年生では、社会科の学習と関連させ、「山・川・海」のつながりについて、学習を進めた。その際に、プランクトンに着目し、福井県立大学の出前講座を活用し、海の豊かさを守るためには、山や川を大切に管理していくことの大切さを学んだ。また、大学で培養している植物プランクトンを顕微鏡で観察し、魚や貝がどのようなプランクトンをエサにしているかを見ることができた。

養殖の学習では、地元の民宿業者の人々が取り組んでいる魚養殖の方法、工夫・努力、課題についてインタビューや調べ学習を通して詳しく学ぶことができた。特に、エサの食べ残しによる海洋汚染や水温上昇への対策などを学んだ。



海洋プランクトン観察

## (2) 海ゴミの学習



浜での海ゴミ回収

令和5年度に4・5・6年生は、海ゴミ拾いと海ゴミ調査を年間計3回行った。主に、5年生が中心となり、ゴミの種類や量、重さなどを昨年度の資料と比較したり、夏と冬での漂着物や量について比較したりした。SUPで近くの海岸に向かい、海ゴミの調査活動を行った。海ゴミは、プラスチックのゴミが多いと考えている児童が大半だったが、意外にも発泡スチロールの量が一番多く、結果にとっても驚いていた。また、ペットボトルのキャップや外国のゴミが想像以上に多く、国内だけの努力では難しいと感じ取っていた。一方、講師の先生からは、「太平洋ベルトに集まるゴミは、日本のものが一番多い」ことを教えてもらい、5・6年生は、自分たちの生活の中からゴミを減らしていくことを考えている。

海ゴミ調査を年間3回実施でき、経年比較や、夏と冬の季節による比較ができ、風向きや潮の流れや、季節によるゴミの種類(農業肥料のカプセル等)等、様々な視点から海ゴミについて分析や考察ができた。今年度も活動を継続している。

## (3) アップサイクルの活動



海ゴミ利用のアクセサリ作りについて考えるきっかけとなった。また、この地区に設置されたプラリサイクルベースにおいて、海ゴミのプラスチックを粉砕する機械の見学を行った。ここで粉砕された海ゴミプラをアクセサリ作りで活用しており、リサイクルの大切さとともに、活動による地域おこしの実態を学ぶ事ができた。

令和5年度に4・5・6年生は、海ゴミ拾いと海ゴミ調査を年間計3回行った。主に、5年生が中心となり、ゴミの種類や量、重さなどを昨年度の資料と比較したり、夏と冬での漂着物や量について比較したりした。SUPで近くの海岸に向かい、海ゴミの調査活動を行った。海ゴミは、プラスチックのゴミが多いと考えている児童が大半だ



メガSUPでゴミ回収へ



海ゴミの仕分けと計量

海ゴミのアップサイクルの活動を行っている。令和5年度の6年生は、海ゴミを活用した「ハーバリウム」作りを行った。今年度、4・5年生は、海ゴミ拾い・調査を行った際に、海ゴミのプラスチックを使用したアクセサリ作りを体験している。

どちらも海ゴミをアップサイクルする活動であり、ゴミを資源として捉え直すことで、今後自分達ができること



プラリサイクルベースの見学

### 3【单元名】内外海の魅力を広めよう！ 【対象学年・人数】 5・6年生

#### (1) 鯖街道踏破活動

6年生は、毎年小浜市から京都市に向けての古道「鯖街道」を歩く体験を行っている。鉄道や自動車普及する以前の時代には徒歩により、若狭湾で獲れた食材を奈良や京都に送り届けていたという歴史を元に、6年生が、小浜市から京都出町までを1日かけて徒歩とバスで踏破する体験である。古道を歩く児童は、鯖を背負って京の都に向かう昔の人々に思いをはせていた。ゴールの京都出町枳形商店街では、商店街の方からのねぎらいの言葉を頂き、「鯖街道踏破」のくす玉割りイベントにより大歓迎を受けた。児童からは商店街会長に、自分たちが漬けた“鯖のへしこ”をプレゼントし、小浜の鯖のPRを行った。児童はこの活動で、京の都とふるさと小浜の結びつきを感じるとともに、京から見る小浜の食の豊かさ、すばらしさを再確認できたと感じる。



京都出町枳形商店街に到着

なお今年度、文化庁は、福井県若狭の海産物を京都に運んだ鯖街道を中心とする小浜市と若狭町の日本遺産「海と都をつなぐ若狭の往来文化遺産群～御食国（みけつくに）若狭と鯖街道～」を、「特別重点支援地域（日本遺産プレミアム）」に全国で初めて選定した。これから鯖街道の学習は、さらにふるさと愛を高めてくれるものになると感じている。

#### (2) 修学旅行での広報

6年生の修学旅行では、大阪の京橋中央商店街において、小浜市の特産物の販売体験活動を行っている。その際、地域の特産物として自分達が漬けた“鯖のへしこ”を販売している。また、海ゴミアップサイクルの活動で作製した「オリジナルのハーバリウム」をお客さんにプレゼントし喜ばれた。



大阪での特産物販売体験

#### (3) 学びのアウトプット

1年間のふるさと学習の学びを校内学習発表会で各学年が発表し、保護者や地域の方々にご意見を頂いた。それぞれの学級で工夫した発表方法により、自分たちの学びを効果的に伝えることができた。

また、6年生が、ふるさと学習で学んだことを福井県立若狭高等学校SSHの発表会にて発表した。「ごみを減らして美しい内外海に」と題して、地域の海岸の海ゴミ問題の現状とゴミを減らすための取組、ゴミ問題を解決するために、自分は何ができるかについて発表を行った。多くの聴衆から、質問や意見を頂くことができ、この活動を中学校になっても継続していきたいと感じる児童が多かった。令和6年度末には、福井県のプレゼン大会においても発表を行う予定である。



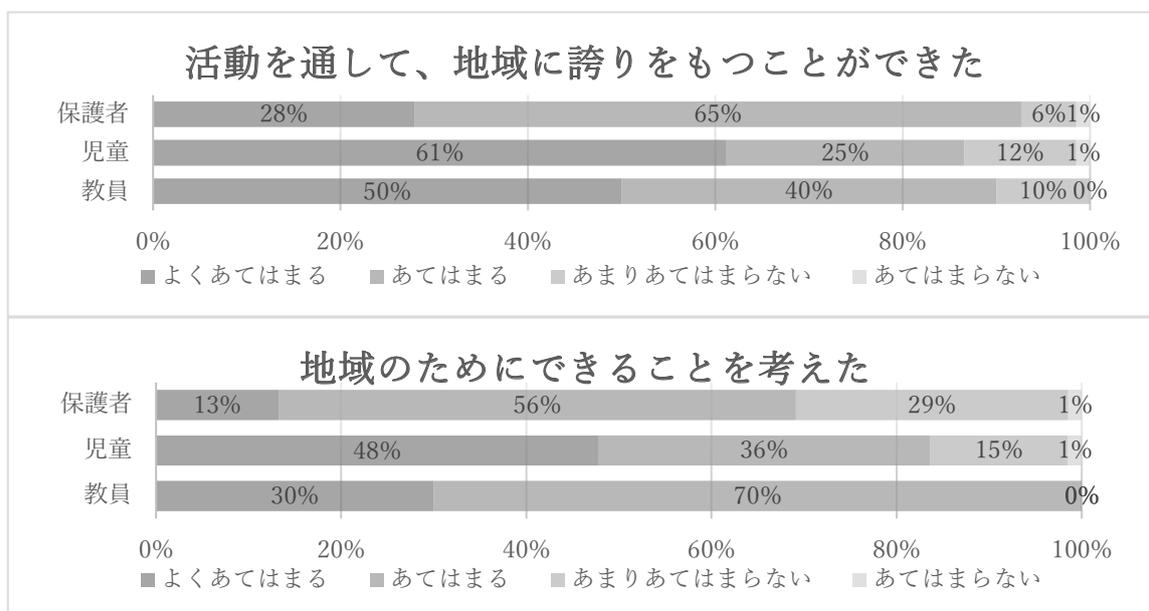
若狭高校でのポスターセッション

#### IV まとめ

##### 1 学校校評価から

学校評価の中で、「地域を愛し、地域に愛される子（地域に愛される学校）」を設定し、ふるさと学習を基盤として、地域と連携した体験活動の充実を図ってきた。ふるさとに親しむ活動が、ふるさとを愛する心を育て、守っていききたいとする思いを高め、持続可能な社会の担い手の育成につながることを期待し取り組んでいる。

下のグラフは、令和5年度末の学校評価アンケートの一部である。



学年により回答に幅はあるが、8割以上の児童から、肯定的な回答が得られた。今後さらにそれぞれの活動の目的を明確にし、児童にわかりやすく説き、活動に携わる全員が共有し取り組むことで、すべての児童が地域に誇りを持ち、地域のためにできることを考えられるよう、活動していきたい。

##### 2 活動を通しての成果と課題

ふるさと学習の諸活動において、児童が体験を伴う活動を経験することで、座学では学べない内外海の海の現実を学ぶことができています。また、校外学習や体験活動の事前学習、ふり返り、まとめなどを通して、各教科で学び得た「知識・技能」「思考・判断・表現の力」を活用することができた。ESDカレンダーによる教科横断的な学びを編成することで、厚みのあるふるさと学習に取り組んでいる側面もある。一方、継続的な取組の面から、教員の経験の差をどのようにフォローし合うかが今後の課題である。地域では、海の生業に従事されている方々が多く、「児童のためなら」や、「ふるさとの内外海を守り発展させていく人材を育成したい」等の思いを強くもっておられ、校外学習・体験活動をはじめ、本校の教育活動に大変協力的である。地域と課題意識を共有し、地域の方々と交流することを通して学習活動に取り組むことは、「ふるさと内外海」を愛する心を育むことにつながる。そのためにも、一層の教職員の連携や知識・技能の共有・伝達は必要不可欠である。

今後も、ふるさと学習を通して児童のふるさと愛を高め、持続可能なふるさと、社会を作っていこうとする意欲を高めていきたいと考える。

# 研究会沿革史

全国小中学校環境教育研究会  
東京都小中学校環境教育研究会

- 昭和39. 9. 10 東京都小中学校公害対策研究会が錦華小学校にて発足  
初代会長に 小野 孝雄 就任  
11. 13 会報「碧い空」創刊号を発行  
12. 11 講演会「公害と児童生徒の健康について」を開催（都PTAと共催）
- 昭和40. 1. 20 会長・副会長で四日市・尼崎方面の公害状況を観察
- 昭和40. 10. 5 公害講演会を開催（都PTAと共催）、空気清浄器を都内50校へ配布  
12. 1 都内児童生徒の公害に関する作文・詩募集
- 昭和41. 10. 1 全国主要都市の中学1年生を対象に公害意識調査実施
- 昭和42. 1. 20 都内小学校・中学校を対象に教育環境調査を実施、2月に結果を発表  
2. 13 全国小中学校公害対策研究会を発足（東京都港区立桜田小学校）  
東京・大阪・四日市・北九州・神奈川・千葉・釜石
- 
- 昭和42. 6. 1 第二代会長 伊藤 和 就任  
11. 1 東京都学校公害対策連絡協議会に協力
- 昭和43. 11. 7 第1回 学校公害研究大会を開催（代々木ゼミナール）
- 昭和44. 4. 10 都の学校に及ぼす公害対策研究会へ協力  
10. 10 第2回 学校公害研究大会を開催（東京都港区立桜田小学校）
- 昭和45. 2. 6 第3回 学校公害研究大会を開催（勤労福祉会館）  
2. 10 単行本「碧い空を子どもらに」を発行
- 
- 昭和45. 4. 1 第三代会長 中島 定吉 就任  
4. 15 東京都公害副読本・スライド製作委員を出し、その製作に協力
- 昭和46. 1. 10 第2回 全国調査実施「東京都及び七大都市の教育環境意識調査」  
中学1年・小学校5年生、都内4万名、七大都市8万名  
全国小中学校養護教諭対象「公害に関する意識と実態調査」35,000校  
1. 28 第4回「親と教師の公害研究大会」開催（勤労福祉会館）
- 昭和46. 10. 14 第5回 学校公害教育研究大会開催（東京都江戸川区立平井南小学校）  
11. 10 公害講座開講（朝日新聞社講堂）
- 昭和47. 6. 1 都内の児童生徒対象「公害意識と実態調査」実施
- 昭和48. 2. 20 第6回公害研究大会（東京都品川区立鈴ヶ森中学校）

- 
- 昭和48. 4. 1 第四代会長 立石 書信 就任 (中央公害審議会委員兼務)  
6. 5 都内の児童生徒の公害意識実態調査「教育環境調査」実施
- 昭和49. 5. 15 環境週間記念、都内の児童生徒の公害に関するポスター、作品募集  
7. 20 都内の児童生徒の夏季20日間健康調査実施
- 昭和50. 2. 10 第7回環境教育研究全国大会開催 (日本青年館)
- 昭和50. 5. 10 東京都環境週間行事に協力、都内児童生徒の図画・作文募集  
12. 5 第8回環境教育研究会全国大会開催 (東京都台東区立下谷小学校)
- 昭和51. 1. 10 東京都環境週間実行委員派遣
- 昭和51. 4. 20 東京都教育委員会副読本及びスライド編集に協力  
5. 10 東京都環境週間行事に協力、都内児童生徒の図画・作文募集  
9. 7 東京湾人工渚見学会を実施
- 昭和52. 1. 10 東京都環境週間実行委員派遣  
2. 21 第9回環境教育研究会全国大会開催 (東京文化会館)
- 昭和52. 5. 10 東京都環境週間行事に協九一都内児童生徒の図画・作文募集  
6. 10 東京都内児童・生徒20,000人に環境意識調査実施  
9. 19 「これからの環境教育はどうあるべきか」研究会開催  
(日本環境協会と共催)  
12. 6 江東清掃工場・東京湾埋立地見学会
- 昭和53. 1. 12 東京都環境週間実行委員派遣
- 昭和53. 5. 10 東京都環境週間行事に協力  
10. 31 人工渚・廃棄物埋立地等の東京湾及び宇宙博見学
- 昭和54. 1月～7月 環境週間東京都実行委員会に参加協力  
4月～6月 同上の行事の図画・作文募集に協力  
6. 5 環境教育講演会 (東商ホール)  
7. 17 公害副読本代表者会議  
9. 3 日本環境協会の映画企画の協力  
11. 30 都水道施設見学 (利根川水口)
- 昭和55. 2. 13 常任理事会 (朝霞浄水)  
2. 19 環境教育の講演と映画会 (労音会館)  
2. 21 第11回 全国環境教育研究大会 (東京文化会館)
- 昭和55. 8. 21 第12回 全国環境教育研究大会 (滋賀県大津市)  
11. 20 人工渚・廃棄物埋立地等東京湾見学会

- 
- 昭和56. 4. 1 第五代会長 谷本 寛 就任 (中央公害審議会委員兼務)  
4月～6月 東京都環境週間行事に協力  
6. 29 環境庁長官室にて本研究会役員と鯨岡長官、環境教育について懇談  
11. 20 隅田川・東京湾見学会 (隅田川クラブ後援)
- 昭和57. 1月～6月 環境週間東京都実行委員会に参加協力  
2. 5 第13回 全国環境教育研究大会 (東京文化会館)
- 昭和57. 4月～6月 同上行事の図画作文募集・審査協力  
10. 29 全体研究会 (於東京都教育会館 講師 愛知教育大学教授 榊原康男先生)  
11. 18 環境教育授業協議会 (東京都杉並区立方南小学校)
- 昭和58. 1. 25 同 上 (東京都江戸川区立上小岩小学校)  
2. 18 第14回 全国環境教育研究大会 (東京・関東百貨店健保会館)  
会報「碧い空」20号発刊  
1月～6月 環境週間東京都実行委員会に参加協力
- 

- 昭和58. 4. 1 第六代会長 藤田 繁雄 就任 (中央公害審議会委員兼務)  
4月～6月 同上行事の図画作文募集・審査協力  
11. 4 全体研究会 (東京都台東区立下谷小学校)  
講師 文部省初等中教育局 教科調査官 奥井智久先生  
11. 10 自本科学協会等主催、リモートセンシング研修会に協力
- 昭和59. 1. 20 第15回 全国環境教育研究大会 (東京文化会館)  
1月～6月 環境週間東京都実行委員会に参加協力
- 

- 昭和59. 4. 1 第七代会長 平野 輝和 就任 (中央公害審議会委員兼務)  
6. 9 第五代会長 谷本 寛 第2回朝日森林文化賞を受賞  
11. 29 環境教育研究授業及び協議会 (東京都渋谷区神宮前小学校)
- 昭和60. 1. 24 第16回 全国・東京都環境教育研究大会 (東京都江戸川区総合文化センター)  
1月～6月 環境週間都行事に参加協力
- 

- 昭和60. 4. 1 第八代会長 遠藤 尚 就任 (中央公害審議会委員兼務)  
6. 5 東京都台東区立下谷小学校にて総会
11. 18 千葉県船橋市立船橋小学校環境教育研究大会見学  
12. 5 東京都公害監視委員会と意見交換
- 昭和61. 1. 31 第17回 全国・東京都環境教育研究大会 (東京文化会館)

昭和61. 6. 6 昭和61年度 定期総会（東京都練馬区立光和小学校）  
10. 31 現地研修会（東京都八王子市立由木西小学校）

昭和62. 1. 23 第18回 全国・東京都環境教育研究大会（東京文化会館）

---

昭和62. 4. 1 第九代会長 塩沢 勇 就任（中央公害審議会委員兼務）  
6. 4 東京都台東区立大正小学校にて総会  
11. 9 現地研修会（東京都文京区立昭和小学校）

昭和63. 1. 29 第19回 全国・東京都環境教育研究大会（東京文化会館）

---

昭和63. 4. 1 第十代会長 小尾 辰昌 就任（中央公害審議会委員兼務）  
1月～6月 環境週間都行事に参加協力  
6. 6 昭和63年度 定期総会（東京都台東区立富士小学校）  
9. 17 都内児童の環境意識調査を実施  
11. 6 環境教育研究大会第11回大会参加（大阪・時乗 晃 副会長）  
11. 22 環境教育研究会 見学会（厚木市・七沢自然教室）

平成元. 1. 27 第20回 全国・東京都環境教育研究大会（東京文化会館）  
1. 27 会報「碧い空」26号発刊

---

平成元. 4. 1 第十一代会長 松澤 秀俊 就任（中央公害審議会委員兼務）  
6. 6 平成元年度 定期総会（東京都台東区立富士小学校）  
9. 5 環境教育研究会 見学会（つくば市公害研究所）  
環境教育研究会第12回大会参加（大阪・時乗 晃 副会長）

平成2. 1. 26 第21回 全国・東京都環境教育研究大会（東京文化会館）  
1月～6月 環境週間都行事に参加協力  
1. 27 会報「碧い空」27号発刊

平成2. 6. 6 平成2年度 定期総会（東京都台東区立富士小学校）  
9. 10 松澤秀俊会長 環境教育推進指導資料作成委員  
9. 20 環境教育研究会 見学会（台風のため中止）  
11. 30 第15回 全国教育研究大会に参加（国立教育会館 江頭 基子会計）  
12. 6 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都中央区立銀座中学校）

平成3. 1. 25 第22回 全国・東京都環境教育研究大会（東京文化会館）  
1. 25 会報「碧い空」28号発刊  
環境週間都行事の図画・作文募集審査への参加協力

---

平成3. 4. 1 第十二代会長 高木 恒治 就任（中央公害審議会委員兼務）  
5. 31 平成3年度 定期総会（江東区立東陽小学校）  
9. 19 環境教育研究会 見学会（神奈川環境センター）

11. 22 都小中学校環境教育研究発表会（江戸川区立松江小学校）  
平成4. 1. 31 第23回 全国・東京都環境教育研究大会（東京文化会館）  
会報「碧い空」29号発刊  
東京都環境実行委員会への参加  
環境教育シンポジウムへの参加  
全国ネットワークの強化活動  
東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力

- 平成4. 5. 29 平成4年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会（東京都渋谷区立本町東小学校）  
第十三代会長 岩本 光雄 就任（中央公害審議会委員兼務）  
7. 29 平成4年度 全国小中学校環境教育研究会定期総会（ホテルマリナーズコート東京）  
7. 29～31 教育総合展参加協力（研究発表・展示・実演）  
12. 8 東京都小中学校環境教育研究発表会（北区立豊島中学校）  
平成5. 1. 11 事務局 江頭基子 文部省環境教育指導資料作成協力（平成6. 3. 31迄）  
1. 29 全国小中学校環境教育研究大会（中央区立教育センター）  
会報「碧い空」30号、研究紀要24号発刊  
3. 31 環境教育研究集録 第3集発刊  
東京都環境週間行事実行委員会への参加協力  
文部省環境教育シンポジウムへの参加  
都教委グループ研究助成費受給  
全国ネットワークの強化活動  
東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力  
東京都環境週間行事運営委員会への協力（委員長：会長、副委員長：副会長）

- 平成5. 5. 23 平成5年度 東京都小中学校環境教育研究会 定期総会  
（東京都渋谷区立神宮前小学校）

- 平成6. 1. 18 第25回 全国小中学校環境教育研究大会（東京都庁 第二庁舎・ホール）  
会報「碧い空」31号、研究紀要25号発刊  
全国小中学校環境教育研究会支部長会・総会（東京都庁 第二庁舎・ホール）  
2. 24 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都大田区立西六郷小学校）  
3. 31 環境教育研究集録 第4集発刊  
文部省環境教育シンポジウムへの参加、協力  
全国ネットワークづくりの活動強化（支部結成）  
東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力  
東京都環境週間運営委員会への協力（委員長：会長、副委員長：副会長）

- 平成6. 6. 21 平成6年度 東京都小中学校環境教育研究会 定期総会  
（東京都渋谷区立神宮前小学校）

- 平成6. 11. 25 第30回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都江戸川区立南葛西第三小学校）

- 平成7. 1. 20 第26回 全国小中学校環境教育研究大会  
全国支部長会（東京都江戸東京博物館ホール）

会報「碧い空」32号、研究紀要26号発刊  
文部省、第1回全国環境フェアへの参加協力（埼玉県）  
東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力  
東京都環境週間運営委員会への協力（委員長：会長、副委員長：副会長）

3. 31 環境教育研究集録 第5集発刊

---

平成7. 6. 9 平成7年度 東京都小中学校環境教育研究会 定期総会  
全国小中学校環境教育研究会 定期総会  
全国支部長会（東京都渋谷区立神宮前小学校）  
第十四代会長 江頭 基子 就任（中央公害審議会委員兼務）  
8. 7 環境教育研究会 一日研修（港区立芝小学校）  
12. 4 第31回 東京都小中学校療育環境教育研究発表会（東京都北区立西浮間小学校）  
平成8. 1. 26 第27回 全国小中学校環境教育研究大会（福岡県福岡市、福岡市博物館）  
会報「碧い空」33号、研究紀要27号発刊  
文部省、第2回全国環境フェアへの参加協力（10. 30～11. 1 福岡県）  
東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力  
東京都環境週間運営委員会への協力（委員長：会長、副委員長：副会長）  
3. 31 環境教育研究集録 第8集発刊

平成8. 5. 30 平成8年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国支部長会（東京都渋谷区立神宮前小学校）  
4. 5 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）  
12. 6 第32回 東京都小中学校環境教育研究発表会  
第28回 全国小中学校環境教育研究大会（東京都渋谷区立神宮前小学校）  
会報「碧い空」34号、研究紀要28号発刊  
文部省 第3回全国環境フェアへの参加協力（11. 14 仙台市）  
東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力  
東京都環境週間運営委員会への協力（委員長・会長、副委員長：副会長）

平成9. 3. 31 環境教育研究集録 第7集発刊

平成9. 5. 23 平成9年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都杉並区立杉並第三小学校）  
第29回 全国小中学校環境教育研究大会（高知県民文化ホール）

平成9. 8. 28～29 東京都小中学校環境教育研究会研究部夏季宿泊研修  
(東京都杉並区立教職員研修所)

11. 18 第33回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都江戸川区小松川第二小学校）  
会報「碧い空」35号、研究紀要29号発刊  
全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施  
文部省 第4回全国環境フェア参加（松江市）  
東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力  
東京都環境週間運営委員会への協力（委員長：会長、副委員長：副会長）

平成10. 3. 31 環境教育研究集録 第8集発刊

---

平成10. 5. 22 平成10年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会

全国理事会（東京都杉並区立杉並第三小学校）

第十五代会長 中庭 武雄 就任

8. 2～3 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）

平成11. 1. 22 第30回 全国小中学校環境教育研究大会

第34回 東京都小中学校環境教育研究発表会

（東京都杉並区立杉並第十小学校、セッション杉並）

会報「碧い空」36号、研究紀要30号発刊

第2回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施

東京都環境週間行事の図画・作文募集、審査協力

東京都環境週間運営委員会への協力（委員長：一代会長、副委員長：副会長）

3. 31 環境教育研究集録 第9集発刊

平成11. 5. 21 平成11年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会

全国理事会（東京都渋谷区立笹塚小学校）

8. 22～23 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）

9. 25～26 自然観察会実施（新潟県・当間観光リゾート）

12. 7 第35回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都渋谷区立笹塚小学校）

平成12. 1. 21 第31回 全国小中学校環境教育研究大会（岐阜大学教育学部附属心・中学校）

会報「碧い空」37号、研究紀要31号発刊

第3回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施

文部省全国環境フェア参加（広島市）

環境パートナーシップ東京会議への参加

中央環境審議会企画政策部会と各種団体との意見交換会出席（経済社会のグリーン化）

3. 31 環境教育研究集録 第10集発刊

---

平成12. 6. 9 平成12年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会

全国理事会（東京都杉並区立杉並第十小学校）

平成12. 6. 9 第十六代会長 平部 武彦 就任

平成12. 8. 17～18 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区富士学園）

平成13. 1. 26 第32回 全国小中学校環境教育研究大会

第36回 東京都小中学校環境教育研究発表会

（東京都渋谷区立猿樂小学校・渋谷区立鉢山中学校）

会報「碧い空」38号、研究紀要32号発刊

第4回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施

第2回 自然観察会（新潟県・十日町市）実施

東京都環境週間行事運営委員会に参加

第3回 文部省全国環境学習フェア（三重）参加

平成13. 3. 31 環境教育研究集録 第11集発刊

平成13. 6. 8 平成13年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都杉並区立杉並第十小学校）  
8. 16～17 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）  
9. 8～9 第3回 自然観察会実施（新潟県刈羽村、当間リゾート）

平成14. 1. 25 第33回 全国小中学校環境教育研究大会  
第37回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都江戸川区立大杉小学校）  
会報「碧い空」39号、研究紀要33号発刊  
第5回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施  
第4回 文部科学省全国環境学習フェア（滋賀）参加  
環境パートナーシップ東京会議への出席  
環境教育、環境学習連絡会に出席

平成14. 3. 31 環境教育研究集録 第12集発刊

-----  
平成14. 6. 7 平成14年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都新宿区立大久保小学校）  
第十七代会長 佐々木 定治 就任

8. 15～16 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）  
9. 8～9 第4回 自然観察会実施（新潟県十日町市、当間リゾート）  
11. 15 第38回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都江戸川区立二之江中学校）

平成15. 1. 24 第34回 全国小中学校環境教育研究大会（千葉県成田市立吾妻小学校・吾妻中学校）  
会報「碧い空」40号、研究紀要34号発刊  
第6回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施  
第5回 文部科学省全国環境学習フェア（金沢市）参加  
環境教育、環境学習連絡会に出席

平成15. 3. 31 環境教育研究集録 第13集発刊

平成15. 6. 16 平成15年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都新宿区立大久保小学校）  
8. 14～15 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）  
9. 6～7 第5回 自然観察会実施（新潟県十日町市、当間リゾート）

平成16. 1. 23 第35回 全国小中学校環境教育研究大会  
第39回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都新宿区立大久保小学校）  
会報「碧い空」41号、研究紀要35号発刊  
第7回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施  
第6回 文部科学省 全国環境学習フェア参加（群馬県片品村）  
環境教育、環境学習連絡会に出席

平成16. 3. 31 環境教育研究集録 第14集発刊

平成16. 6. 14 平成16年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会

- 全国理事会（東京都杉並区立泉南中学校）
8. 9～10 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）
8. 28～29 環境教育研修会（福島県Jビレッジ）
9. 4～5 環境教育研修会（新潟県当開高原）
- 平成17. 1. 20 全国理事会
1. 21 第36回 全国小中学校環境教育研究大会  
第40回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都江戸川区立東葛西小学校）  
会報「碧い空」42号、研究紀要36号発刊  
第8回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール実施  
第7回 文部科学省 全国環境学習フェア参加（愛媛県松山市）  
環境教育、環境学習連絡会に出席
- 平成17. 3. 31 環境教育研究集録 第15集発刊

- 平成17. 6. 14 平成17年度 全国理事会  
平成17年度 東京都小中学校環境教育研究会総会（東京都杉並区立泉南中学校）  
第十八代会長 高橋 康夫 就任
8. 9～10 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（東京都杉並区立教職員研修所）
9. 3～4 環境教育研究会 自然観察会 新潟県 当開高原
12. 1 全国理事会
12. 2 第37回 全国小中学校環境教育研究大会（愛知県小坂井町立小坂井西小学校）
- 平成18. 2. 10 第41回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都調布市立布田小学校）  
会報「碧い空」43号、研究紀要37号発刊  
第9回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール  
第8回 文部科学省 全国環境学習フェア参加（鳥取県）

- 平成18. 6. 6 平成18年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都杉並区立泉南中学校）
8. 11～12 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修（杉並区立教職員研修所）
8. 25 第10回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
9. 2～3 自然観察会（新潟県塗当開高原）
11. 9 全国理事会（東京都杉並区立泉南中学校）
11. 10 第38回 全国小中学校環境教育研究大会（東京都杉並区立泉南中学校）  
第42回 東京都小中学校環境教育研究発表会  
会報「碧い空」第44号 研究紀要第38号発行  
第9回 文部科学省 全国環境学習フェア参加（つくば市）

- 平成19. 6. 12 平成19年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都杉並区立泉南中学校）  
第十九代会長 岸 栄子 就任
8. 9～10 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修会（東京都杉並区立教職員研修所）

- 、
- 8. 24 第11回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
  - 9. 1～2 自然観察会（新潟県当開高原）
  - 10. 11 全国理事会（埼玉県越谷市立大袋東小学校）
  - 10. 12 第39回 全国小中学校環境教育研究大会（埼玉県越谷市立大袋東小学校）
- 平成20. 2. 15 第43回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都多摩市立南鶴牧小学校）  
会報「碧い空」第45号 研究紀要第39号  
第10回文部科学省 全国環境学習フェア参加（岡山市）

- 
- 平成20. 6. 17 平成20年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（杉並区立泉南中学校）  
第二十代会長 綿貫 沢 就任
- 8. 4～5 東京都小中学校環境教育研究会夏季宿泊研修会（東京都杉並区立教職員研修所）
  - 8. 8. 22 第12回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
  - 9. 6～7 自然観察会（新潟県当開高原）
  - 12. 4 全国理事会（板橋区立金沢小学校）
  - 12. 5 第40回 全国小中学校環境教育研究大会（東京都板橋区立金沢小学校）  
第44回 東京都小中学校環境教育研究発表会  
会報「碧い空」第46号 研究紀要第40号  
第11回文部科学省 全国環境学習フェア（福島市）

- 
- 平成21. 6. 15 平成21年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（杉並区立和泉小学校）  
第二十一代会長 末吉 潤一 就任
- 6. 27～28 自然観察研修会（尾瀬ヶ原）
  - 8. 21 第13回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
  - 9. 5～6 自然観察会（新潟県当開高原）
  - 11. 26 全国理事会（広島県海田町立海田東小学校）
  - 11. 27 第41回 全国小中学校環境教育研究大会（広島県海田町立海田東小学校）  
会報「碧い空」第47号 研究紀要第41号

- 平成22. 6. 28 平成22年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都杉並区立杉並第四小学校）
- 6. 26～27 自然観察研修会（尾瀬ヶ原）
  - 8. 20 第14回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
  - 9. 4～5 自然観察会（新潟県当開高原）
  - 12. 2 全国理事会（多摩市立南鶴牧小学校）
  - 12. 3 第42回 全国小中学校環境教育研究大会（東京都多摩市立南鶴牧小学校）  
会報「碧い空」第48号 研究紀要第42号

- 平成23. 6. 16 平成23年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都新宿区立東戸山小学校）  
8. 19 第15回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式  
11. 24 全国理事会（宮城県気仙沼市立大谷小学校）  
11. 25 第43回 全国小中学校環境教育研究大会  
（宮城県気仙沼市立大谷小学校・大谷中学校）  
会報「碧い空」第49号 研究紀要第43号
- 

- 平成24. 6. 26 平成24年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都新宿区立東戸山小学校）  
第二十二代会長 棚橋 乾 就任  
8. 20 第16回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式  
平成25. 1. 2月 文部科学省・環境省  
平成24年度 環境教育に関する教職員、環境保全を担う者に向けた研修（協力）  
2月 文部科学省 全国環境学習フェア（協力）  
2. 14 全国理事会（東京都新宿区立東戸山小学校）  
2. 15 第44回 全国小中学校環境教育研究大会（東京都新宿区立東戸山小学校）  
第48回 東京大会（東京都新宿区立東戸山小学校）  
会報「碧い空」第50号 研究紀要第44号

- 平成25. 6. 18 平成25年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都新宿区立鶴巻小学校）  
6. 27 東京都小中学校環境教育研究会 研究員発足  
8. 22 第17回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式  
11. 28 全国理事会（秋田県大仙市大曲市民会館）  
11. 29 第45回 全国小中学校環境教育研究大会（秋田大会 秋田県大仙市）  
会報「碧い空」第51号 研究紀要第45号  
平成26. 1. 24 第49回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都多摩市立連光寺小学校）  
1. 2月 文部科学省・環境省  
平成25年度 環境教育に関する教職員、環境保全を担う者に向けた研修（協力）

- 平成26. 6. 17 平成26年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都新宿区立鶴巻小学校）  
7. 24 エネルギー研修会（東京ガス扇島工場、がすてな～あに見学）  
11. 20 全国理事会（神奈川県横浜市立永田台小学校）  
11. 21 第46回 全国小中学校環境教育研究大会（神奈川大会 横浜市立永田台小学校）  
研究紀要第46号  
12. 13 第18回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式  
平成27. 1. 30 第50回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都板橋区立板橋第二小学校）  
1. 2月 文部科学省・環境省

平成26年度 環境教育に関する教職員、環境保全を担う者にむけた研修（協力）

---

- 平成27. 6. 16 平成27年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都新宿区立鶴巻小学校）  
第二十三代会長 国分 重隆 就任
7. 24 エネルギー研修会（東京ガス扇島工場、がすてな～に見学）
11. 19 全国理事会（東京都多摩市立多摩第一小学校）
11. 20 第47回 全国小中学校環境教育研究大会  
（東京大会 多摩市立多摩第一小学校）  
第51回 東京都小中学校環境教育研究発表会  
会報「碧い空」第52号 研究紀要第47号
12. 12 第19回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
12. 23 文部科学省・環境省  
平成27年度 環境教育・ESDカリキュラムデザイン フォローアップ研修（協力）
- 平成28. 1・2月 文部科学省・環境省  
平成27年度 環境教育・ESDカリキュラムデザイン研修（協力）
- 

- 平成28. 6. 13 平成28年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都品川区立第三日野小学校）  
第二十四代会長 小山 成志 就任
7. 22 エネルギー研修会（東京ガス扇島工場、田町スマエネパーク見学）
8. 1 地球温暖化防止コミュニケーター養成講座（東京都品川区立第三日野小学校）
11. 17 全国理事会（須賀川市内ホテル）
11. 18 第48回 全国小中学校環境教育研究大会（福島大会 須賀川市立白方小学校）  
会報「碧い空」第53号 研究紀要第48号
12. 10 第20回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
- 平成29. 1・2月 文部科学省・環境省  
平成28年度 環境教育・ESDカリキュラムデザイン研修（協力）
2. 10 第52回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都品川区立第三日野小学校）
- 

- 平成29. 6. 12 平成29年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都品川区立第三日野小学校）  
第二十五代会長 野澤 由美 就任
7. 28 エネルギー研修会（東京ガス根岸工場、田町スマエネパーク見学）
7. 31 地球温暖化防止コミュニケーター養成講座（東京都品川区立第三日野小学校）
- 7・8月 J-Power エコ×エネ体験ツアー水力編 小学生親子ツアー（協力）
- 8・11月 文部科学省・環境省  
平成29年度 環境教育・ESDカリキュラムデザイン研修（協力）
12. 7 全国理事会（掛川市内ホテル）
12. 8 第49回 全国小中学校環境教育研究大会（静岡大会 菊川市立菊川西中学校）

- 会報「碧い空」第54号 研究紀要第49号
12. 9 第21回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
- 平成30. 2. 13 第53回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都中野区立鷺宮小学校）
- 平成30. 6. 14 平成30年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都品川区立第三日野小学校）
7. 27 エネルギー研修会（東京ガス新宿地域冷暖房センター見学）
8. 1 地球温暖化防止コミュニケーター養成講座（TKP新宿カンファレンスセンター）
- 8月 J-Power エコ×エネ体験ツアー水力編 小学生親子ツアー（協力）
10. 27～28 J-Power 先生方のためのエコ×エネ体験ツアー2018（協力）
11. 29 全国理事会（府中市内）
11. 30 第50回 全国小中学校環境教育研究大会（東京大会 府中市立武蔵台小学校）  
第54回 東京都小中学校環境教育研究発表会  
会報「碧い空」第55号 研究紀要第50号
12. 8 第22回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
- 12・1月 環境省 平成30年度 教職員等環境教育・学習推進リーダー育成研修（協力）
- 平成31. 2. 23 平成30年度 水産多面的機能発揮対策シンポジウム（協力）  
（全国漁業協同組合連合会、全国内水面漁業協同組合連合会）

- 
- 令和元. 6. 7 平成31年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会  
全国理事会（東京都杉並区立浜田山小学校）  
第二十六代会長 藤森 克彦 就任
7. 26 エネルギー研修会（東京ガス豊洲スマートエネルギーセンター見学）
- 8～2月 環境省 平成31年度 教職員等環境教育・学習推進リーダー育成研修（協力）
8. 8 J-Power 先生方のためのエコ×エネ体験ツアー2019火力編（協力）
10. 26～27 J-Power 先生方のためのエコ×エネ体験ツアー2019水力編（協力）
11. 21 全国理事会（富里市内ホテル）
11. 22 第51回 全国小中学校環境教育研究大会（千葉大会 富里市立根木名小学校）  
会報「碧い空」第56号 研究紀要第51号
12. 7 第23回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
- 令和2. 2. 7 第55回 東京都小中学校環境教育研究発表会（東京都町田市立南成瀬小学校）
- 令和2. 6月 令和2年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会・全国理事会  
（新型コロナウイルス感染症 感染拡大防止のため書面開催）
- 6月 第24回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール 中止
- 7月 エネルギー研修会 中止
- 9～3月 環境省 令和2年度 教職員等環境教育・学習推進リーダー育成研修（協力）
- 令和3. 2. 26 全国理事会（書面開催）  
第52回 全国小中学校環境教育研究大会  
第56回 東京都小中学校環境教育研究発表会  
オンライン開催（録画配信・期間限定録画配信）  
会報「碧い空」第57号 研究紀要第52号

- 
- 令和3. 6月 令和3年度 東京都小中学校環境教育研究会定期総会・全国理事会  
(新型コロナウイルス感染症 感染拡大防止のため書面開催)  
9～3月 環境省 令和3年度 教職員等環境教育・学習推進リーダー育成研修 (協力)
10. 30 高尾山自然観察会 (東京都八王子市高尾山)
11. 19 全国理事会 (書面開催)  
第53回 全国小中学校環境教育研究大会  
第57回 東京都小中学校環境教育研究発表会  
オンライン開催 (録画配信・期間限定録画配信)  
会報「碧い空」第58号 研究紀要第53号
11. 20 リサイクル研修会 (協力)  
(主催: スチール缶リサイクル協会・日本製缶協会・日本缶詰びん詰レトルト食品協会・教育家庭新聞社)
11. 27 第24回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
- 令和4. 6月 東京都小中学校環境教育研究会定期総会・全国理事会  
(新型コロナウイルス感染症 感染拡大防止のため書面開催)
8. 2 リサイクル研修会 (協力)  
(主催: スチール缶リサイクル協会・日本製缶協会・日本缶詰びん詰レトルト食品協会・教育家庭新聞社)
8. 5 御岳山自然観察会  
9～3月 環境省 令和4年度 教職員等環境教育・学習推進リーダー育成研修 (協力)
11. 28 第25回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
- 令和5. 1. 28 全国理事会 (書面開催)  
第54回 全国小中学校環境教育研究大会  
第58回 東京都小中学校環境教育研究発表会  
オンライン開催 (録画配信・期間限定録画配信)  
会報「碧い空」第59号 研究紀要第54号
- 
- 令和5. 6月 東京都小中学校環境教育研究会定期総会・全国理事会 (書面開催)  
第二十七代会長 関口 寿也 就任
8. 4 御岳山自然観察会
8. 8 リサイクル研修会 (協力)  
(主催: スチール缶リサイクル協会・日本製缶協会・日本缶詰びん詰レトルト食品協会・教育家庭新聞社)  
9～3月 環境省 令和5年度 教職員等環境教育・学習推進リーダー育成研修 (協力)
- 令和6. 1. 13 第26回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
1. 26 第55回 全国小中学校環境教育研究大会 (東京大会 エコルとごし)  
第59回 東京都小中学校環境教育研究発表会  
対面・オンライン同時開催 (オンライン中継・期間限定録画配信)  
会報「碧い空」第60号 研究紀要第55号
-

- 令和6. 6月 東京都小中学校環境教育研究会定期総会・全国理事会（書面開催）
7. 25, 29 東京都カーボンハーフ推進教育フォーラム発表（都研究部）
8. 2 御岳山自然観察会
8. 8 東京都環境局主催 小学校教員向け環境教育研修会（協力）
- 9～3月 環境省 令和6年度 教職員等環境教育・学習推進リーダー育成研修（協力）
12. 1 第27回 全国小中学校児童・生徒環境絵画コンクール表彰式
12. 26 第56回 全国小中学校環境教育研究大会（東京大会 エコギャラリー新宿）  
第60回 東京都小中学校環境教育研究発表会  
対面開催（後日期間限定録画配信）  
会報「碧い空」第61号 研究紀要第56号

# 大会宣言

環境教育は、人類を含めた地球上の生物全体にかかわる課題である。近年の地球温暖化等の環境問題は、自然の生態系に変化を与えるほど深刻な事態となっている。個人や社会全体がこれらの課題解決に早急に取り組むことで、持続可能な社会づくりを図らなくてはならない。環境教育はこの課題解決を図るための重要な学びであり、この地球上に生物が生存・繁栄を続けるために必要な教育である。

ここに、第56回全国小中学校環境教育研究大会、第60回東京都小中学校環境教育研究発表会を開催し、次世代を担う児童・生徒の環境にかかわる教育の在り方を追求するとともに、本大会に結集された総意をもって次の決意を表明し、その実現を期す。

- 一 環境教育は、地球的視野に立ち、地域に根ざした活動を通して生涯にわたる学びとして推進する。
- 一 環境教育は、自然を愛護すると共に、環境保全意識や環境倫理観、豊かな人間性を育む。
- 一 環境教育は、環境に対する正しい知識や、課題解決に取り組む能力を育成し、持続可能な社会づくりのための人材を育成する。
- 一 環境教育の小中学校での指導は、各教科や総合的な学習の時間、特別活動などすべての学びを通して実践し、指導を充実させる。

以上、宣言する。

令和6年12月26日

第56回全国小中学校環境教育研究大会

第60回東京都小中学校環境教育研究発表会



21世紀「環境の世紀」への提言

持続可能な社会づくりのための環境教育の推進

—環境教育で育む学力と環境保全意識—

令和6年度

第56回 全国小中学校環境教育研究大会（東京大会）

第60回 東京都小中学校環境教育研究発表会

研究紀要

令和6年12月26日 発行

発行 全国小中学校環境教育研究会  
会長 関口 寿也

編集 研究部長 鈴木 元

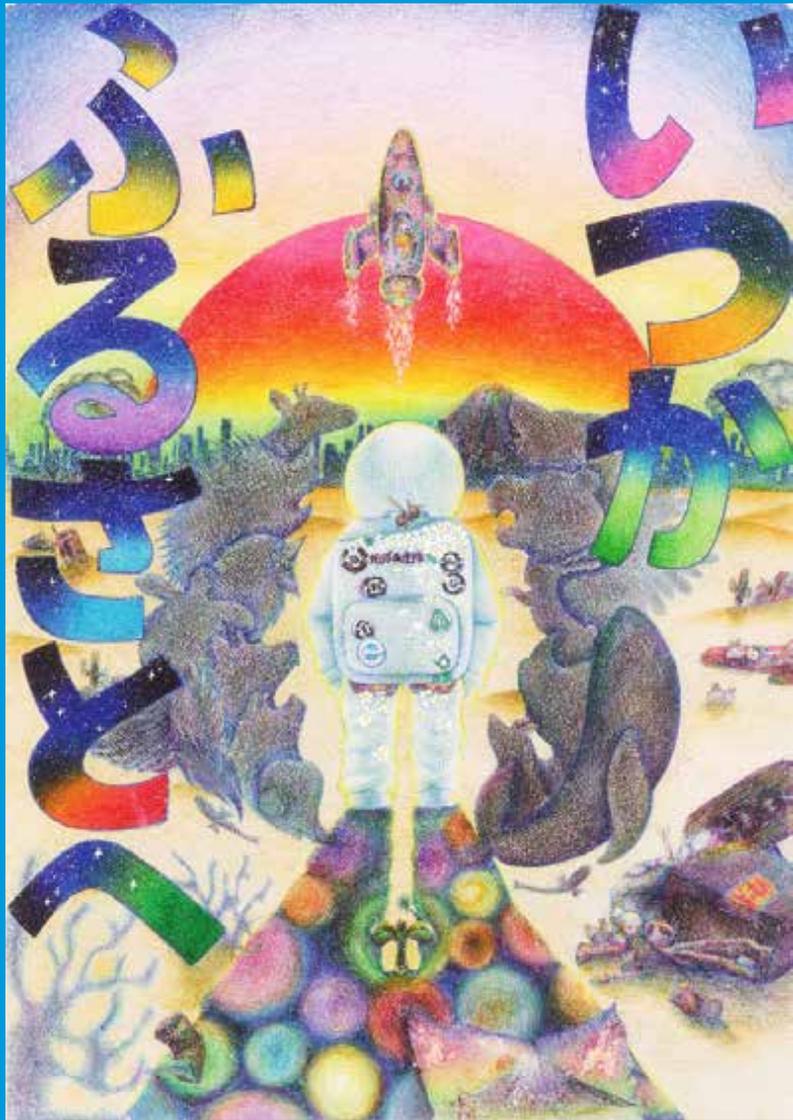
事務局 東京都世田谷区立城山小学校  
校長 佐藤 弘典

東京都世田谷区梅丘2-1-11

TEL 03-3429-2062

印刷所 (株)東京巧版社

TEL 03-3881-4173



全国小中学校環境教育研究会  
東京都小中学校環境教育研究会